

東方能開録(完結)

T—ruth

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天童拓也（てんどうたくや）は幼馴染みの化野言音（あだしのことね）を助けるために死んでしまった

しかし、それは神様の手違いのせいだった

神から転生の機会を貰った拓也は東方projectの世界へ

注意：作者は、文章の作成能力がミドリムシ並なため、誤字、つじつまが合わないストーリー、変な文章の作り方など多々至らない点があります、ご了承下さい。

目次

第零章 プロローグ

第一話 転生 | 1

第一章 古代編

第二話 出会い | 8

第三話 能力者 | 14

第四話 軍入隊試験 | 18

第五話 神様からのオカシナ仕送り | 26

第六話 恩返し | 30

第七話 チーム結成 | 38

第八話 緑教官 | 46

第九話 暗い過去 | 50

第十話 始動 | 54

第十一話 音無鈴 | 60

第十二話 ツクヨミ様の勧誘 | 64

第十三話 贈物 | 68

第十四話 初めての気持ち | 74

オリキャラ説明 | 78

第十五話 出発 | 82

第十六話 絶望 | 86

第十七話 力の暴走 | 94

第十八話 RESTART | 97

第十九話 教官始めました | 105

第二十話 紙の力 | 110

第二十一話 剛力妹 | 115

第二十二話	霧の探し物	121
第二十三話	響かせる音	127
第二十四話	月移住計画	132
第二十五話	守る為に	136
第二章 諏訪編		
第二十六話	神様始めました	144
第二十七話	大和の国との交渉	150
第二十八話	特訓よりも飯	155
第二十九話	祀られました	160
第三十話	神無月の神のお祭り	165
第三章 飛鳥編		
第三十一話	神社が増えた	169
第三十二話	聖徳太子って男だよね？	173
第三十三話	暇な護衛	177
第三十四話	邪仙と対面	181
第三十五話	V S 天狗	185
第三十六話	Level 5を超える	189
第三十七話	V S 天魔	193
第三十八話	帰宅	197
第三十九話	少しの違和感	202
第四十話	尸解仙になるには	206
オリキヤラ説明2		212
第四章 竹取物語編		
第四十一話	境界を操る妖怪	216
第四十二話	月の姫からの難題	221

第四十三話	V S花の大妖怪	225
第四十四話	輝夜の頼み	230
第四十五話	対、月の使者の作戦会議	235
第四十六話	ヒーローは遅れてやって来る	238
第四十七話	昔の仲間、今の敵	241
第四十八話	逃げるが勝ち	246
第四十九話	語らい	252
第五十話	神社の名前	256
第五章 妖怪の山編		
第五十一話	天狗の山、再び	259
第五十二話	あれ？身長縮んだ？	262
第五十三話	鬼は嘘をつかない	266
第五十四話	破壊の力	270
第五十五話	暴走再び、そして決着	273
第五十六話	妖刀村正	279
第五十七話	心の中	283
第五十八話	昔の話	286
第五十九話	御影閣	289
第六十話	ゲーム	292
第六章 西行妖編		
第六十一話	紫の頼み	296
第六十二話	幽々子と西行妖	300
第六十三話	恐れていた事態	304
第六十四話	最凶の桜	309
第六十五話	勝利のための犠牲	312

第七章 開放編

第六十六話 天童妹が幻想入り

第六十七話 開放の鍵

第六十八話 陽菜の特訓

第六十九話 賢者からの忠告

第七十話 異変の始まり

第七十一話 灰色の男

第七十二話 復活

第七十三話 戦闘開始

第七十四話 岩雨異変、解決

第七十五話 光の行方

第七十六話 続く異変

第七十七話 開放者

第七十八話 援助

第七十九話 煙の妖怪

第八十話 黒い痣

第八章 現世復帰編

第八十一話 今の力

第八十二話 帰宅②

第八十三話 学校へ行こう

第八十四話 帰り道

第八十五話 手紙

第八十六話 勉強そして、テスト

第九章 紅魔編

第八十七話 暑い日、赤い霧

385

379

375

372

368

365

360

357

354

351

348

345

342

340

338

335

332

329

326

322

319

316

第八十八話	紅い館に侵入したら閉じ込められた件	388
第八十九話	狂気	392
第九十話	助けを求める・・・	395
第九十一話	妖化	399
第九十二話	お兄様!?	402
最終話	幻想郷は今日も賑やかだ	405
オリキャラまとめ		408

第零章 プロローグ

第一話 転生

「お前ムカつくんだよ!」

「それはこっちのセリフよ!」

その日、俺、てんどうたくや天童拓也は幼馴染みの化野あだしのことね言音と喧嘩をしていた。

「だいたいお前はいつも……」

「今は、関係ないでしょ!?!」

こんな感じでかれこれ一時間程度言い合っているが、一向に収まらない。

「ふん、アンタには失望したわ。」

「ああ、そうかよ。」

「絶交よ!」

「ああ、ぶ勝手に!」

「……ふん!!」

そのまま、喧嘩別れのように俺と言音は別れた。

言音の方は走って横断歩道を渡ろうとしていた。

その時、言音は気付いていなかった、信号が赤なことを……

「ちよ、言音!?!」

声を掛けるが言音は気づかず進んでゆく、もしくは喧嘩をしているためわざと無視をしているのかもしれない。

今は、それどころではないと言うのに。

ブーとトラックがクラクションを鳴らしながら言音に向かって突っ込んでゆく。

トラックがクラックションを鳴らしたところで言音は初めてトラックの存在に気がついたようだ。

しかし、時は既に遅くトラックのブレーキは間に合うはずがない。トラックは、そのまま言音に着々と近づいて行く

言音は、恐怖で足がすくみ、動けなくなっていた。

「あのバカー！」

気がつくのと、俺は無我夢中で走り出し言音を突き飛ばした。

言音の代わりに、トラックの前を入れ替わるようにして……

ドンと、トラックが俺の体に衝突し、とてつもない衝撃と痛みが体を襲い、俺の体は赤い血をまき散らしながら空を舞った。

ドツサと鈍い音を立てながらコンクリートの地面に叩きつけられた。

肺が圧迫され息が出来ず、血で視界が霞む。体を動かそうと思っても重く、言う事を聞かない。

「~~~~~!?!」

言音が慌てて近づいて何か言っているが聞き取れない。

俺のだんだん視界が暗くなっていった。

「ゴメンな、言音。」

そう一言振り絞るように言い、そして意識を失った……

目を覚ますと知らない場所にいた。

「…知らない天井だ。」

そこは、上も下も右も左も真っ白な空間だった。

「ここホント何処だ？」

「死後の世界じゃよ。」

「!？」

突然の受け答えに驚いて振り向くと、そこには仙人のような格好をした老人が立っていた。

「アンタは…いったい？」

「ワシか？」

いや、アンタ以外に、誰がいるんだよ。

「ワシは、神じゃ。」

「紙？」

「神じゃ！」

「ああ、髪。」

「違う！　p a p e rでもh a i rでもないわ　神じゃ　G o d
じゃ。」

えー　いきなり、自分は、神とか中二病かよ……　こんな爺さんに
なつてまで中二病とか終わつてんな。」

「全部口に出てるんじゃないが。」

おつとイケナイ、イケナイ神様（笑）に怒られちゃった。

「何が神様（笑）じゃ　これでも列記とした、しっかりとした神じゃ。」

あれ？　俺、今も声出したっけ？

「出し取らんよ。」

「!?」

「心の声を読んだんじゃない。どうだ？　これで、神と信じてくれるか？」

「まあ、信じてやるよ。で？　なんで俺は、ここにいるんだ？」

そう質問すると神様は真剣な顔になった。

「実はのお……」

ゴクリと唾を飲み込み続きを聞いた。

「お前は死んだ」あつ、そのへんはなんとなく理解してるんで。」あつ、
そうですか。」

ゴホンと咳払いをし、神は続けた。

「実は、お主はまだ死ぬ運命じゃ無かったんじゃない。」

「はあ？　それってどういう意味？」

「天界には、魂の火があるんじや。それをワシがMAXコーヒーをこぼして鎮火してしまっただんじや。」

「えっ?なに俺マツ缶で死んだの?」

マツ缶で俺の魂を消しやがったのか……

「えくつと何と言うか……ドンマイ。」

「糞神がああああ!!」

「ちよつと、まっグツホオオオオ!?!」

俺は、殺人神の顔を思いつき蹴っ飛ばした。

神様(笑) 回復中

「いや、酷い目にあっただわい。」

「自業自得だあ!!」

ピンピンしてやがるな、コノヤロ〜!もう一発いっとくか?

「いかんでよい!?!」

まあまあ、そんなお主に転生の権利をやろう。」

「え、マジっ?」

「マジ。本気と書いて、マジじゃ。」

いい奴じゃん、蹴ってゴメンネ。

「さらに特典も一つ付け「好きナだけ。」え、いや、でも「いいから。」「……はい。」

よっしゃ!これで、チーターになってやるぜ!!

「じゃあ、まず、能力に『能力を操る程度の能力』を付けてくれ。」

「ナニソノチート。」

「ほっとけ。」

後、身体能力とかを上げといて。あとは、このままで転生させてくれ、赤ちゃんからとか洒落にならんからな。

あと、住む家と金に困らないように仕送りしてくれ。」

「種族とかも決めれるが、どうする?」

「面倒だからそっちで抽選しといて。」

「じゃあ、それでいいか?」

「おう!」

「行くぞ…… スペラビッチョン、スペラビッチョン。」

呪文だせえな……

「転生〜!」

呪文が終わると同時に、俺の真下に穴が開いた……………えっ?
俺は重力に従って落下してゆく。

「頑張るんじゃぞ〜。」

「糞神がああああ!!」

ぜってえく、許さんぞおおお!!」

そして俺は、新たな人生を歩み始めた。

第一章 古代編

第二話 出会い

「うおおおおああああ!!」

俺は、糞神様のせいで空に放り出され落下し、そのまま、木の中に落ちていった。

体に木の枝が次々と打ち付けられる。ものずごく痛い。

「痛っうう。あれ？転生したのか？」

周りを見渡す限り木、木、木。

転生して放りだされたのは、どこか知らない森の中だった。

「あの駄神め、呪ってやる。」

そんなことを考えていると、ポケットに違和感を感じる。

ポケットに手をつ突っ込み確認すると紙が入ってた。

地図と……能力説明書!!

待つてました能力!

せっかくだから試すか……そう俺は、紙に目をとおし始めた。

「えっと、まず『パラメーター基礎能力アップパワー：パワー(力)スピード(速)アタック(攻)プロテクト(守)テクニク(技)アビリティ(能)の六つがある。』」

パラメーター基礎能力アップ

パワー(力) 全体の力をアップ

(速) スピード 速度アップ
(攻) アタック 攻撃力アップ
(守) プロテクト 防御力アップ
(技) テクニク 技術の模倣
(能) アビリティ 特殊能力アップ
よし！それじゃあ、試すか。 　　つてところかな？

少年体験中

よおろし パラメーター 基礎能力アップは大体出来たな。他の能力は能力者がいないと、意味ないからまた今度でいいか。

しかし、一回で三つまでしか出せないのがネックだな……
大体出来たから帰りますか、と地図を取り出した。

しかしここで重要なことに気づいた。地図には家の位置が書いてあったが、現在地がわからないのだ。

やべえどうしよう……

(……) ウーン

「貴方はこんなところで何やっているの？」

不意に声を掛けられた。見ると赤と青の服を着た女の子が怪しげにこちらを見ていた。

転生して放りだされた、って言っても信じないだろうしなここは……

「うーん、迷子？」



私は、薬作りに必要な薬草採取しに来ていた。

「オニナバナ、アメジストセージ、アシタバ、サンナ。あとは、オオバコね。」

日も暮れてきたし早く帰らないと、妖怪に会ったりしたら洒落にならないわ。

「あつた！これで全部ね。」

薬草を集め終えて帰ろうとすると、唸る声が聞こえた。

妖怪かと思つたが見ると男の子がいた。

なんでこんな時間に森で一人にいるのか疑問に思い声をかけた。

「貴方はこんなところで何やっているの？」

すると少年は、少し間を置いて…

「うーん、迷子？」

何故か疑問系で返してきた。

「…いや嘘でしょ。」

「それが本当なんだなく。」

なんか信憑性が感じられないわね…
妖怪かもしれないから気を付けないと…

「いや、ちょうど人がいて助かったわ。」

男の子はスタスタと近づいて来る。

「近づかないで！」

護身用の弓を向けると男の子は止まった。

「イヤイヤイヤイヤ、初対面の人にそんな物騒なもん向けんなや!?
お父さんはそんな子に育てた覚えはありませんよ!？」

「貴方は私の親ではありません、育てられた覚えがありません!?
大体今、自分で初対面の人って言ったよね!？」

睨みつけ弦をさらに強く引く。

「あ、ハイ スミマセン。」

「矢、一本いいかしら?」

「ちよちよっと待って!?!俺は、道を聞きたいだけだから!?!」

慌てて男の子は、静止を求める。

「はあ、どこに行きたいの?」

「ここだよ。ここ。」

男の子は地図を出し、指をさす。

「まあ、信じましょう。」

「え?マジ?なんで?」

「そんなに疑って欲しいの?」

「イヤイヤ、そんなことはない。ただ何でかなって。」

「あなたから感じたのが霊力だった、それだけよ。」
「そっか……俺は、天童拓也だ 拓也でいいぜよろしく。」

拓也は、握手を求めるように手を出してきた。

「私は、八意永琳^{やごころえいりん}。永琳でいいわ。」

「おう、よろしく永琳……あれ？握手は？」

「別にする必要ないでしょ。」

私は謎の男、拓也を案内することになった。

少年少女移動中

いや、永琳がいて助かったな。家に行けなきや仕送りも貰えない
し野垂れ死にするとこだった。

歩くこと数分で街についた。白い壁に覆われた街は、まるで未来の
都市のようだ。

「……よ。」

お？どうやら着いたようだ。

見るの少し大きめの一軒家が建っていた。

「それじゃ。」

「おう、ありがとう。」

永琳は、素っ気なく帰って行ってしまった。

第三話 能力者

家を手に入れて数日間がたった。分かんない事はだいたい永琳に聞いたぜ！ってかほとんど永琳の家にしたしな。

だが、あんまりしつこく行くせいか玄関にパスワード付けられてしまった。

クソー、別に来てもいいじゃんか。

「えっと、数字のパスワードか……」

何文字かも分からないしどうしようかな。

うーん。としばらく考えてでた結果は……

「テキストウに入れてみるか……」

だった。

え？諦める？俺の辞書に、そんな言葉は都合のいい時しかない！！

「じゃあ、試しに…… 8^ャ 5^ゴ 5^コ 6^ロって単純過ぎてないか。」

と、自分の発想力の無さを悔いていると扉の方からピッーガチャと甲高い機械音が響いた。

あれ？開いた？マジかよ……



「邪魔するぞ、永琳。」

「…… パスワードをつけたはずだけど？」

部屋に入ると、いかにも不機嫌そうにこちらを睨んできた。

「解いたよ、安易すぎだよ。」

「また変えないとね。」

「変えなくていいから！ってか変えないで!？」

「で、何の用？薬作りで忙しいからそこで回れ右して帰ってくれる？
と言うか帰って。」

とにかく俺に帰って欲しいようだ。何？俺、嫌われてるの？泣いちやうよ？

「確かに、いつも来て、薬品こぼしたり薬品こぼしたり薬品こぼしたり、あれ？薬品こぼす、しかやってない」

「しかやってないじゃない！」

「まあまあ、今日は用があったから来たんだよ。」

「そう。で、何の用？」

追いつ返すのを諦めたのか、そう聞いてくる。

「能力者って、どこに行けば会える？」

「なんで？能力者を？」

「いや、俺の能力『能力を操る程度の能力』で能力の真似が出来るんだけど、それを試したいと思ってさ。」

「なるほど・・・能力者なら目の前にいるわよ。」

「え？」

「『あらゆる薬を作る程度の能力』それが私の能力よ。」

「まじかよ、永琳なんで教えてくれなかったんだよ!？」

「聞かれてないから。」

当たり前でしょ？、って言う感じでバツサリ言ってくる。

「早速やってみたら？」

永琳は、どこかワクワクした感じで言ってくる。

「なにワクワクしてんだよ？」

「別に、もし貴方が能力真似できたら手伝わせることができるから。」

俺を働かせるつもりか！嫌だ絶対ブラック企業だよ！社畜にはならないって決めたんだ！

「で、やってみたら？」

「お、おう。」

ポケットから茶色い紙……能力説明書を取りだす。

「えっと、『能力模倣アビリティコピー能力名を知る、能力を認識するこの二つが成されると模倣ができる』って書いてある。」

「じゃあ、私の能力は無理ね。認識ができないから。」

「えっ！マジで。残念だな……他に能力者いないの？」

「軍の妖怪退治部門に入ればいくらでも会えるわよ。」

よしならそこへ行くか、そう思い家を飛び出す。

しかし、飛び出して数秒後あることに気づく。軍の場所知らないや……



「で、どこ行けばいい？」

「連れてって行ってあげるから、もうちょっと離れて!?!」

気がつとだいぶ至近距離まで迫っていた。慌てて後ろにのけぞる。

「あ、ありがとうな。」

「明日ちようど軍の戦力補充試験があるから、そこに行きましょ。」
「試験って何するの？」
「知らないわ。」

第四話 軍入隊試験

「永琳〜！起きろおおおお!!」

俺は、試験会場まで連れてってもらったため、玄関で待っていた。え？なんでいつもみたく侵入しないかって？

だって永琳のやつ、パスワード変えたあげく、錠前五つ、鍵穴五つ、さらにパズルみたいなロックを付け足しやがったんだよ!!

俺が何したって言うんだよ!!

※注（いろいろしてます）

「んー、おはよう拓也。で、何の用?」

しばらくしてから永琳が眠たそうに目をこすりながら出てきた。

「今日、試験会場まで連れてってくれるんだろ?」

「そうだったけ?」

「シラを切るな!」

「わかった わかった。」

「うあ、テキトウ。」

「わかった?」

「なぜ、疑問系!?!」

「準備してくるから待ってなさい。」

そう言って、家の中に戻っていった。早く来ないかな……



「さて、行きましようか。」

「一時間炎天下の下待たした事に関して何もなしかよ。」

「ゴンメンナサイ。ハンセイシテマス。（棒）」

うあ、棒読みじゃん。

酷くねえ？俺が何をしたっていうんだ!!

※注（色々しています）

「さっさと行きましよ、間に合わなくなるわよ。」

それは困る。

俺は、永琳の後について行つた。

▼▼▼

「ついたわよ、あそこに行けば受験登録できるわ。」

「サンキュー。」

永琳と別れてゲートに向かう。そこで入口が二つあることに気づいた。

「あれ？永琳どっちに入ればいい？」

振り返って聞くとそこには永琳の姿は、なかった。

あいつ置いて帰りやがったな、まあいいや人に聞こう……

▼▼▼

やっと試験会場まで来れたぜ。

会場の中にはざつと3、400人ぐらいの人が居た。まだ、少しざわざわしていた。俺は、端の方に行き壁に背中を預けた。

「やあ、諸君今日は集まってくれてありがとう。」

前に出た教師っぽい人が話し出した。その瞬間、騒がしかった会場が静まった。

「今年の受験者数は、400人だ。その中で合格できるのは、戦闘派、サポート派合わせて40人だ」

うえ、少な…… 10分の1しか受かんないじゃん。

「戦闘派から、30人サポート派から、10人選出する」

よし俺、戦闘派にするか。え？なんでかって？受かる人多いからに決まってるだろ？

「それでは、戦闘派、サポート派と分かれて試験を行う、各担当についていってください。」



「よし、頑張るぞい。」

「戦闘派の皆さんには、実際に戦ってもらいその戦闘力を見て決めさせていただきます。戦う相手はくじ引きで決めてもらいます。」

さっさと取りに行くかと足を踏み出した時、ドンと誰かにぶつかって倒してしまった。

銀髪の長めの髪で後ろでポニーテールにしている女の子だった。

その子は多分、美人の分類に入ると思うぐらい綺麗だった。俺は、慌てて手を差し伸べる。

「すみません 大丈夫ですか？」

しかし、その時何かが頬をかすめた。

恐る恐る見ると銀色に輝く剣があった。

「次やったら殺す。」

怖！何この子!?!殺気バンバンに出しているんだけど、さつきかわいいとか思ったのなし、怖すぎ!!

銀髪の女の子は、剣を消すと行ってしまった。

いやー怖かったな、つかあの剣どこから出したんだ？

そんな疑問を持ちつつクジのほうを見る。まだ人がたむろっている。

残り物には福があるって言うし最後に行くか、そう思いながらクジの人が減るのを待った。

しばらくすると人が減っていく。もうそろそろ良いかな？クジの方に行きクジを引く。一個しかない、本当に最後だったな。

「えっと「G-3」か……相手はどんな奴かな。」

Gルームに向かいながらそんなことを考えていた。



残り物には福があるって言葉作った奴出てこい、ぶっ飛ばしてやる

!!

目の前の相手を見ながらそう思った。なんで相手がさつきの女の子なんだよ。怖いよ！やだよ!!拓也おうち帰る!!!

「お互い準備はいいですか。」

良いわけあるかと思っててもそんなこと言えない。

「これから天童拓也対音無鈴の試合を始めます……。それでは、始め

!!

始まちやたよおおお!!



音無は、剣を取り出すと一気に間合いを詰めて剣を振るが拓也は、ギリギリのところで躲す。

「あぶねえ!!」

「チィ。」

拓也は、距離をとって能力を発動する。

「パラメーター基礎能力アップ (攻)アタック (守)プロテクト (速)スピード。」

攻撃力、防御力、速度をアップさせて音無近づき拳を放つが盾が現れそれを防がれる、そして剣が拓也を襲う。

ザクつと剣が手を捉え手からは、血が少しだけたれた。

「いっ!?!」

これ以上は危険と思い後ろに飛ぶが、剣がそれを追ってくる。

「くっそー!」

拓也は、裏拳で剣をはじくが剣をはじいた後から大量のナイフが拓也襲う。

「息付くヒマ無しかよ。」

「アタック (攻) チェンジ 変更 パワー (力) !!」

攻撃を捨て防御力と速度をさらにアップさせて回避する。

回避の途中気づくと足元に液体があった、嫌な予感がし上へ飛んだと同時に剣山となった。

「たつく…その能力なんなんだよ。」

着地しながら拓也は音無に問う。

『『金属を操る程度の能力』よ、金属の質量、形状、種類を変えることができるの。』

といいながら大量のナイフを投げってくる。

「そりやすごい能力だ。」

転がりながら回避し起き上がる。

「だがこれで突破口が見えた、」

拓也は、ニイっと不敵に笑った。

「アビリティコピー能力模倣 コピー模倣対象 リン「鈴」!!」

一瞬青い光が拓哉を包んだ。

そして、拓也は音無が放ったナイフを一つ掴み手ごろな剣にした。

「なっ、私と同じ能力!？」

「行くぜ!」

間空いを詰めて剣を振るが防がれる。

「剣技の差があるな…… なら基礎能力アップパラメーター（技テクニック）（力パワー）」

剣技コピーしさらに上回る。

「くっ。」

音無は少しずつ後ずさっていく。

「俺の勝ちだろ？」

「ま、まだよー！」

水銀を足元に流し剣山を作ろうとするが……

「アヒリテイストップ能力停止!!」

水銀は動かない。

「なんで、なんでなの、なんで動かないの!？」

「お前能力を停止させた。」

「なっ、そんな事！」

「出来るんだよな。まあ、こっちも能力使えないんだけど。」

「く、くっそお!!」

音無は剣を捨て殴りかかって行った

「俺の勝ちだ。」

音無を殴り返し、そして音無は意識を失った。

「よっしやあああああ!!勝った勝つぜ!!」

「勝ったことに拓也は喜んでいたが、突如剣山が拓也を襲った。

「がっ!？」

拓也の体から大量の血が流れ出ていく。

アヒリテイストップ
能力停止は、能力を停止させる事が出来るがあくまで停止である

最後 音無鈴が作ろうとした剣山が能力を解いた途端発動したのだった。

「やべえ、ミスった……」

そして、拓也の意識は暗闇に落ちた。

第五話 神様からのオカシナ仕送り

知らない天井だ……

「あれ？なんかデジャブ。また死んだか、俺。」

「生きてるわよ。」

声をした方に顔を向けると、永琳が呆れた顔をして座っていた。

「一生目覚めなければ良かったのに。」

「縁起でもないこと言わないで!!」

「まあ、いいわ。」

よくねえよ!?

「貴方は、あれから3日間ずっと寝ばなしだったわ。」

3日か…… っつて3日!?

「それにしてもすごい生命力ね、普通の人なら死んでいたわよ。」

「マジですか…… まあとにかく介抱してくれてありがとう。」

「そう、じゃあ……ん。」

そう手を出してきた。

「えっ、なに?」

「お金。」

「え、とるの?」

「もちろん♪」

3万とられました……



帰ってきました我が家！

見ると。ポストがパンパンになっていた。

神からの仕送りか？

とりあえず、全てを家に持ち込む。

「ん？これ神からの手紙か？」

『おっす、元気か拓也。仕送りの時機が汚くて整理面倒だから色々お
くったぜ（笑）そこにあるもんはすべてあげるから

神より』

ふざけてんのか？

「まあいいや見てみよう。」

まず封筒を手にとって中を見た。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能《ギフト》を試すこ
と望むのならば、

嫌な予感がして手紙を投げ捨てた。嫌な予感は的中して手紙は光
り輝き消えた。

あぶねえ！箱庭に飛ばされるところだった。

ん？神からの仕送りであった、MAXコーヒーの箱ずめがない！
楽しみにしてたのに……



「あっ痛っ！」

「大丈夫ですか？」

「何なんだよこれ…… MAXコーヒー？」

その後。箱庭でMAXコーヒーが流行りました。



次は…… レポート？

「なにに、レディオノイズ『量産位能力者』シスターズ「妹達」の運用 レベ超能力者5「一方通行」の
レベ絶対能力への進化法

シスターズ「二万人の「妹達」を殺害……」

うん、なんか危なそうな話だな。関わらないが吉だなこれ。

次、次。ん？感想文か？

『青春とは嘘であり、悪である。』

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き自らを取り巻く環境を肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも、青春のスパイスでしかないのだ。

仮に失敗することが青春の証であるのなら友達作りに失敗した人間もまた青春のド真ん中でなければおかしいではないか。

しかし、彼らはそれを認めないだろう。

すべては彼らのご都合主義でしかない。結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者ども、

砕け散れ。』

コイツ悲しすぎだろ!? ぜって友達いねな、ぼっち最強とか言っている奴だわ。ってか何この作文なんのお題で書いたらこんなになるの？



「へっくしゅん!!」

「おにいちゃんかぜ?」

「ああ、誰かが噂しているのかもな。」

「噂してくれるような人いた?」

「……」



色々あるなホント。

ん?なんだかこれだけえらく未来チックだな。そう思い、USB
ぐらいの機会に触る。

『ピピッ! 本人確認オコナイマス、天童拓也サマデスカ?』

「え、ああ、はい。」

『ピピッ! 声認証確認、本人度99.98%。次ハ顔ヲ認証シマス。』

『顔認証完了。本人度99.98%。本人確認終了。』

そう言つて空中に画面が出てきた。

なにこれ? ハイテクすぎるたる。

えっと…… 試験合格の知らせ…… え、マジ合格したの?

よっしやああああ!!

ん、首席…… マジ?

第六話 恩返し

「永琳!!」

「うわあ!!何処から入ってきているの!?!」

「え?窓だけでも?」

だって、ドアから入れないもん。ボクワルクナイ。

「窓って…… まあいいわ。それでどんな要件?」

「いやー実は、俺合格しまして、今まで永琳に迷惑かけたし、なんか手伝えること無いかなーと思ひまして。」

「あら、迷惑かけている自覚あつたの?」

「ソコまで考えられない人と思つてたの!?!」

「ええ。」

「即答!?!」

マジか…… アレ?目から汗が出てきた。おかしいな。

「そうねえ、手伝えるね…… 薬のじつ「却下!!」まだ言いきつてないのだけど。」

「今、薬の実験台つて言おうとしたよね!?!嫌だよ死にたくないよ!!」

「チィ。」

「舌打ちした!?!」

「じゃあ、薬草採りに付き合ってくれるかしら?」

「それなら、オツケーだ!!」

こうして、二人で森へ移動した。



「じゃあ、そっちの方よろしくね。」

「おう!!」

さあーて、始めますか。

このキノコ食べるのかな？

確か名前は……ベ、ベニ、ベニテングダケだっけ

見た目スパークキノコだしな、マリ〇もデカくなってたし食べたらデカくなるかも。

「きゃああああ!!」

……
今のは永琳？



油断したわね……妖怪しかも鬼に合うなんて。

「ミーツケター。」

「チィ。」

声の方へすかさず護身用の矢を放つが、いとも簡単にあっさりと弾かれてしまう。

「おらー!」

「きゃー!」

腹を蹴飛ばされるが、転がりながら距離を取り矢を放つが鬼の出した液体で矢は、朽ちてしまった。

そして、鬼は次々と液体を放ってきた、それを転がり回避する。

液体は地面に生えている草を腐らせていった。

私は、矢を放とうと弓を構えるが鬼に弓を折られてしまう。

ここまでなの？ 拓也、いつも無駄な時に来てないで、こんな時こそ来なさいよ!!

思っている間にも鬼は、少しずつ近付いて来る。1歩1歩着実に……

そして鬼の手が掛かろうとした時。

「えいりいりいりいんん!!」

拓也^{ヒロ}はやつて来た。



「永琳!!大丈夫か!?!」

「たつく、遅いわよ……」

掻き消えそうな声で返してくる。

「よくも、永琳を!!」

膨れ上がる怒りを抑えつつ、目の前の相手を睨む。

「よくも、よくもよくもよくもよくもよくもよくも!!」

「た、拓也?」

「永琳ちよつと待ってて、すぐに終わらすから。」

そう言い永琳をその場にとどまらせた。

「いやー、食べる奴が増えてほんと嬉しいよ。」

鬼は、負ける気がないのかニヤニヤしている。

「まあ、応名乗っておこう、俺様は劣鬼だ
しかも能力持ちでな『劣化させる程度の能力』っていうだ。」

劣鬼はそう言いつつ液体をこちらに向けて放ってきた。とつさに能力を発動させる。

「アビリティコピー
能力模倣 模倣対象「鈴」。」

拓也は音無鈴の能力『金属を操る程度の能力』を使用して液体を防ぐ、が液体が触れたところが赤黒くなりボロボロに崩れてしまった。

「ひゃひゃひゃ」

劣鬼は次々と液体を飛ばして来る。ガードを諦め回避に専念することにした。

「パラメーター
基礎能力アップ（速）！！」

速度アップをし回避し音無鈴の能力で剣を作り斬りかかるが、劣鬼は液体を自分の前に持つてくる。すると、剣が液体を通過するとき、また赤黒くなりボロボロに崩れてしまった。

「オラオラオラオラ」

劣鬼は攻撃を回避しながら拓也は、ブツブツ呟いていた。

「劣化させる程度の能力……植物……腐食………金属……
赤黒い……崩れる………そうか。」

なにか閃いた拓也は、また剣を作り劣鬼に向かった。

「さっきので無駄だと分かんねえかなあ？」

劣鬼は、自分の周りに液体を発生させる。そして、剣が液体を斬り裂きボロボロに……………

ならず、劣鬼を斬り裂いた。

「があ!？」

「よし! やつぱりか。」

「何故だ!! 何故、俺様の能力が効かない!!」

「お答えしよう、お前の能力『劣化させる程度の能力』だったけ? お前の能力は草など植物は腐らせていたが、金属は、腐るはずがない、じゃなぜボロボロになったか…………… 状況から考えてそれは“サビ”だ。だから俺はサビにくい白金ブラチナで剣を作ったってわけさ。」

「そんな事……………」

「まあいいや。お前には、永琳の痛みをしつかり教え込まないといけないからな。」

「やめろ! くるな!!」

「基礎能力アップパラメーター (力)パワー (攻)アタック 吹き飛ばし屑野郎!!」

拓也は白金ブラチナで巨大なバットを作り叩きつけた。

「があ!!」

劣鬼は弧を描きながら飛んでいき見えなくなった。

「いっちょあがり!!」

終わったそう思った矢先に拍手をしながら他の鬼が出て来た。

「劣鬼を倒すとは、なかなかやりますね。」

「褒めても何も出ねえぞ。」

「手合わせ願いたい。」

そう言いながら鬼は走り出し近づいてきた。もうすでにやる気満々だそうだ。

「我が名は重鬼^{じゅうき}。いざ勝負!!」

「わざわざ自己紹介ありがとう。基礎能力アップ（攻）（守）（速）^{アタック プロテクト スピード}。」

重鬼の突きをギリギリでかわす。

「うお!?!はや!!」

「ふむ。今のを躲すか…なら。」

重鬼は片手を前に出し上から下へ振った。

「なっ!?!おもっ!!」

急に拓也の周りに重さが加わりクレーターができた。

「ふん!!」

「があは!!」

謎の重さによって動けなくなっているところに重鬼の突きが拓也の腹刺さる。そのまま吹き飛ばされ3度地面を跳ねて木にぶつかる。

「重力^{グラビテーション}「重力拳」!!」

「グアハ!!」

口から血を吐きながらフラフラと立ち上がる。意識が朦朧としてる…… やばいな、なんか手を考えないと。

何かいい方法は…… そうだ!!

「ほう、まだ立つか。だが次で終わらせる！」

重鬼は一気に距離を詰め拳を放つ。俺は宙を舞い永琳の近くまで飛ばされた。

「拓也!?!」

永琳が心配そうに声を上げて近づいてくる。痛いけど、作戦は成功だ。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

殴った方の重鬼が悲鳴をあげる。みると、重鬼の右腕がドロドロになっ

「アビリティコピー」能力模倣 模倣対象「劣」…… お前の相方の能力だよ身にしてみたか？」

「貴様!!」

重鬼は、さっきまでの冷静さを失い拓也に突っ込んで行った。

「アビリティストップ」能力停止。」

能力を停止させると重鬼の速度が一気に落ちた。

「やっぱりお前は重力操作をしてたんだな。能力はそのまま『重力を操る程度の能力』だろ？ 重力を軽くして自分の速度を上げてたんだな。」

拓也は遅くなった重鬼の前に立ち金属バットで殴りつけた。

「グウ!?」

「お返しだあ!!アビリティコピー能力模倣コピー模倣対象「じゅう重」。重力「グラビティショット重力拳」!!」

重力のかかった拳を放ち重鬼に直撃させる。重鬼は、そのまま吹き飛ばされ倒れた。

「よしやあああああ!!あ、ヤバ……」

目の前が歪み拓也は倒れた。

この後、永琳さんに家まで運ばれました。

第七話 チーム結成

「いやーまた、永琳の世話になったな。」
「別にいいわよ。」

鬼との戦い後俺は、また永琳に世話になった。

「それにしてもホントに回復が早いわね。」

「まあーな。」

「それじゃそろそろ行くのね。」

「おう。」

今日から軍の方で寮生活することになったのだ。

「それじゃあ、気をつけてね。」

「あれ？そう言えば今回は金取らないの？」

「いいわよ、それよりも無茶だけはしないでね。あつ、この回復薬持って行って！」

「永琳が優しすぎて逆に怖い。」

「し、失礼ね！」

鬼との戦い以来なんか永琳が優しくなった。

前はちよつとぶつかっただけで邪魔だのなんだの言われたけど最近はぶつかると顔を赤くして逃げていく……なんかそんなにも嫌われることしたっけ？

「じゃあ、行ってくる。」

「いってらっしゃい。たまには顔出しなさいよ。」

前は来るなって言ってたのに……女心はわからん。

俺はそんな疑問を持ちながら軍へ向かった。

が……

十分後

「……ここは、どこ?」

迷子になった。



あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!イライラする。何なのよあのドヤ顔は!?天童拓也、絶対この借りは返してやる。

そんな事を考えながら私、音無鈴は軍機地に向かって歩いていると……

「あつ!おーい、音無。」

聞き覚えのあるムカつく声が聞こえる。

「おーい、音無さーん!」

「……」

「音無鈴さーん!!」

「……」

「聞こえますかー!ちょっと、そこの鈴さーん!!」

「……」

「無視はく寂しいですね。」

「……」

「あれ?名前違ったけ?」

「……」

「反応してくださいよ(泣)」

「……」

「おーい、おーい、おーい、おーい、おーい、おーい」うるっさいわね!!「お、やっと反応してくれた。」

「で?何?私今忙しいのだけど。」

「いやーその、道を聞きたくて……」
「はあ？道？」

この辺別に複雑な地形じゃないのに、迷うって相当の方向音痴ね。

「で？どこへ？」

「あれ？案内してくれるの？」

「して欲しくないの？」

「いや、是非ともお願いします!!」

「で、何処なの？」

「軍の基地です。」

「軍の？あなたも受かったの？」

「つてことは、音無もか……フッフ、聞いて驚くな俺は首席合格だ
！」

「あっそう。」

「反応薄くない!？」

くっそ！わたし19位だったのに……悔しさを押し殺して軍基地に向かった。



音無なんか怒ってんのかな？すごいイライラが伝わってくるんだ
けど……

「ついたわよ。」

「あ、ありがとうございます。」

「それじゃあ。」

あ、行っちゃた……俺も行くか……

軍基地の中に入るとだいぶ人来ていた。やることがないので、

ぼーっとしてっていると前に教師ぽい人が出てきた。

「皆には、ここにいる人で4人1組でグループを作って欲しい。」

え、グループ？俺知っている人、音無ぐらいししかないし……音無から嫌われているし……どうしよう。

そんな風に戸惑っているとガタイのいい赤髪の一人の男が話しかけてきた。

「お前、天童拓也だよな？」

「そ、そうだけどお前は？」

「ごうりきかなめ剛力要だ。要って呼んでくれ。突然だけど、俺とチーム組まないか？」

「別にいいけど……またなんで俺と？」

「俺、入試30位でギリギリだったんだ。だから、一位のお前と組もうってワケ。」

「なるほど……あれ？俺が首席ってどうやって知ったんだ？」

「鈴に聞いた。」

「鈴って音無鈴？」

「そう。」

「もしかして恋人とか？」

「いやいや違う違う。」

要は横に手を振る。

「俺は恵さん一筋だから。」

誰だよ恵って。

「ほかには決まってるのか？」

「おう、俺と恵さん 後、鈴「やっぱいいや。」え？」

「音無いるんだろ？」

「お、お願いだからよ。」

「やだよあいつ怖いもん。」

「一日一個のアイス買ってや「いいだろう。」るから。」

契約を交わした俺と要はがっしりと握手した。

コレでアイス食べ放題!!



俺は要にグループに誘われてついて行った。

「では、自己紹介してきましょう!!」

要が司会を努めます。

「まずは、俺 剛力要だ！よろしくなー。」

うん 見た目どうりフレンドリーな奴だな。

次は、茶髪の少しカールのかかった長めの髪の女の子が話し出した。

「わ、私は薬師恵やくしめぐみです よよよ よろしくしますー！」

この人が恵さんかちよつとオドオドしすぎじゃない？

深呼吸深呼吸。ヒーヒーフーあ、これは違うわ。

「音無鈴…… よろしく。」

うあ、相変わらず無愛想だな、コイツ。

「鈴く、何。ピリピリしてんだよ。」

「なんでもない!!」

下手に刺激しないで!!

最後は俺か……

「天童拓也だこれからよろしくな。」

ここに第七班が結成された。



「いやー、アイスうまかったなー。」

要との約束のアイスを貰って寮に向かっていた。

「えーっと、俺の部屋はA棟の303号室か……ルームメイトどんな人だろう?面白い人がいいな……」

希望を持ってその扉開く。

そして中にいたのは……

着替え中の下着姿の音無鈴だった。

「え?」

「へ?」

二人して目を丸くする。

現状が理解できない。少しの間沈黙が空間を包む。

「いいから出てけえええええ!!」

しばらくして、怒鳴り声と共にナイフが飛んできた。

「す、すみませーん!!」



「ナンデ、アナタガココニイルノ？」

ちよつと、いやすごく怖いです。ほら笑顔、笑顔。

「いや、ここが俺の部屋だからだよ。」

「馬鹿言わないで！ここは、私の部屋よ。」

「あれ？もしかしてルームメイト？」

「冗談言わないでよ！あなたがルームメイトとか。」

俺に言われてもな……

「まあ、いいわ。ルームメイトとしてあなたに守って欲しいことがあるわ。」

まあいいんだ……俺あんまり嫌われてないのか？

「喋りかけない。」

あつ、やっぱり嫌われてました。

「目を開けない。動かない。」

ん？

「息をしない。」

「おい、それ俺死んでるよね!?!」

前言撤回!!俺、嫌われてるのレベルじゃない超嫌われている!!

「そしたらベランダで過ごしてもいいわ。」

「部屋の中ですらない!!」

この後、なんとか仕切りを作ることで納得しました。

第八話 緑教官

俺達第七班は森に来ていた。

「私は、この班を一年間鍛え上げる教官の草壁緑だ!!よろしく!!」

深い緑の髪の毛のサングラスをかけた女の人が出た。

なんかオーラがすごいな。

「はい、はい!」

要が元気良くアピールする。

「なんだ?」

「鍛えるって、実際何するんですか?」

「うむ、いい質問だ。今日はみんなの能力の確認と霊力についてだ!皆ついてきたまえ!!」

そういう緑教官の後をついて行き岩場に来た。

「よしそれぞれ能力を見せてくれ!!」

「じゃあ、俺から。」

要がくるくると肩を回しながら出てきた。

お、要の能力見るのなにげに始めてだな。

「いくぜ!!」

要は岩に向かってパンチをくり出した。えっそれだけと思ったら、次の瞬間、岩はドンと音を立てて穴があいた。

「俺の能力は『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』だ。」

何その物騒な能力……強そうだけど。

「じゃあ。次は、私が。」

音無は知っているからいいか……ということだ 《割愛》

「あゝ。」

薬師さんが不安そうに手を挙げる。どうしたんだらう？

「なんだ？」

「私の能力『傷を癒す程度の能力』で回復系なんですけど……」
「そうか、ならいい。次。」

えく！薬師さん回復系なら見せて欲しかったな。回復系持つてないし欲しかったな……まっ、いいか。

「センサー！」

「教官とよべ!!」

「教官!!」

「なんだ？」

「教官の能力を見せてください！」

だって気になるもんこんなにオーラ出してるし……強そう。

「うむ、いいだろう。ハアアア!!」

教官が力を込めると植物が動き出した。

「私の能力は『植物を操る程度の能力』だ!!これでいいか?」

「ありがとうございます。では、俺も行きます『能力を操る程度の能力』です。」

能力模倣^{アヒリテイコビ} 模倣対象^{コピー}「緑」^{みどり}」

教官の能力を使い植物を巨大な根を出して操り岩をくだいた。

「なっ!?!」

「わっ!!」

「おお!!」

「チィ」

教官と薬師さんは驚き、要も声を上げる。つてか音無さん舌打ちしたよね? 酷くない?

「よし、これで能力確認は終了だ!!次は、霊力についてだ!!」

「霊力?」

「霊力について知っているものは……いなそうだな。霊力とは、人間の体の中に流れる力のことだ。」

体の中で流れているのは血液しか知らんな。中国の拳法とかの気みたいな物か?

「口で説明するより見てもらった方が早いな。」

そう言うとき教官は手を出し力を込めた。すると、手の上に青白い球体が現れた。

「これが霊力ですか?」

「そうだ、薬師恵。まあ厳密に言うとき霊力を丸く固めたものだが。お前らには、これを出れるようにしてもらう。霊力が操れるようになれ

ば、この弾をたくさん作り弾幕としても使えるし、剣などに纏わせれば丈夫になる、さらに空も飛べるようになるぞ。」
「「空を!!」」

空を飛べると言う単語に全員で食いついた。

「そうだ、練習をするぞ」

「「おー!!」」

「.....」

音無さんそこは、言おうよ.....



そして練習が始まった。

「霊力は体の中で流れている、体から力を出すのイメージだ!!」

「力みすぎだ力を抜け!!」

「イメージだ！イメージするんだ!!」

そして、教官のスパルタ練習のおかげで一週間で霊力操作をできるようになりました。

第九話 暗い過去

「よっしゃー！行くぞお！」

俺達、第七班は初討伐任務に出ていた。

「うるさい、バカ。張り切りすぎて、ミスしないでよね。」

「しねえよ、音無こそ足引つ張らないようにな。」

「私がそんなへマすると思ってるの？」

「あのお、そろそろ目的地なのですが……」

薬師恵は、オドオドしつつ状況を言う。おっ、もうそんな時間か。

「よし行くぜ！音無、要。」

「おう！」

「私は、私でやらしてもらおうわ。」

今回の討伐任務は、妖怪の群れの討伐だ。妖怪の数は推定30〜40匹というものだった。

草むらから飛び出すと同時に音無が無数のナイフを飛ばす。そのナイフは、数匹の妖怪の体に刺さる。ギャアと妖怪は、声を上げて倒れる。

動きを鈍らせた妖怪を要が能力を使い腹に穴を開け、俺が音無の能力を使い首を飛ばす。

紅い血が緑の木々を染めていく。

「あつ、私の獲物。邪魔しないでくれる。」

「早いもん勝ちだよ。」

「……」

「あつ、きれた。やべえ、拓也逃げろ!!」

「へっ？」

上を見るといつもより大量のナイフがあった。

「鈴符「降り注ぐ刃」!!」

「ちよつと、待って!!」

俺たちのいるのもお構いなしで音無はナイフを投擲した。妖怪の殆どは「ギヴアアアアアア」と奇声を上げ動かなくなる。

「よしー!」

全て倒したそう思っていた音無の背後から数匹の妖怪が飛び掛る。それに反応し、ポウチから金属版を取り出そうとした、しかし金属版がきれていた。防御の体制が間に合わない。妖怪の手がそこまで迫っていた。しかし、その手が届くことは、なかった。

「アビリティコピー能力模倣 コピー模倣対象「みどり緑」!」

植物の槍が妖怪を貫いたのだ。

「ふいー。危なかったな音無、大丈夫か?」

「余計なことしないで、助けてなんて誰も言っていないから。」

「うんうん……ってあれ?」

予想外の返答に拓也は戸惑う。ここって普通ありがとうだよな?戸惑っている俺を無視して音無は行ってしまった。

「たつく……何なんだよアイツ。」

「まあ、そう言ってやんなて。」

「でもよお。」

「鈴には昔、色々あったんだよ。」

「色々ってなんだよ?」

納得がいかず要に聞き返す。しかし、要は俺を見ず空を見ながら言葉濁して言った。

「色々だよ……………そう色々……………」

音無鈴の父は、軍の部隊の司令官を勤めていた。

音無鈴の父は、部隊の中でも3本の指に入るほどの実力者であった。

そのため、音無鈴は生まれる前からとてつもなく強い子だと過度な期待をされていた。

生まれたあと厳しい訓練をさせられていたが少しも成長せず父に追いつかなく大人たちから貶されつづけた。

特訓もいつしかイジメのようになっていた。

心のよりどころであった母は、音無鈴が小さい時に病気でこの世を去ってしまった。

音無鈴を助けてくれる人は、いなくなったのだ。

母が死んでから音無鈴は、一人で努力し続けた。

努力して、努力して、努力し続けた。

しかし、音無鈴を認めるものは、誰もいなかった。

音無鈴は、努力した。剣の腕をあげて、能力も開花させた。

しかし、誰も褒めてくれなかった。

いつしか、音無鈴は、人と関わることを拒むようになった。

何もかも自分でやろうとした……………

助けなんていらない.....

仲間なんていらない.....

私は、一人でいい.....

第十話 始動

「今日は、暇だな。」

俺は大きな欠伸をしながら、隣の要に言った。

「おい、しつかりやれよ拓也。」

要に叱られるが、本当に暇だな防衛任務。

ピンポンパーンポーン☒？

防衛任務

街の周りをおおっている壁、その周辺の森の妖怪の侵入を防ぐことである。ほとんど妖怪は、来ないので超暇

ピンポンパーンポーン☒？

それにしても、音無どこまで行ったんだろう？



数分前

「おい、音無どこ行く気だよ？」

「森の方の確認。」

「危ねえから一人で行くんじゃねえぞ。」

「問題ない。」

「あ、ちよ、待て！」

つてな感じでどっか行っちゃたし……大丈夫かなと、今までの音無を思い出す……うん、大丈夫だろう。にしても暇だな。そんなこと

とを考えていると、遠くから爆発音が聞こえた。

「なんだ今の爆発!？」

「それ俺が聞きたいわ! 兎に角向かってみるか……音無も心配だな。」

「わかるが一人は残ってないとまずいから、俺は残っているな。」

「おう、よろしくな要!」

無事だろうな、音無。俺は、速度をあげて森に入っていた……



「はああ。」

私は、大きなため息漏らした。

最近、あの馬鹿ども天童と要が妙に絡んできて疲れたわ……特に天童拓也、アイツが特にウザイ。なんかある事に私の目に入ってきて……あく、思い出ただけでイライラしてきた。

ふと、目が動くものを捉えた。あれは、妖怪!?

普通はここで撤退&報告だけどイライラしているしストレス発散相手になつてもらおう。

「たあー!」

「ギヤヤヤアアア!？」

剣で一番近くの奴を斬る。

残りは3匹……楽勝ね。

金属版をナイフに変え投擲する。一匹の眉間に刺さり倒れてゆく。あと、2匹。

「きやあ!？」

振り向いた途端残りの2体の妖怪に吹き飛ばされる。体中に途轍もない痛みが走る。

「何してくれるんだ？」

油断した能力持ちか……だが私能力で、つてあれ？

「あれれ？どうしたのかな？」

私のポウチの中の金属版が木の板になっていた。多分、ニヤニヤしているやつ有能力だろう。

さつき、私を吹き飛ばしたやつがまた私を攻撃してくる。ギリギリで回避をしようとするが少し拳がかする。

これぐらいなら、と思っただが痛い。かすった程度のはずなのに痛い。何なのこれ!?

「オイオイ、もうギブアップかよ？」

2匹の妖怪がゆつくりと近付いて来る。

ああ、ここまでか……でも、戦いの中で死ぬるなら本望か……すべてを諦め、目を閉じようとした時……

「音なあししいいいいいいいい!!」

そいつは、来た。

願ってなくても来る、お人とよしの嫌な奴………天童拓也が。

「音無大丈夫か？」

なんで？

「怪我とかしてないか？」

なんでコイツは……

「遅くなって悪かったな。」

「……んで？」

「え？」

「なんで助けたのよ!? 私は、もういいの!! この先、生きてたってどうせ意味ないし、私が死んだって誰も悲しまない!! あなたもどうせ目の前で死なれたら気分が悪いから助けたんでしょ!? そうなんでしょ？」

「なっ、何言って……」

「誰も手を差し伸べてくれなかった、誰も一緒にいてくれなかった、誰も、誰も、誰も!!」

私は、一人でいることを望んだの! もう疲れたの!! アナタたちとの関係なんて「うるっさい!!」っっ!!」

「生きてて意味がないだあ? 死んでも誰も悲しまないだあ?」

「そうよ、それが「いいかげんにしやがれ!!」っっ!!」

拓也は怒っているのだろうか、拳を握り締め怒鳴ってきた。

「生きてて意味がないだあ!! 生きてみなきや分かんないだろうが!!」

お前が死んでも誰も悲しまないだあ!? お前が死んだら俺が悲しむ!!」

「そんなの嘘。どうせ上辺だけの……」

「嘘じゃねえ!!」

お前の今までなんて知らねえし、知る気もねえ!! だがな、今まで誰もいなかったなら俺がいてやる!!

お前が困ったり苦しんだりしているなら俺が手を差し出してやる!! お前が一人で寂しいなら俺がそばにいてやる!! 俺が、お前の力になってやる!!」

「何言って……」

言葉が出ない。反論しおうに言葉が出ない。

「お前が今、闇のどん底にいるなら俺がその手を取って引き上げてやる!!」

だから、そんな簡単に死んでもいいなんて言うな!!」

天童拓也は手を差し伸ばしてきた。

「……………」

私は、今まで人を避け続けてきた。自分が傷つかないためだった。逃げていたのだ、人を信用することが出来なくて、でも、コイツは……………コイツなら……………

「わ、私を裏切らない?」

「ああ。」

「私の支えになってくれる?」

「ああ。」

「本当に?」

「本当だ。」

「本当に本当に本当に本当に?」

「本当に本当に本当に本当にだ。」

「たくやあ、私に力を貸して。」

「当たり前だ。」

困っている時に手を伸ばしてくれる人がいなかった。

助けてくれる人がいなかった。

誰もいなかった。

でも、今は違う、拓也がいる。うんうん、拓也だけじゃない。きつと、要も恵も……………

私は、拓也の手を取った。そして、それと、同時に私達は光に包まれた………

第十一話 音無鈴

「うお!？」

何だ何だ!?!音無の手を引いた途端になんか光ったぞ!!

「何だったのかしら?」

「いや俺が聞きたい……………」

「まあいいか。それじゃあ…………… やりますか。」

「おう!」

「敵が増えたな、援軍を呼ぶか?」

「そうするか。テメエ等こっち来いや!」

うお!?!声でつか!鼓膜が敗れるかと思つたわ、なんて考えていると、妖怪が集まつてきた。

2、4、6、8…………… うん。多いな。

「こりゃあ、不味いかもな。」

「拓也。」

「何ですか?音無さん?」

「鈴でいい。」

「んじやあ、鈴さん。なんですか?」

「そう言えば、いま金属がないから私、戦えないんだった。」

「…………… え?マジ?」

「マジ。」

そりゃあ無いよ。鈴さんこの量一人でやれって?

「呑気におしやべりしてんじやねえよ!」

うだうだ考えていると妖怪が爪を立てて襲いかかってくる。

「ちよつと!! ああもお!! 基礎能力アップ (力) (攻) (守) !!」

爪を受け止め蹴り返すが、次々とほかの妖怪が襲いかかってくる。
くっそ! きりがねえ!!



ど、どうしよう……… 私、金属がないとろくに戦えないし。
私は、何も出来ずに拓也の戦いを見ていた。すると、拓也の死角から妖怪が飛び込んでくるのが見えた。声を出しても間に合わない。金属があれば…… 能力が使えれば……

そして、拓也にその鋭い爪が近づく。思わず私は、目を閉じた。
すると、聞こえてきたのは悲鳴でもなく、叫び声でもなかった。聞こえてきたのは、ガツキンと甲高い金属音だった。おそろおそろ目を開くと、そこにはいつも自分が作る盾が現れ拓也を守っていた。

「あ、あれ?」

「サンキュー、鈴!」

自分でも何が起こったかわからないが、もしかして、と微かな願いを込めて剣をイメージする。すると剣が現れた。
やっぱり金属が生み出せる! これなら戦える!!

「はあああああ!!」

剣を取り妖怪を斬りつけ、拓也の援護をする。

「一気に仕留めるよ! 私に合わせて!」

「お、おう! 能力模倣 模倣対象 [鈴]。アビリティコピー」

「行くわよ!」 鈴符 [降り注ぐ刃] !!」

「なあ!」

「いや、少しニヤついていたから……………」

嘘お!? 私ニヤついていた!? 顔よ戻れえ戻れえ!

「顔も赤いし本当に大丈夫か?」

「だ、大丈夫だよ!!」

「何慌ててるんだ?」

「もう、なんでもないってば!!」

「あつ、ちよつと!! 待ってくれよお。」

この日、私に仲間大切な人ができました。

第十二話 ツクヨミ様の勧誘

やっちまった……………能力の使用の練習してたら思っ切りミスった……………

やべえ、街の真ん中に立っている高いビルに思いっきり突き刺さってるよ……………

今は、鈴の能力を使いランスを作り、要の能力で貫通力を上げる特訓をしてただけど……………思いつきりすっぱ抜けました……………後で呼び出しとかないよな。



「拓也あ。ツクヨミ様がお呼びよ。」

はい、呼び出されました。永琳さんその情報は、欲しくなかったよ。つてかツクヨミつて神じゃん！この世界 神が普通にいるのか。

「私も行くから早くしなさい。」

はあ、行きたくねえ……………



うあ、近くで見るとほんとデカイな。東京スカイツリーぐらいあるんじゃないかな？

「何してんの早く乗りなさい。」

エレベーターっぽい物に乗って上へ向かう。ホントここの技術どうなってるんだ？

ピンポーン サイジヨウカイデス

お、ついた。怒られるのかな……………

「ツクヨミ様、天童拓也を連れてきました。」

見るとあの駄目神と同じような格好をした金髪の女性がいた。いや、駄目神と一緒にしたらいけないな。なんかもつと神々しい。と言うか何あれ？ ものすごく美人。

あの人になら叱りたい……………なんて嘘ですよ!!わたくし、そんな変態じゃないですよ!!おいその奴、引いてんじゃねえ!!
嘘だから!!冗談だから!!

「あなたが天童拓也ですか？」

「あ、その、はい……………」

怒られんのかな、怒られるだけじゃなくて監禁刑とか死刑とか……………いや、考えすぎだよな？

「天童拓也さん、アナタ……………」

「ひゃい!!」

やべえ、神様の後ろに漫画みたいなゴゴゴゴゴゴゴゴみたいな感じのが見えるよ。

ようしこうなったら……………走り、ジャンプし、空中で3回転しそのまま土下座。これぞ空中三回転ジャンピング土下座!!

「すみませんでしたあああああ!!」

これでどうにかなるかな？ならなかったらどうしよう……………

「え?」

「……………え？」



「いや、違う違う。このビルを壊しかけたことを怒るために呼んだんじゃないよ。と言うかこのビル自動再生するし。」

「どうやら俺の早とちりのようでした……………えっ？自動再生するって言った？どんな機能だよ……………」

「あつ、そう言えばなんか金属刺さってたわね。」

永琳さん掘り返さなくていいですよ。と言うか掘り返さないで!!

「で、本題に入ろうかしら……………拓也君。」

「はっ、はい！」

「私の専属ボディーガードにならない？」

「はい……………ってはい？」

「だ・か・ら、私の専属ボディーガードにならないかって言っているの。」

「えっ、ええええええええええええええええ!!」

「どうして拓也を？」

「いや、なかなか面白い子だし。能力もなかなか強力だしさ。」

「な、なるほど……………」

「で、どうする？」

俺は……………

「折角ですがお断りさせていただきます。」

「えっ!?なんでよ拓也。ツクヨミ様直々に誘ってもらったのに。」

「理由を聞いてもいいかな？」

「俺は、今が楽しいんです。永琳がいて要がいて恵さんがいて教官がいて、そして鈴がいる。」

この今が楽しいんです。もつとみんなと一緒に戦ったり話したりバカやったりしたいんです。だから…… スミマセン。その話は受けられません。」

「拓也……」

「素晴らしい！そういうことなら仕方が無い私は、諦めよう。ただ、気が向いたらいつでも来てくれよ。」

「はい、分かりました。」



「お菓子とかあるから、いつでもおいでねー。」
「失礼しました。」

エレベーターに乗り下を目指す。なんか、変わった神様だったな……

ふと、時計を見ると防衛任務始まっている時間だった。

やべえ、鈴に怒られる。

俺は、全力で街をかけていった。

第十三話 贈物

今日は、この前合同任務で一緒に活動したガールズチームの第5班の人達と恵と一緒にデパートに来ていた

拓也と要も誘おうとしたんだけど

要が何か用事があるからって拓也を引っ張って行ってしまった

もお 今日は私の誕生日なんだから もうちよっと考えてくれてもいいと思う

はあー 拓也に祝ってもらいたになー

「どうしたの？ 鈴ちゃん」

第5班のリーダーの墨野すみのえり絵里さんが聞いてくる

「いえ、なんでもありません」

「？」

私は、何を考えているんだ

あくもく

悶える鈴を皆が不思議そうに見る

「あ、皆さん つきましたココですココ」

恵がはしやぎ出す

なんでもここは、とても美味しいと有名なデザート専門店なんだとか

「さあ 行きましょう 早く さあ」

「恵ちゃん 落ち着いて デザートは、逃げないから」

「あ、その…………… はい」

恵は、我に返ったように真っ赤になっていた

絵里さんナイスです

周りの人の視線が痛かったので

うーん 当分デザートは、いらない……………
美味しかった 美味しかったんだけども
なんなんなの？あの量 普通に多いよ 半分しか食べれなかった
で、恵は、なんで完食しておかわり頼もうとしてるの？

次は、つてあれ？
あれは……………

向こうに見覚えのある二人を見つけた

「おーい 拓也、要」

「!!」

「ん？ どうかした？」

あきらかに反応がおかしい

「べべ別に、なあ拓也」

「そそそそうだな、要」

怪しい

「なんか隠してない？」

「そそそんなわけあるわけ無いじゃないですかー」
絶対怪しい

「本当に？」

「ホントだよ？ボクたち、ウソ ツカナイ」

「どうしたんですか？あ、拓也さん 要さん」

「おう 恵 奇遇だな」

「そうですねー」

「あ、ねえ恵 こいつらn」どうしたこんなところで」
遮られた

「あ、第5班の皆さんと一緒に回ってたんです」

「そうか、じゃ俺ら用事があるから」

「じゃなー」

「あ、ちよ待ちなさ…………… 言っちゃった……………」

なんか絶対隠してる

「鈴ちゃんー恵ちゃんー行くわよー」

絵里さんに呼ばれ渋々戻る

次に服屋へ行ったり、本屋へ行ったり、ゲームセンターで遊んだり
した

服屋でみんなの着せ替え人形にされた

恥ずかしかつたー

なんなのあの服 きわどすぎるでしょ!!

みんなと遊んでるうちに日が暮れて来た

「じゃあ そろそろお開きにしましょう」

絵里さんの提案で解散し寮へ向かった

帰ったら拓也に蛭のこと問いただしてやるんだから

寮に付き鍵を開け入り電気をつけた

パン パン

「え？」

電気をつけた瞬間にクラッカーがなった

「「「「お誕生日おめでとう」「「「「」

「え？ え え？」

状況が理解できない

「どうだ鈴？ 拓也考案のサプライズパーティー」

「いや、要別に俺考案とか言わなくていいから」

「鈴ちゃん何歳になったの？」

「おめでとー」

それぞれが思い思いに言い出す

「理解できない顔だな」

拓也が笑顔で近づいてくる

「要に、お前の誕生日を聞いてなおどかしてやろうとサプライズパーティーを考えたわけ。それで、お前の意識をそらしてもらったために第5班の皆さんと恵さんに手伝って貰ったんだ」

つまり、私の誕生日会を開いてくれたということ？

誕生日会なんていつ以来だろう？母が死んでからやってなかったな

そう思うと自然と涙が溜まってきた

「拓也……」

「ん？」

「ありがとうー」

「うお」

感情が高まり拓也に抱きつく

ヒューヒュー アラマー ヒヤー

「は!？」

我に返る 目の前には、拓也がいる

顔が熱くなるのを感じる

「うあああああああ」

「グホ」

ドツシーン

「痛たー 何すんだよ!!」

「いやその……ゴメン」

「まあ今日はいいか 今日、楽しんでいけよー」

「じゃあ 私からプレゼント」

「ありがとうございませつて ある服じゃないですか!!」

服屋で着せさせられた白のクノイチのような服だった

「可愛いからいいかなって」

「そんな、こんな服着れませんよ」

「似合うと思うのに……ねえ拓也君?」

「え、その、か、可愛いと思うぞ」

「……まあ 一応もらつときます」

なんだろ心が変な感じ

「鈴 この食べ物とかの経費で俺、金なくなったからプレゼント勘弁で」

「まあ、それならいいわよ 要」

結構豪華だしそれなりにお金も使っただろうし

「それと、最後 拓也」

「わかってるから押すな…………… えっと、その… 鈴に似合うと思っただけ」

拓也に渡された箱を開けると腕輪が入っていた

鈴蘭の彫刻が施された銀色の腕輪だった

「どうかな?」

「…」

「あ、気に入らなかつたら付けなくてもいいから」

「拓也……………」

「ありがとう……………」

私は、腕輪をつけた

また一つ大切な思い出が増えた

第十四話 初めての気持ち

最近何かがおかしい

朝、いい匂いで目が覚める

キッチンに行くとエプロン姿の拓也が朝食を作っていた

「お、起きたか おはよう」

「つつ」

顔が熱くなるのを感じ、目を逸らす

「どうした？ 顔赤いぞ熱でもあんじやないか？」

ピタ デコアワセ

「〜!?!〜!!」

「熱っう!! 大丈夫か？ 病院に行くか？ 永琳のどこ行くか？」

「いいから早く離れろ」

「ゴフウ」

やっぱり 何かがおかしい

「なんですか？相談って」

恵とベンチに座る

「いや、大したことないんだけど……」

実は最近体の調子がおかしいの

ある条件下でのみ体に変調が変化するという今までにないものなの

「え？」

「それって・・・」

「ねえ・・・」

「心あたりがあるんですか？」

知りたいこのモヤモヤ

「え・・・ えーと、それは多分・・・」

鈴ちゃんは“恋”をしてるんじゃないのかしら

え？ 鯉？ こい？ コイ？ 恋!?

「そそそそんなことあるわけないじゃないですか」

「えーほんと？じゃあその人のこと思い浮かべて」

..... シュー ポン

「やっぱり」

「違いますって!!」

疲れた.....

あの後二人にあることないこと聞かれた

「あ、鈴さん」

恵！

「で、どうでした？」

「うーん、恋って言われた」

「恋!?! え!?! 恋!?!」

顔を真っ赤にして恵は言う

「なんで、あんたが赤くなってるの?」

「そうですか、恋ですか」

「もーそんなんじゃないって」

「でもその人の前だとドキドキして喋れなくなってしまふのでしよう

それってやっぱり恋じゃないでしょうか?」

「もー違うってばー」

「では、もう一回その症状聞かせてください」

「えーと。まずその特定の人の前では動悸が……………」

「ふーん それって 恋 じゃねえー?」

「ちようど拓也が通りかかる

「違うわー!!」

ナイフを投げつける

「ちよ あぶな うお ギアアアアアアアア」

今日は、疲れた

オリキャラ説明

オリキャラ説明

第7班

天童拓也（てんどうたくや）

性別 男 身長 165cm

種族 人間？

年齢

17歳

能力

『能力を操る程度の能力』

パラメータ
基礎能力アップ

基礎能力値を上げる

（力）^{パワー} すべての能力値を1.5アップさせる

（攻）^{アタック} 攻撃力アップさせる

（守）^{プロテクト} 防御力アップさせる

（速）^{スピード} 速度アップさせる

（技）^{テクニク} 技術の模倣する

（能）^{アビリティ} 特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで

アビリティコピー
能力模倣

能力名を知る、能力を認識する

この二つの条件を満たせば相手の能力が使える

一度に使えるのは一つまで

アビリティストップ
能力停止

相手の能力を停止させる

自分も能力が使えなくなる

少しおちやらかな温厚で優しい男の子

神の手違いで死んで転生した転生者

茶髪の髪でアホ毛が立っている

中性的な顔だちをしている

音無凜（おとなしりん）

性別 女 身長 163cm 種族 人間 年齢 16歳

能力

『金属を操る程度の能力』

金属の種類を交換

金属の質量を10倍〜10分の1に変化させる（11話の時点で100倍まで）

金属の形状変化

いずれも金属に触れてないと不可

周りの大人に貶され心を閉ざしていたが拓也の言葉で心を開き出す

世話焼きである

銀髪でポニーテールにしている

腕には、拓也にもらった腕輪を付けている

剛力要（ごうりきかなめ）

性別 男 身長 181cm 種族 人間 年齢 17歳

能力

『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』

なんでも貫く

以上!!

鈴の幼馴染み

明るいムードメーカーで全体の雰囲気上げる
恵に恋をしている

拓也とは、親友

薬師恵（やくしめぐみ）

性別 女 身長 159cm 種族 人間 年齢 16歳

能力

『傷を癒す程度の能力』

傷を治す能力

傷が大き過ぎると直しきれない

大人しめで臆病な子

誰にでも敬語を使う

鈴の相談相手によくなる

美味しいものには目が無い

以上主要メンバー

後はテキトーで

第5班

墨野絵里（すみの えり）

性別 女 身長 174cm 種族 人間 年齢 18

歳

能力

『絵を具現化する程度の能力』

第5班のリーダー

生糸小鞠（きいと こまり）

性別 女 身長 164cm 種族 人間 年齢 16歳

能力

『繊維を操る程度の能力』

第5班ムードメーカー

原子穂 (はら しほ)

性別 女 身長 154cm

種族 人間

年齢 17

歳

能力

『原子を操る程度の能力』

無口な子 試験第二位

夢彩結 (いぶき ゆい)

性別 女 身長 154cm

種族 人間

年齢 15歳

能力

『五感を繋ぐ程度の能力』

慌てんぼうで、おちよこちよい

です

最後の方テキストでスママセン () m

第十五話 出発

軍に入って一年が経った

俺たち第七班と第五班はツクヨミ様に招集をかけられていた

「いきなり召集かけて何だろうな、なあ要」

「さあ まあそこそこ重要な事なんじゃないか？」

要と喋りながらデカイビルに向かう

「ほーら、二人ともチンタラしないでさっさと行く」

合流した鈴が背中を押す

えーもうちよつとのんびりしたいんだけどなー

……

……

……

ビルにつくと第五班の皆さんや恵さんがもう来てた

「オッス」

「こんにちは拓也君」

8人揃ってビルの最上階へ向かった

今思ったけど男子と女子の比率おかしくない？

2:6って

「よく来てくれましたね」

「そりゃ 呼ばれば来ますよ」

「こら拓也、言葉使い」

鈴に怒られた

別にいいじゃん

「で、用件とは？」

「それがね、森の北の方に強力な妖怪が現れたようなの その妖怪の

討伐をお願いできるかしら?」

「妖怪退治なら得意ですよ」

「じゃあ、お願いしても」

「オーケーです」

腕がなるぜ

「あ、数名死人が出てるから気をつけてね」

え?..... 死人?.....

「死人って大丈夫なのですか?」

それな

「大丈夫でしょ」

軽!!

「まあ だから君たちを選んだんだけどね

チームランキング一位と二位さん」

「はあ、分かりました」

鈴!!もつと頑張れ!!

って届かないか

しやーない、気引き締めて行こう

出発する前に永琳の家に行くか.....

いやー久しぶりだな

来いって言われてたけど全然来れなかったしなー
ガチャ

「おーい 永 r 「拓也————」」

ドスン

痛い

「永琳さん、永琳さん？いきなり飛びついてこないでくださいよ、後頭部思いっきり打ちましたよ」

「あなたがちつとも来ないからよ それでゆっくりしていける？」

「あくちよつと無理」

任務説明……………

「死人!? 大丈夫なの？」

「大丈夫だつて」

永琳は、心配症だな

「俺は、第一位なんだぜ 全員守って帰ってくるさ」

「そう… 気をつけてね」

「じゃあ、そろそろ「待つて!!」… ん？」

なんだろう？

ガサゴソガサゴソ

「はい、回復薬」

たんまりと回復薬を出してきた

「あ、ありがとう」

正直こんなにならないな……………

みんなに分けるか……………

「遅い!!」

「なんだよ、時間には、遅れてないだろ？」

何怒ってんだよ鈴は、

「いやらしいぐらい ぴったりね」

「じゃあ いいじゃん」

「そういう問題じゃない!!ちゃんと集合時間の5分前には来なさいって言ってるでしょ」

あゝそんなことあったような……… なかったような………

「とにかく出発しようか」

ナイス要

「んじゃ 行きますか」

目的地に向かって歩を進めだした

この時まだ俺は、知らなかった絶望へ着々と近づいていることを………

第十六話 絶望

「そう言えば鈴、お前そのくノ一服着たんだな」

「な、べ、別にいいでしょ!!前の服より動きやすいし軽装に見えて結構、防御力高いし」

へーそうなんだー

「それに、拓也がイイっていたから」ボソ

「え?なんて言った」

「なんでもない!!」

あ、怒ちやった……顔真っ赤にしてるし相当怒ったのかな?で、なんて言ったんだろう?!

おい要、笑うな

「はあー まだつかねえーの?」

「まだ出発して、30分も経ってないのよ?」

「あれー?おかしいなー?俺的には、3時間ぐらい歩いたと思ったんだけど」

「あんたの体内時計狂ってんじゃないの?」

「鈴、腹えぐって直してやったら」

「そうね、じゃあ早速」

「早速、じゃねえよ!! その工具しまえ!! 要も物騒なこと提案してんじゃねえ!!」

「なら、文句言わずちやっちやと歩く!!」

「……はい」

あー休みたい……………

「では、7班の皆さんここから別行動ですね」

5班の人はもう一ヶ所の出現ポイントに向かうためここから別行動になる

「おう、気をつけてな」

「そっちもな」

そう言って5班の人たちと別れた……………

歩いて、歩いて、歩きまくって、やっとのことで目的地周辺までついた

途中鈴に殺されかけた……なんで俺敵じゃなくて味方に殺されかけてんの？

「じゃあ休憩しましょうか、万全の状態で戦いたいですもんね」

「賛成ー恵さんの意見に賛成ー 休も休も休もう」

てか、もう動けん

「拓也五月蠅い、そうね少し休みましようか」
「ヤッター――」

「じゃあ私が能力で癒しますね」

「あー癒される――」

あれからなんやかんやあつて……

今、敵っぽいの見つけました

「敵は2、4、6、8……かなりいるわねえ……」
「ぱっと見30匹位いるな……」

「で、どれが強敵だ？」

「わからん」

「だろうな……」

「で、どうする？拓也、鈴」

「いつも通りぶつ飛ばす!!」

「さいですか……もしもの時はどうする？」

「もしもの時？」

「敵がめっちゃ強かったら？」

「大丈夫だつて、なんたつて俺がいるんだぜ!!」

「まあ、そうだな」

「それじゃあ、二人とも行くわよ」

「おう!!」

それじゃあ、気合い入れて行くか

「行くわよ、3・2・1 Go」

「よつと」

剣で次々と妖怪を切りつけていく

「ギア」

後ろから妖怪が飛びかかる

「しまっ」

反応が遅れて対応が間に合わない

「あぶねえ」

要が、俺に飛びかかる妖怪を吹き飛ばした

「サンキュー、要」

いまのは、危なかったわ……………

あ、囲まれた

「降り注ぐ刃」
レイン・ナイフ

「ギアアアアアアアア」

この技は……………

「二人とと何やってんの?」

「鈴!!」

「二人ともガンガン行くよ!!」

「おう」

よーし行くぞ…… そう考えていると要が吹き飛ばされた

「な、要!!」

「ツツ 痛てえ」

「大丈夫なの」

「ああ、なんとかか……」

なんなんだ、強敵か

前を見ると狼のような妖怪がいた

「恵さん!! 要の傷を」

「あ、はい!!」

要は、これでいいとして

これ、相手ヤバイかもしんないな………

本能的にヤバイって感じる

まあ、でも俺ならやれる

「パラメータ基礎能力アップ (力) (攻) (速)」

一気に畳み掛ける

「”行動”を不可能にする」

「な!?!」

体が動かない!?

それと同時に妖怪が拳を振るうのが見える

回避しないとマズイ!!

「”回避”を不可能にする」

体をひねって回避を試みようとしたが拳が腹に吸い込まれるようにささる

「グア」

地面を転がり数メートル転がって止まる

痛ってえーモロに喰らっちゃった

やべー近づいてきてるよ

「拓也!!」

鈴が、俺と妖怪の間に入り込み剣を振るが当たらず空を切る

「恵!! 拓也をお願い!! 要は援護をよろしく」

「お、おう」

要と鈴が妖怪に飛び掛るが一瞬にして消える

「消えた!?!」

「どこ行った!?!」

俺も辺りを見渡すが見つからない

逃げたのか?

「ふむ、こやつが回復をさせているのか」

「!?!」

いつのまにか俺と恵さんの後ろに立っていた

恵さんが標的か!!

「恵さん逃げろ!!」

「遅い」

その妖怪は、恵さんの体を蹴飛ばした

「!?!」

恵さんは吹き飛び地面に叩きつけられ動かなくなった

「ダメエ、よくも恵さんを!!」

「よせ要!! むやみに突っ込むな!!」

俺の制止を聞かず要は拳を振るう……が

”攻撃”を不可能にする」

拳は、直前で止まってしまう

「な!?!」

「遅い」

回し蹴りをし要を蹴飛ばす

「グア」

「要!!」

くっそ、なんなんだあいつは!!

能力か?

不可能にする?……… 不可能にする程度の能力か

?………

なら

「アビリティストップ能力停止!!」

これで、アイツは能力を使えないはず

一気に畳み掛ける!!

「ウオオオオオオオオ!!」

剣を持ち斬りかかるが

クソ、当たんねえ!!動きが早すぎる!!

剣を振り続けていると死角から鈴が飛び込み剣を振る

よし、当たる!!

そう思った、だが

”攻撃”を不可能にする」

「な!?!」

攻撃が止まった鈴の手を掴み、俺に投げつける

「キヤア」

「ウオ」

二人とも地べたに倒れる

くっそ、なんで俺の能力が効かない?

俺とは、次元が違うってのか?

ヤバイな、本格的に

要と恵さんは、意識失っているし、鈴と俺は、ボロボロだ

一步一步妖怪が近づいてくる

力を込めだした途端、紫の球体が現れる

「付与、”生命活動”を不可能にする」

はあ?今なんて言ったあいつ生命活動ふざけんな!!

あれに当たったらお陀仏かよ

逃げないと

”回避”を不可能にする」

くっそ!! 動けねえ

動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動

け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動けよ

「さらばだ人間」

紫の球体が近づいてくる
くっそ、ここまでか

紫の球体がすぐそばまで来たとき
何かが前に立ちはだかった

「鈴?!」

鈴は紫の球体に当たりその場に倒れる

「おい、鈴?!」

「た、くや……無事?」

「何やってんだよ?なんで庇ったんだよ!」

「わ、か、らない……無意識に、足が、かってに、うごいて、
た………」

途切れ途切れで喋る鈴

手を俺の頬の頬へ伸ばす

「拓也、わ、私、貴方となら………」

鈴の手は頬に届く前に地面に落ちた

「り——————————————————————
ん!!」

この時俺の中の何かが目覚めた

スコロススコロススコロス……………

クロス!!

”私に体を委ねよ”

その時体中からどす黒い力が溢れだし俺を包んだ
そこで俺は、意識を失った……………

狼のような妖怪は、雑魚妖怪に任せその場を去ろうとしてい
た……………が

突如現れた強い力に足を止めた

力の方は、さつき戦っていた人間たちの方である、だがそれは、あ
りえない筈である

その感じた力は ”人間” の力、霊力でないのだ

「なんなんだ」

名も知らぬ少年のほうを見て、その妖怪は、自分の目を疑った

その少年、拓也は見違えるように変化していた

髪は短い茶髪が膝あたりまで伸び真っ黒になっており

アホ毛を挟むように耳があり、腰にはボサボサした尻尾が生えてい
る

目は光を失い青から赤色になっている

そして、右手は獣のように荒々しく鋭く、鎧を纏っているように角

第十八話

RESTART

「あーやっと終わった」

八意永琳は、拓也たち7班のカルテを書き終わりベッドに倒れ込む
二日前、妖怪討伐任務に行った第7班は、第5班に運ばれて永琳の
所まで来たのだ

「それにしてもこれは何故かしら……」

さつき書き上げたカルテに目を通す

剛力 要：重症

右手複雑骨折 肋骨5本骨折 意識不明

音無 鈴：死亡

薬師 恵：重症

肋骨2本骨折 意識不明

そして

天童 拓也：外傷、内傷なし

他がこれだけ傷ついてるのに拓也だけ怪我がないなんてどういう
事なの？

アイツがみんな置いて逃げるわけないし……

一番返り血がついていたのも拓也だったし……………
うーん わからないわ

「八意先生!!患者が目を覚ましました」
「今行くわ」

さーてこれから忙しくなるわね

第7班が運び込まれてから10日後

傷は、永琳の技術により完治した

が、拓也は部屋に閉じこもって出てこなくなった

「拓也?拓也?」

「……………」

永琳が呼び掛けても反応をしない

「…………… 入るわよ?」

ドアを開け部屋に入り部屋を見る

部屋は、グチャクチャに散らかっており端のほうに毛布にくるまっている拓也がいた

「…………… 拓也」

永琳が手を伸ばすがその手をなぎ払う

「……………」

拓也の目には光がなく、ただただ悲しみと絶望にくれていた

そんな拓也を見て永琳は、部屋を出た

部屋を出るとちようど要がいた

「要君」

「八意先生……拓也の様子は？」

ただ首を横に振る

「そうですか……」

拓也が閉じこもって5日後

永琳と要、恵は、拓也の部屋に来ていた

「拓也……知っていると思うが鈴が死んだ」

少しピクリと反応する

「それで鈴の遺品なんだけど……親族がそんな奴の物なんていらん
て、こっちに送って来たんだ、それで俺ら7班でわけようって話に」

ガタと拓也が立ち上がり出て行くこうとする

「おい、拓也どこ行くつもりだ!!」

「その親族とやらをぶち殺しに行く」

拳を握り締め憎悪と怒りの目をしていた

「バカッ やめろ」

「離せ要!!」

「離さない!!」

「離せ!!」

「いい加減にしろよテメエ」

「いい加減にするのは、お前だ拓也」

「二人ともやめてください」

恵が制止に入るが止まりそうにない

「そこをどけ!!」

拓也が拳を振り上げる

その時

プシューつと永琳が拓也にスプレーをかけた

「永琳、な．に．し．あ．が．る．．．．．」

拓也は倒れた

「永琳先生、それは？」

「ただの睡眠スプレーよ」

永琳が拓也を部屋に返し要と恵は、寮に帰った

拓也が閉じこもって20日

「拓也はまだ出てこないんですか？」

「ええ」

肩を落としながら要と永琳は話す

「俺がもう一回説得してみます」

「おい拓也!!いい加減に出てこいって!!何時までクヨクヨしてんだよ!!」

「……………」

「反応なしかよ……………」

どんなけ呼んでも拓也は、反応をしない

反応しようとしなかった

「…………… やっぱり鈴か」

ピツク

”鈴”と言う言葉に少しだけ拓也が反応した

「鈴のことであらう」

「…………… そうだよ」

拓也が要の問いかけに反応を示した

「鈴が死んだのは、俺のせいだ 俺がもっと強ければ鈴は死なずに済んだんだ

何が一位だ、何が最強だ、仲間一人守れないで何がみんなを守るだ…………… くっそお……………」

「そんなんでクヨクヨしてたのか……………」

ガタツ拓也は要の胸ぐらをつかみ叫ぶ

「テメエに何がわかる!! 俺は目の前で鈴を殺されたんだ!! 何も、何もできなかつたんだよ……………」

荒々しく言っていた声がどんどん弱々しくなっていた

「それに、お前は悔しくねえのか!? 要よお!」

「悔しいに決まってるじゃねえか!!」

「!!」

静かだった要が急に声を荒げる

「悔しいに決まってるじゃねえか でも、いつまでもここで足踏みしていくわけにはいかねえだろが!!」

「なっ」

「あと全部、お前のせいみたいな言い方してるけどなお前だけのせいじゃねえ、しっかりと撤退を命令しなかったリーダーである俺のせい

だ、もつと言ったたらあんな任務を任せたくクヨミ様の判断ミスのせいだ!!」

「なつなな」

拓也は要の言葉に声を詰まらす

「それに、鈴はお前をかばって死んだんだろ? そのお前がこんな状態でどうする!?! いい加減にしろ!! 鈴が見初めていた天童拓也にとつと戻りやがれ!!」

「俺は、ただ……………」

「鈴の分もお前が頑張らなきゃどうするだよ!! 鈴の為にもお前自身の為にもさっさと立ち直りやがれ!!」

「クツ……………」

「俺が言いたいのはそれだけだ、後はお前が決める、ただ……………」
鈴の想いを無駄にするようなら俺はお前を許さない」

要は、荒々しくドアをあけ部屋を出た

部屋の外には永琳がいた

「要君……………」

「俺に言えるのはここまでです後は拓也次第です」
「そう」

「永琳先生………… 拓也のそばにいてやって下さい」
「ええ」

要はぺこりと頭を下げると出ていった

永琳は、拓也の部屋に入って行き拓也と背中合わせになるように座った

「なあ、永琳」

拓也がつぶやく

「俺、どうすればいいのかな?」

友達を失って、自信を失って、信頼も失った」

ただただポツポツと喋り出す

「俺、どうすればいいのかな?」

「それは、拓也次第よ」

「俺次第？」

「ええ、アナタがしたいようにしなさい」

もう一度武器を取るもよし、戦場から降りるのもよし、このまま引きこもっているのもよし、ただ」

「ただ？」

「自分の心に正直に後悔だけは絶対しないようにする事」

「…………… わかった」

「なあ、永琳 俺もう一度やれるかな？」

「ええ、あなたなら何度でも立ち上がっていけるわ」

「…………… そうだな」

拓也は立ち上がり

そして
新たなスタートを歩み出した

第十九話 教官始めました

「え？」

俺がいつもどうり訓練を行こうとしてる時だった

「アナタ、教官にならない？」

と永琳に言われた

教官？ って緑さんみたいな感じなことか

「また、なんで急に」

俺は、教えるより自分で戦う方がずっと得意だし、その俺になんで「あなたの能力に目をつけたのよ」

話を聞くと能力は凄いんだけどまだまだ使いこなせていない子の能力を真似して能力をしつかり使えるようにして欲しいということだった

正直めんどくさい……………

「お願い」

永琳が手を合わせて頼んでくる

「でもなー」

「まあ、ツクヨミ様の命令なんだけど」

まじかよ…………… 断れないじゃん

はあ、嫌だなー嫌だな、こういう上からのプレッシャー俺は、こう言う縦社会の理不尽をなくして欲しいです

「で、どうする？」

ニヤニヤしながら聞くな!!

「はあ、つわかったよ」

もう、どうににでもなれ

もう諦めました

朝

その（能力の）問題児どもと会う日になった

いつもどりの服に着替え

銀色の腕輪を左手に付ける

鈴にあげた鈴蘭の模様の腕輪だ

要いわく お前が持つてるのが一番いいだそうだ

まあこうして毎日つけている

「拓也」

「？」

呼びかけられて止まると永琳がいた

「これ、就任祝いよ」

そう言っって黄と黒の刀を投げてきた

「この刀は？」

”月明光” っていう刀よ、光を吸収して放つ能力を持つているわ」

ほえーそりやすごいな

てか、就任祝いって、イヤイヤだから祝いもなくなる？

「ありがたく貰っとくよ」

月明光を腰に付け目的地まで向かった

……… 何だこれは

目的地についたら一人しかいないし、その一人も本を読んでいて呼びかけても反応なし

コイツらガチ問題児だわ……… つて

考えてたら何か飛んできた!!

月光で切り裂き方を見る

永琳ありがとう

そこには、金髪の縦ロールがかかった髪の子がいた

また、問題児か………

「フッフッフ よくぞ今のを防いだ」

なんか偉そうに岩の上から喋ってる

あ、くっそ スカートの中ギリギリ見えねえ

「我が名は美紙彩^{みかみあや}だ、覚えておけ」

「あーはいはい」

「すごいテキトウ!？」

だって相手するのめんどくさいし………

「私の恐ろしさを見てやる!!待ってるー!!」

お、こつちに来るか これで二人か

あれ?こない

「あの、その、おろしてください」

岩の上で少し涙目になっていた
いや、降りられないなら登るなよ

美紙を岩からおろしました

「あの、その……………」

「え？なんだって」

「……あ」

「あ？」

「アホンダラ!!」

「何なの!？」

ホントよくわからん

残りの二人は、岩の後ろに隠れていた

「えっと、わ、私は、渋谷霧栄しづやきりえとiiiiiiiいます」

「私は、音無響おとしのびきです よ、よろしく願いします」

二人ともオドオドしてるな……………

あれ？今。音無って

「もしかして鈴の」

「は、はい！妹です」

いやそんなにビビらないでよ

鈴の妹が確かに面影があるってかそっくりすぎだろ
違うところ身長と髪型、目付きだけしかないぞ

ていうか最初からいる奴未だに本読んでるし

「まじか 円ちゃん 教官が睨んでるよ」

「円ちゃん 円ちゃん まーどーかーちゃん!!」

渋谷と音無が呼びかけるが反応なし

「ああ」

二人揃ってダウン

「能力使ってんじゃねえ？」

美紙お前、のんきだな

まあ、能力か……………

アビリティキャンセル
「能力停止」と」

本を読んでもメガネ女子のところまで行き

「すうー

「……………い」

「!!」

びつくりしたのかひつく返った

「な、なんで私の能力が」

「二円ちゃん大丈夫?」

「剛力大丈夫か?」

よし、これで四人揃ったし

「俺の名前は、天童拓也 お前らの教官だ

よろしく!!」ニィ

やるからにはこいつらを最強にする

お

第二十話 紙の力

うーん

どうしてこうなった・・・

「ほら、ほーら」

「やめてよく彩ちゃん」シクシク

目の前では美紙が蛇を渋谷に突きつけて遊んでいる

うん？なんか霧が濃くなってきたな…………

まあ、いいか

「や、やめてあげてよ彩ちゃん!!」

音無が美紙を止めようとしている

「……………」

剛力円は、いつも通り我関せずと本を読んでいる

…………… うん これ予想以上に面倒くさいわ♪

辞退したいな

「はい、チューモク いい加減にしないと怒るよ?」

「は、はい」

「……………」

「フフフフ、貴様など怖くもなんとも…………… って痛い痛い痛い痛いっ

て!!ちよ、たんま、たんま やめて!!やめて!!」グリクリ

「コイツ以外帰っていいぞ」

「え?」

「何故だあああああ……………」

「帰りたい」ドヨーン

「まあ、そう言うな 今日、お前の強化に専念するつもりだから」
「え、本当に？説教じゃなくて」

目を輝かしながら言うな めっちゃ嬉しそうじゃん
「フフフフ やつと私の強さに目をつけたか」

こいつ厨二病か？

「で、どうすればいいのだ？」

あ、具体的なことを考えてなかったな

うーん

「じゃ……………」

戦うか」

「ほい、きた!!」

「先手必勝!! 紙弾ペーパーガン「紙の弾」」

「ちよ、イキナリかよ!! 基礎能力アップパラメータ (速)スピード」

最初に会った時の技をスピードを上げてかわす

「ちよこまかとー なら、紙砲ペーパーキャノン「紙の大砲」!!」

最初より大きな弾が飛んでくる

地面にクレーターができた

なんつーデタラメな能力だよ!!あれ、紙だよね!?

「何時までよけられるかな？」

お前さつきからセリフが悪役ぽっいぞ

あーそろそろキツイな……………」

永琳に貰ったコイツを試すか

「月明光!!」

月明光が光出した

「ふん、刀が光ったところで「発射!!」 …… え？」

「キヤアアアアアアアアアアアア」

レーザーが月明光から発射された

「やべえ、ここまで強いと思っただけじゃなかった…」

「わりい、美紙」

「クツソー―我はなぜ負けたのだ」

「知らない」

「え？」

「威力は、良いんだけどな―」

「そんなことよりお前、攻撃の種類はあんだだけか？」

「そんなことって… …… まあ、いいや」

「そうだよ あれだけだよ」

「うーん どうすればいいんだろうか」

「まずは、攻撃をもう少し多彩にした方がいい」

「なんで？今の攻撃 充分強力じゃん」

「単調すぎんだよ」

「うーん、例えばどうやって？」

「どうやって、て言われてもな うーん あ!!」

「アビリティコピー コピー
能力模倣模倣対処」みかみ「美紙」

美紙の能力『紙を操る程度の能力』を使い紙で剣を作った

「おー」

美紙が歓喜の声を上げる

「さて、どんなモンかね」

手頃なサイズの岩に向かって剣を振るつた

ドツカーン

「……………」

岩は、斬れると言うより粉碎した

予想以上の破壊力だったな……………」

「す、すごい」

「まあ、こんな感じに紙を固めてなんか作るのもいいかもな
紙ペーパー創造クラフトって言ったところかな？」

「いいねえ!! 紙ペーパー創造クラフト」

「お前、防御も弱いから盾でも創ってみろ」

「紙符ペーパー「紙創造クラフト（盾）」!!」

少し大きめの盾が出来た

「じゃ、いくぞ」

「いくつて?」月明光、発射!!「ちよつと!」

ドーン シュウウ

おお、無傷かなかなかじゃねえか

「いい、いい とつてもいい!!」

「そうか」

気に入ってもらえて何よりだ

「そなたを我が眷属としてやろう」

「いえ結構」

「(・ω・)」

いや、そんな顔されてもな……………」

「そう言えば、折り紙オリガミって知っているか？」

「オリガミ?」

知らないか……………」

「たぶんお前の能力と相性いいから覚えとくといいぞ」

鶴、手裏剣、紙飛行機、ドラゴン、ぴよんぴよんガエルなど知つて
るやつをだいたい教えた

美紙は、手裏剣が一番気に入ったらしい、カツコイイから
やつと一人か次は、誰を鍛えよう……………
でも、やつぱ
面倒くさい……………
帰ったら寝よ……………

第二十一話 剛力妹

……遅い

今日は、剛力の強化に専念するだったが
来ない

ちゃんと連絡したんだけどなー
しやーない 家 行くか

「えーっと お、ついたな」

ピンポーン ピンポーン

「はーい」

「お、出てきたな…………… つて え!?!」

「あれ? 拓也?」

「前まで同じチームで戦っていた要が出てきた
「どうした?」

「剛力円を……………」

「え? 俺の妹がどうした?」

「え!?!妹!?!」

あ、そういえば 要の苗字も”剛力”だったな

雑談をしながら剛力妹を探す
ホントどこ行つたんだ……………

搜索開始

「お、オーイ美紙!!」

剛力のこと聞こう

「何ですかマスター」

コイツは俺のことをマスターと呼ぶようになった
力の差を見せたからか?

厨二病に俺を巻き込むなよ

「剛力知らないか?」

「? 隣にいるじゃないですか」

いや、要じゃねえよ

「円だ、剛力円」

「いやー今日は見てませんね」

そっかー残念

あれ?

「お前怪我したの?」

美紙の腕には包帯が巻かれていた

「ああ、これはマスターが言つてた通り紙を……

じゃ無くて、我が腕に宿りし暗黒の力を封印するため
に……………」

ああ、この前紙を常に体に付けとけつて言つておいたからか

まあ 厨二病が悪化したか……………

「そう言えば、お前は今何やってんだ?」

下に何か書いてあるし

「何って魔法陣を書いているに決まってるじゃないですか」

コイツもうダメだ……………」

「恵さーん」

要ナイス 良さげの人見つけたな

「あれ？要君に拓也君じゃないですか

どうしたんですか？」

薬師恵、この人もかつて同じ班だった人だ

「いやー 一緒にお茶でも「オイ」 円知らないすつか？」

「円ちゃんですか？ モグモグ そうですねえ モグモグ 私はモグモグ」

「いや、食べるか喋るかどっちかにしろよ」

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ」

あ、食べる方にしたのね……………

まあ いいけど……………

「って良くない!!」

…………… で知らないですか？」

「知らないです」

(´・ω・｀)

搜索した結果……………

見つかなかったです

あ、もう5時だ って事は帰って……………

来てた――――
何この子しっかり帰って来てんだけど

いい子なの？

いい子ならなんで俺の特訓無視したの？

「めんどくさいから」

「ナチュラルルに心を読むな」

しかし、この子逃げる時は強かったな

後は、攻撃さえ出来たら

最高なんだけど……………

「よし、今から特訓だ!!」

「嫌だ」

「即答!？」

どうしよう、この子かなり強情

「行くぞ」

「嫌だ、死ね、変態、アホ毛」

……………そろそろ泣いていい？

「コラ円!!拓也に謝りなさい!!」

「えっ その でも」

あれ？

「いいから!!」

「ひゃい」

あ、これお兄ちゃんに弱いパターンだわ

「ご、ごめんなさい」

「いいよ別に大丈夫だって」

なんか気まずい

「特訓にも行くこと」

「……はい」

「さ、さて 特訓して行こうか……」
「……」

なんで要もいるの？

「円を見張るために」

コイツも心読みやがった

剛力家には、心を読む能力が代々あるのか？

「それじゃ、円ちゃ「ちゃんは、やめて」円」
「何？」

「お前の弱点は攻撃がないことだ、

そこで……… 要なんかない？」

なんにも思いつかなかったです

「お前なー 考えてなかったのかよ」

「要にいい、この人大丈夫？」

「ああ、精神的に一回病んでるからな」

そこ掘り返すな

「まあ、体中に遮る力を纏って防御力を高めたりとかすれば？」

「防御力上げてんじやん」

？ ドッカーン

「え？」

見ると円が岩を破壊してた

「要にいい、これいい」

「スッゲー」

それな

「よし、じゃあ基本的な格闘を教えるぞ」

前世で少林寺やってたからな

「要もやるか」

「おうー」

朝まで戦い続けました………

第二十二話 霧の探し物

4人中半分の強化終了したな
今日は、渋谷の強化か……

…… なんて来ないの？

俺を精神的に苛めるの流行ってんの？

泣くよ？ いい加減泣くよ？

でも、あの渋谷がサボリなんてな……

まあ、そこまで知らんけど

凄く大人しくてオドオドしているイメージだからなー
探しに行くか……

いた……

普通に街中でウロウロしてるし

「おい、渋谷」

「うえーん、きょうかーんさーん」

え？ なんで泣いてんの？

「どうした？ てかなんで訓練来ないの？」

「すみません グスツ ロケットを無くしてしまって グスツ 探し
ていたら グスツ」

ロケット？ そんなデツカイもん無くすか？

「大切な グスツ 物なんです グスツ」

「あーもー泣くな 一緒に探してやるから」

「グスツ すみません」

今日は特訓は無しだな……………

「ロケットの特徴は？」

「えっと、丸くて銀色で真ん中に青色の宝石が埋め込まれています」

「不思議なロケットだな」

「そうですね？結構一般的な物だと思いますが」

え？なに？最近のロケットは、そんななの？

「あ、もしかして 教官さんは、宇宙に行くロケットを考えてませんか？」

「？」

「え？ 違うの？」

むしろ、ロケットって言って他に何を考える？

「違います ロケットペンダントです」

ペンダント？

「ああ、そう言えば着けてたな」

※ロケットペンダント

写真を入れることが出来るペンダントのこと

「んじや、探しますか」

「はい」

見 つ か ん

ねえー……………何情報が全然ないんだけど

あ、ちよと 涙目にならないでくれ

あー搜索系の能力持つてないんだよなー

「グスツ」

なんか霧が出てきたな

ん？霧が拳みたいたいになってこつちに向かってくる

コツチニ？

「うおおあああいつ!!」

ナニ ナニ ナニ ナニ？

感情で能力暴走？ 勘弁してくれよー

えっと確か……………『霧を操る程度の能力』だったけ……………つ

て

「あぶねえ」

次々拳が飛んでくる

あーあー周りが穴だらけ

嫌だよ俺、始末書とか書きたくない

「渋谷、落ち着けー」

「ウアーーーーー」

ダメだこりゃ

まず能力を止めないとな

「アビリティストップ能力停止」

能力は止めたし、後は

「ウアーーーーー」

「ほら、落ち着けて」

頭をポンポンと撫でる

「／／／」

ん？泣きやんだけど、熱いな熱でもあんのか？

「その、ごめんなさい」

「気にすんな、少し休もう」

「はい……………」

「好みわかんなかったから ストロベリーにしたけど良かったか？」

「あ、はい すみません」

「別にいいよ、アイス食べて落ち着こう」

教官さんにアイスを奢ってもらえた

「教官さんは、何にしたんですか？」

「ん？俺？俺は、抹茶」

「渋いですね」

少し話していると教官さんが能力の会話を切り出した

「能力の暴走は、良くあるのか？」

「はい、気持ちが不安定になると……………」

目を伏せながら私は、言う 申し訳ない気持ちでいっぱいだった
「普通に能力を使おうとすると、ほとんど霧を集めれなくて目くらまし程度にしかならないんです……………」

ダメダメですよね私、弱くて、みなさんに迷惑かけてばかりで

「別にいいんじゃないかな？」

「え？」

教官さんの言葉に驚いた

「別に弱くても、迷惑かけても」

「なんでですか？」

「弱いって事は辛さがわかるってことだろ？弱ければ優しくなれるし、迷惑かけてもそれを補うのが、仲間だろ」ニコッ

「で、でも」

迷惑をかける訳には、いかない

「それに、お前は弱くない

能力の暴走中だった時スゲー強かったじゃんか」

「それは、暴走してただけで「それでも、お前の能力ちからだろ?」……!!」

「お前は、自身無さすぎなんだよ もっと自分に自信を持って 自分はこんなにすごい能力あるんだぞって」

「でも……「でもじゃない、やれば出来るんだ」」

この人はなんでこんなに温かいんだろう

私もこんな人になりたい

でも、私に出来るのかな?

すると、さっきの言葉が頭を横切る

『やれば出来るんだ』

私だってやれば出来る………

「よし、ペンダント探し続きますか」

「はい」

「じゃ、霧を操る程度の能力で街中に霧を纏わせてくれ」

「霧をですか? 街中に………」

「大丈夫だ、出来る」

「はい」

霧を生み出す

ボオワアっといつも何倍の量の霧が出た

出来た、私にもできた

「よし、霧を通じて街中を見るんだ」

「は、はい!!」

どこ? 何処なの? ……

あ、あった

「ありました」

「どこだ?」

「此処から北に342 東に289です」

「オーケー ちよつと待ってろ」

びゅんって教官さんは、飛んでいってしまった

は、早い

あ、もう戻ってきた

「ほら、これだろ」

私のペンダントだ

「今日は、何から何まで すみませんでした」

「はあ、こういう時は謝るんじゃないだろ？」

「え、その ありがとうございます」

「おう、ドイツマシテ」

私は、この人に近づくために頑張るだ

「そう言えば、何の写真が入っているんだ？」

「死んだ家族の写真です」

「あ、おう、なんか悪かった」

「いいんです、教官さん今度みんな写真撮りませんか？」

「お、良いなそれ」

「はい」

今日はいい日だったな

第二十三話 響かせる音

「チーム強化、今日でラストだー

やっ と 休 め る

ぞ-----」

「何言ってるの？」

「え？どういう意味？永琳さん？」

「どういう意味って、教官は一年間つくものよ」

「嘘

だ-----」

「って、事があったんだ」

「言わなくていいですし、どんなけ働きたくないんですか」

音無響と雑談をしていた

最初の方はオドオドしていた響だったがだいぶ慣れてきたみたいだ

にしても、ホント鈴にそっくりだな

違うのは、鋭くない目つきに髪をサイドテールにしてるぐらいだ

「どんなの見せてくれるんだ？」

「ふっふん よくぞ聞いてくれました」

私の能力『音を操る程度の能力』を使って私の歌声を強化して 癒しの歌 にするんです」

そう言ってる響は、ない胸を張った

「……何か失礼なこと考えませんでした？」

「ナンデモナイヨ」

怖っ

「じ、じゃあ 早速頼むよ」

「むー なんかいいように話をそらされた感じがします…。 まあ、いいでしょ では」

どんな歌かな

「ボエ~~~~~」

「!？」

な、何この歌？

酷い酷過ぎる

「ちよ、響!! ストップ! ストップ!!」

…… っ て聞こえてないし!!」

ちよマジでヤバイこの歌

地面えぐれて浮き上がっていつてるし、草木は枯れてきた、天気も変になってきた…。 っ て 雹が降ってきたし

何が癒しの歌だよ!! これじゃ破滅、いや滅びの歌だよ!!

「どうでした? 癒されました」

「ああ、今 この普通が素晴らしいなって思うよ…。」

「答えになってない気がします」

いやー いろんな意味で凄かったな

「いつも歌うと皆んな癒されすぎて眠ちやうんですよ」

それ多分 失神しているだな

「だからその後にみんなが起きて元気が出るように本気で歌うんです」

君は、その人達を永遠の眠りにつかすつもりかい？

「響」

「なんですか?」

「練習しよ?」

「なんのですか?」

ダメだこりゃ

「拓也さん、なんで私バケツ被ってんですか？」

「これも訓練だ、そのまま歌え」

バケツをかぶると音痴が治りやすいって言うし

これは、自分の声が聞きやすいから、自分の現状もわかるだろう
バアン

ん？

バケツ破裂したよ……

コイツ一番厄介だわ

どうすれば……

「で、どうすればいい？永琳」

「いや丸投げなの？そこ」

えーだって考えるの面倒だし

「頼れるのが永琳しかいないんだ」

「そ、そう？な、なら仕方ないわね」

よしや

「そうね、楽器を使うなんてどうかしら？」

マジで

「癒しの笛以外もあつた方がいいな」

「そうですね、一緒に考えましょう」

「おう」

さて、どんなのが良いかな

「うーん……滅びの笛なんてどうですか？」

「それは、もう間に合ってるんで大丈夫」

「？」

もうあの歌は、聞きたくないな

第二十四話 月移住計画

「え？今なんて言った？永琳」

「だから、地球から出て行くって言ったの」

いや急すぎるだろ……

「何でだ？」

「最近、妖怪が増えてきてこの地球も穢れてきたの」

「出て行くのはいいけど、どこに行くの？」

地球以外に住める所あるのか？

「月よ」

月か、まあここの科学力すごいからな どうにかなるだろうけど……

「出発は、5日後よ」

いや、本当に急だな

「5日後までに出発の準備して置きなさいよ」

「ハイハイホー」

2日後

いやーほんと急だよな、後3日後に月に行くなんて

前世では、考えれ無かったことだしなー楽しみだな

やっぱし月には、ウサギがいて餅つきでもしてんのかな？

にしても暇だなー

よし、誰かの家いくか

剛力家

「おーい要、円ー遊ばしよ」

「…」

「留守か…」

美紙家

「美紙ー遊ぼうぜ!!」

「…」

「また留守」

渋谷家

「しーぶーやー」

「…」

「なんでみんないないの?」

「エーリーリン」

永琳にダイレクトアタック

「ちよと、拓也!?!どうしたの?」

よかった…永琳は、いた

いなかったら俺自殺考えたわ…

少年説明中

「成程、遊びに行ったら誰もいなかったから寂しくなって帰って来た
という訳ね」

「うん」

「そりやいるわけ無いわよ」

「え?」

なんで?なんで?

「妖怪の大群が出発ちようどに攻めてくるとい情報が入ってきているから、みんな警備に行ってるのよ」

「へ?」

妖怪が攻めてくる?

何それ、超危険じゃん

「というか、逆になぜあなたがココにいるの?」

どういう意味?

「教官も出発の命令出てるはずなんだけど……」

「何それ知らないんだけど……」

「みたいね……」

そんな出発命令なんていつ出たよ?

俺知らないし…… やべえ、ツクヨミに怒られる

あ、知らなかったんだから、伝達ミスということで大丈夫か

「一応、ポスト見てきなさい」

「アイサー」

ビューン

「早っ!」

ビューン

「…… 入ってた、しかも携帯に不在着信が30件入ってた」

ヤバイ、生徒に殺される

ツクヨミより生徒達の方が怖い

ブーブツ ブーブツ

「ん?」

なんだ?携帯が鳴った

「なになに 『妖怪軍接近、戦闘開始』ですって!!」

おいおいマジかよもう攻めてきたのかよ

ちよつとは、待てやコラ!!

「俺は、行ってくる」

永琳が俺の手を取る

「絶対帰ってきてね」

「おう!!俺を誰だと思ってるんだよ

じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

さーて待ってるよ、みんな

今から行くぜ!!

第二十五話 守る為に

「ダメだわ、教官電話に出ない」

ホントあの人は何してんのか

「これだけ電話しているのに出ないなんて……教官さん……」

「はっ!!まさか、マスターに何かあったのでは?」

「そんなわけ無いでしょ」

あの人ならどんな状況でもケロッとしてそうだし
ブーブツブーブツ

「!?!?!」

メール?

「まさか、拓也さん気づいたのかな?」

「えっと……違うみたい」

「フム、では何なのだ? 剛力よ」

「妖怪軍接近」

みんなの顔色が変わる

「ということとは」

「ええ、戦闘開始よ」

「紙符ペーパー「紙クラフト創造（手裏剣）」!!

イッケーー」

美紙の生み出した手裏剣が妖怪に突き刺さる

「ギャア」

「剛力!! フィニッシュだ」

「わかってる!!」

遮断 「ディフェンス・アーマー」 「防御の装甲」!!」

円は、体中に遮る能力を纏い攻撃力、防御力を上げて妖怪を叩きつける

「グオ」

一匹、また一匹と確実に倒していく

「剛力!! 後ろ」

後ろから妖怪が飛び掛ってくる

「な!?!」

「霧符 「霧の剛腕」 !!」

白い拳が妖怪を突き飛ばした

「大丈夫? 円ちゃん」

「霧栄!! ありがとう」

「いいえ、それよりも……」

「囲まれたわね……」

周りを見ると妖怪に囲まれた

「くっ、我が力を持つてしてもこれが限界か」

「いや、何、諦めモードに入ってるの?」

「ふ、二人とも喧嘩は……」

ジリジリと妖怪が近付いて来る

「みんなー 耳塞いで」

「**響!!**」」

「響曲 「幻惑の笛」」

♪ . . * . . * . . ♪ . . * . . * . . ♪ ♪ ? . . * . . * . . ♪

「グア、グウ、アアア」

妖怪の動きがおかしくなった

「私の幻惑でいない敵と戦わせてるよ

みんな今のうちに倒しちやて」

「了解」

「イッケー」

紙砲「紙の大砲」!!

「吹き飛ばせ!!」

断符「一遮弾」!!」

「効いてください」

霧符「霧の連弾」!!」

それぞれの広範囲攻撃で消し飛ばした

「私のおかげね」

「おい、響!!」

美紙と円が詰め寄る

「我が折角ピンチから覚醒をしようと思ったのに」

「アンタ、隠れてないでしっかり戦え」

「は、はい……」

「響ちゃん、私は、感謝してるよ」

「霧栄」

茶番をしているとまた妖怪が集まってくる

「いくよ」

「おー」

何あの子達強すぎだろ………

俺、出る幕ないじゃん

そう思っているとデカイ飛ぶ妖怪が飛んできた
プテラノドンみたいだなくって

「渋谷危ない!!」

「え? きゃあ!!」

崖から渋谷が落ちた、それをそのプテラもどきの妖怪が追尾する

「チィ、基礎能力アップ（速）!!」

間に合え!!」

ギリギリのところできゃッチをした

え? お姫様抱っこだよ? それが何か?

「教官・拓也(さん)!!」

「ふむ流石マスターです」

渋谷を地面におろし妖怪に向かう

「基礎能力アップ（攻）（力）!!」

俺の生徒に何してくれとるんじゃ コラ!!」

妖怪の顔面に蹴りがメリ込む

「吹き飛ばせ!!」

妖怪は吹き飛び動かなくなった

「みんな待たせたな!!」

よし決まったコレ

「遅すぎです、何回電話したと思ってるんですか!!」

「えっ、その…ゴメン」

円さんコワイよ 顔コワイ そのオーラ、コワイ

「まあ、確かに拓也さんがもーっと早く来ていれば霧栄も危険な思い、
しなかつただらうしね」

「ご、ごもつともです…」

なんか想像してたのと違う

突如横からとんでもない衝撃が来た

「ッ!!」

いってーなんだ? なんだ! なんなんですか!?

そこには、今までの妖怪とオーラの違う妖怪達が立っていた

「みんな気をつけろ!! 十中八九能力持ちだ!!」

「気引締めろ!!」

「「はい!!」」

そして乱戦となった

ブーブツブーブツ

「あ? 誰だよこんな時に電話なんて... 永琳かよ」

「もしもし? 要件を早く今忙しい!!」

『拓也、ロケットの準備ができたわ、撤退よ』

「あーそう言う事か、わかった」

携帯をしまい叫ぶ

「撤退!!」

「えっ?」

「なんで?」

「いいから撤退だ!! 月明光」

月明光の光線で妖怪を薙ぎ払い撤退した

「よし着いた、みんな乗り込め!!」

出発してきた時には、なかったロケットが大量にあった
どこにあっただよ...

最後の一人が乗り込んだところで

『出発します』

とアナウンスが流れる

ゴオオオオと音を立てながらロケットは飛び出した
ふと、街をどうするか気になった

「永琳、あの街はどうするんだ?」

「爆弾を落として消すわ」

おお、物騒だな

ビービー

「な、なんだ?」

急に警報がなり出した

「外に何かいます!!」

乗っていた一人が窓の外を見ながら言った

見ると妖怪が張り付いていた

しかも、1匹でなく数匹も

窓のから他の機体を見るとやはり妖怪がくっ付いている

このままじゃロケットが落ちてみんな死んでしまう

月明光を腰につけ直した

「何をするつもり?」

永琳が肩を掴んできた

「妖怪をぶっ潰してくる」

「駄目よ!!あなたが危険だわ!!」

「そうだけど、このままだとみんな死んでしまう」

「でも.....」

悲しそうな顔でこちらを見つめてくる

「教官!!わたし達も」

「円、美紙、渋谷、響」

「私たちも戦います」

「ダメだ!!」

声を少し荒らげる

「!!」

「お前らをこれ以上危険な目にあわせられない」

みんな下をむいて黙った

「必ず、必ず帰ってきなさい」

「……………」

返事をせずにロケットを飛び降りた

月明光を鞘から抜き妖怪を落としていき

次々とロケットを飛び回る

「ギアアアア」

妖怪たちの血が顔につく

「ツツ!? しまった!?!」

後ろから来た最後の妖怪に気付かずともに落ちてしまう

幸いロケットにくっ付いていた妖怪は全てて落とせた

「くっそ、いってえ」

左腕は使えないなこりや……………

自分の状況を確認し妖怪の軍勢のほうを見る

「テメエら、こっから先は命に代えても行かせねえぜ!!」

妖怪の大群の中に飛び込み次々切り払っていった

「!?!」

突如、空が暗くなった

永琳が言っていた爆弾である

「もうか…………… 第二の人生短かったな……………」

妖怪ども最後までつきやってもらうぜ!!」

数分後その場所に閃光や、爆発が吹き荒れ
その場所には、誰も居なくなつた………

第二章 諏訪編

第二十六話 神様始めました

ここはどこだ……………

俺は、僕は、私は誰だ……………

真つ暗な空間にいた

……………?

何か聞こえた気がした

気のせいか?

「……………!!……………!?!」

!!

やはり何か聞こえる

何なんだ?

「マ……………!?!……………!?!」

ん?なんか光が……………

「マスター!!起きてください!!」

目を覚ますとよくわからなき空間にいた

……………(どこ)?

「あ、マスター起きたんですね」

俺は、どうしてたんだっけ

「あれ？マスター？マスター？」

確か、妖怪と戦っていて……

「ちよつと、マスターさん？」

そんでもって、爆弾が落ちてきて

「いい加減にしてください!!」

「うお!? 何時からいたの?」

「気付いていなかったんですか!?!」

いやービックリした、起きたら隣に金髪の美少女がいるって誰でもビックリするだろう

そう、目の前には見たことない金髪の少女がいた

目はクリつとして蒼い、輝く金髪は横で三つ編みを作り後ろで束ねている

服は真つ白なワンピースだった

「で？誰？」

「分からないのですかマスター!?!」

「いや初めて見たし」

「そんな事ありません!! 私、マスターと長いこと一緒にいました」

一緒に? うーん覚えな

「君、名前は？」

「光ですつきあかり 月明ひかり 光です」

「うーん、やっぱり知らん」

「そんな〜」

月明つきあかり 光ひかり ねえ…… うん?

おいちよつと待って、俺の刀げつめいこう月明光と同じ名前の書き方じゃねえか

まあ、深読みしすぎか……

「あれ? そう言えば月明光は、どこだ?」

「ここですけど」

「無いじゃないか」

「いや、私ですけど」

「…… え?」

「私がそうだとやっているじゃないですか」

「イヤイヤイヤイヤ、俺が探してるのは刀で女の子じゃない」

「わかってますよ?」

「じゃあ、俺がお前の発言が分からんよ」

「そう言えば説明がまだでしたね、私はマスターの刀の付喪神つくもがみです」

「マジ?」

「マジです」

マジかよ……………

「そう言えばここどこだよ」

周りは金属で囲まれていた

「え? 覚えてないのですか?」

爆発の直前その腕輪が光って、この金属ドームを作ってあなたを守ったのです」

え? まじ? 無意識で能力使ったのか……

とにかく外に出るか、まずは金属をどかさないと

「能力模倣アビリティコピーって、あれ金属は?」

目の前の金属は消え去っていた

「その腕輪に取り込まれました」

どういうこと? 能力使ってないのに能力が使える……………
試してみるか

剣のイメージをすると剣がやはりできた

「…… うん、腕輪に能力がこもってるな」

なんか、更に鈴の形見ぽくなったな

「よし一回外に出るか」

「はい、マスター」

「おー！ー！」

外に出ると村が広がっていた

一体あれから何年たったんだろう

「2億9900万年程経っております」

クソ、どいつもこいつも心読みやがって

うん？え？

「2億9900万年!?!?!?! 俺、人間やめてんな」

「はい」

「そこは、嘘でもいいえって言って欲しかった」

まあいいや、とにかくこの村?を一望できるところに行きたいな、お

!!あの神社の所いいな

「光!!神社まで行くぞ」

「わかりました」ガシ

「あのー光さん なんて、わたくしを担いでるのですか?」

「行きます」

「行きますって?うおおああいつ!!」

「着きました」

「早っ」

いや早すぎだろ!?!びっくりしたわ!?!行きますじゃねえよ!!危うく
逝きますになつてたよ

「私、光の速さで少しだけ動けるのです」

なんと!?!光の速さだ?!? 299 792 458 m / s
だと

ふざけてる、一秒で地球約7周半できる速度なんて

チートや チーターや

「ツツ!!」

急に金属の輪っかが飛んできた

「誰だ!!」

すると神社の中から少女が出てきた

「お前たち神だな?ここは渡さないぞ!!」

「何言ってるんだ?」

「ごまかしても無駄だ!!」

「うお危ない」

次から次へと弾幕を放ってくる

「ハハハハ、どうした?そんなもんか?」「えい」「ゴツ

ロリ娘の頭を光が刀を使って叩いた

大丈夫か?えぐい音したぞ

「ゴメンなさい!!大和の国の奴らと勘違いしてしまつて」

「いいですよ、私、月明光です

あなたは?」

「私は洩矢諏訪子です、そっちの女の子は?」

……えっ?俺?

「プツプツツ」

おい笑うな!!光よ

確かに昔は中性的な顔のせいでよく間違えられたけど………
あ、そいえば髪切つてなかったから腰ぐらいまで髪あるからそう見え

たのかも

だいぶ長いこと寝ていた為、髪がすごく伸びてしまいました

「俺は、女じゃねえよ 天童拓也 人間だ」

「えっ？その顔で男!？」

「失礼だな」

「プツツ」

「光!!いい加減にしろ!!」

はぁー 後で髪切る

「にしても人間ていうのは、どういう事だい？君からは神力を感じる
んだけど」

「え?」

「そういえば言ってますね、マスターあなた神になってます」

「……………」

えっ

え——————!!!?」

第二十七話

大和の国との交渉

前回のあらすじ
神様始めました

俺と光は神社に上がしてもらい話を聞いていた

「ゴメンなさい!!」

ロリ神もとい、洩矢諏訪子は深々と頭を下げていた

「いいえ、大丈夫ですよ 頭、上げてください」

「うー はい……」

なんか、かわいい

「マ、ス、ター?」ニッコ

ちよつと、怖いよその顔 笑顔なのに

「それで? 大和の国の奴らがどうしたんだ?」

話を變えておこう

「あ、えつと 実は……」

諏訪子が手紙を出してきた

「えつと『国の信仰を明け渡せ、抵抗しなければ国に被害は出さない、だが抵抗するのならば容赦をしない』って、なんだよコレ? 脅迫文じゃないか!?!」

「ヒドイですね」

「はい…… 私、この国が大好きなんですよだから戦いに巻き込みたくないんです でも、神は信仰を失うと力を失い消えていってしまうんです」

え? 消えちゃうの?

つてことは、この手紙は戦って死ぬか、大人しく死ぬか選べつてか、ふざけんな

「勝機はあるんですか?」

「…… いいえ」

諏訪子は、悲しそうに首を横に振るだけだった
そして今にも泣き出しそうだった

「……………」

重い沈黙が少しの間続いた

「…よし、ちよつと行つてくる」

「マスター？どこえ行くんですか？」

「まさか……大和の神々のところに？」

心配そうな申し訳なきような顔で諏訪子は、こちら見る

だからこそ放つておけない

「ああ、ちよつくら大和の国潰してくる」

「!?　　じよ、冗談だよね？」

「うん、3割ぐらい冗談」

「残りの7割は!?!」

「大和の奴らと話をつけてくるだけだよ、これじゃ諏訪子が不利すぎるし」

「そう上手くいきますかね？」

「大丈夫だ光、ダメなら潰す」

「さらつと!?!」

よーし、そろそろ行きますか

「あの、その、いろいろゴメンなさい」

「別にまだ何もしてねえーよ　それにもう謝んじゃねえよ」

諏訪子の頭を軽く撫で慰める

「それじゃ行つてくる　光、諏訪子頼んだ!!」

「えっ!?!　あ、はい!!」

さーて　殴り込みじゃ

「ココドコ?」

毎度のことながら迷った

うーん、どないしよう

うん?向こうから気を感じるな……よくわかんない気だな、これが神力か?

下を見るとテントぽいモノが作ってあった

そんじや行きますか

進軍は、一週間後か……

私、八坂神奈子はテントの中心で時を待っていた

今回、上の方の神に任命されてひとつの国の信仰を奪うのだが……あまり気が進まないな

私の作戦は、話し合いでうちに入ってもらうのが一番いいんだかそんな事を考えていると見張りの一人が勢いよく入ってきた

「八坂様!!て、敵襲です!!」

「な、敵襲だ?!?相手は何人だ?100か1000か?」

「それが……一人です」

「一人だと?」

大和の国に一人で喧嘩を売るバカがいるのか?

すると、テントが開いて一人の女が入ってきた

「このトップは、お前か？」

気でわかるこいつは神だと

「兵士や他の神は、どうした？」

「ん？いや、話し合いで解決しようと思っても次から次ぎへ来るもんだからぶっ飛ばした」

ぶっ飛ばした？うちの鍛え抜かれた者たちがそう簡単にやられるはずかないし……………コイツ相当な手練か？

「そうかうちの連中らが無礼を働いたようですまなかつた 私は、八坂神奈子だ 貴女は？」

「俺は、天童拓也 一応言っておくが男だ」

「え？男？」

え？男？女にしか見えないよ？

「えーゴホン それで貴方はどんな用で？」

「あーそうそう」

いったい何を言ってくるのか……

「諏訪子のところに来たこの舐め腐った手紙を送ってきた国に制裁を下そうかと」

拓也の神力が十数倍になる

「な!？」

予想外だった、この男諏訪の使いだったか

それよりも制裁だと!?

「ち、ちよつと待ってくれ!!その手紙を見せてくれ」

「ほらよ」

手紙を読むと私が伝えたことと全く違うことが書いてあった

「申し訳ない、部下の誰かが手紙の内容を替えたようだ 私は、話し合いで解決しよう」と「無理だろ」ツツ!!」

「信仰を奪うつもりには変わりないんだろ？それに話し合いなんかする気ない奴もいるみたいだし」

「そ、それは」

言い返せない、コイツと戦っても勝てる気はしないし

「だから潰そうかと、思ったけど」

「え？」

「それじゃこっちが可哀想だから一体一のサシをやってくれないか」
話についていけない

「諏訪子とお前のところ一人と戦うそれで勝った方が上、それでいいか？」

「ああ」

「それじゃよろしく」

そう言うで一瞬で飛んで行ってしまった

不思議な奴だったな

第二十八話 特訓よりも飯

「と、言う訳で一週間後開戦な」

「いや、どういう訳ですか？」

拓也君が帰ってきたら急に「一週間後一騎打ちを申し込んできた」とか言うからビックリした

でも、進撃しないよう話をしてきたんじゃないの？

「いや、マスター!?話し合いに行つたんじゃないんですか？」

「?.....行つたけど？」

「ダメだこの人、真面目に意味を分かってない.....」

「進撃しないよう話をしてきたんじゃないんですか？」

「あ、ああ」

本当に分かつてなかったみたいだ

「それだけだな、諏訪子の為にならないと思って」

「私の？」

一体どういう意味なのか、さっぱりわからない

「今回は、避けれたとしても これから他の国が攻めてこないとは限らないだろう？だから諏訪子には強くなってもらわないといけないんだよ」

なるほど、確かに言う通りである

「だから、戦い方を教えてやる」

ここまで考えてたなんて、この人はとても凄くてとても優しい人なのかもしれない

「光がな」

「って私!? 自分で教えないんですか!？」

「うん、もう疲れた ということ俺は、寝る」

「寝ないでください!!」

「..... z z z z z z z z」

「早っ!？」

凄い人なんだ.....多分.....

「ゼエゼエ、それでは始める」

「大丈夫？」

「ああ、頑張ろうか」

「よし、がんばるぞ」

「まず、あの木に向かって弾幕放つてくれ」

「わ、わかった」

「言われた通り弾幕を放つ」

「木の革が少し抉れる程度の跡ができた」

「んー威力が欲しいな…… 少なくともこんなもん」

「拓也君がそう言っただけで弾幕を放つ」

「私のに比べて小さかったが、木に大穴をあけた」

「な!？」

「諏訪子の弾幕は力を込めきれないな、もっと集中して」

「わ、わかった」

「次こそは…… ダメか……」

「うーん、じゃ毎日集中力を高めるため座禅な」

「そんなー」

「次は組み立てだ」

「はい」

「好きにかかって来い」

「わかった」

銀の輪っかを出し攻撃を繰り返すが、当たらない

右、右、左、右

攻撃をしていると腕を掴まれた

「あー！」

「残念」ニイ

パチンとオデコに衝撃がかかる

デコピンである

「うー」

「大丈夫か？」

「はい……なんで私の攻撃が当たらないんですか？」

「お前が馬鹿だから」

「え!!」

そんな、ばかって

「攻撃が単調すぎるんだ

攻撃に 虚 と 実 を入れないと」

「虚と実？」

なんのことかさっぱりだ

「簡単に言うと、相手の意識をそらすための攻撃を 虚

そして、相手にダメージを与えるための攻撃を 実 だ」

「つまり、フェイントを入れろっていうことですか？」

「そうだ、例えばその銀の輪っかを相手に向かって投げる これを虚

として、相手がそっちに気がいつてる隙に懐に入り攻撃 実 をする

とかだ」

「な、なるほど」

やっぱりすごい人だな

「よし、まだまだいくぞ」

「はい」

組み手を再開しようとしたその時

「ご飯できました」

魔の声が

「よし、今日は、ここまで」

「え!?!今からつてところじゃないですか!?!」

「うるさい、メシだメシ」

飯こそ正義だ」

凄い人なん……………だ?

第二十九話 祀られました

一週間は、あっという間に過ぎていき

決闘当日

「ど、ど、どうしよう 勝てるかな？」

「大丈夫です!!自信持ってください」

「やれるだけのことはやった、切れる手札は全部切った後は自分を信じてやるだけだ」

「うん、私頑張る」

「おう、頑張ってください」

「頑張ってください」

諏訪子の後ろ姿を見送った

さてと、こっちは、こっちで動きますか

決闘場から少し離れた場所

大和の国の神が話していた

「一騎打ちなんてやってられるか」

「一気に攻め込んで信仰を奪うぞ」

「いつちよやるか」

「なんの話？」

「ああ？今から一気に攻め込もうって話してたんだよ」

「それは、神奈子の命令？」

「いや、俺らの独断だ……って誰お前？」

「じゃ、制裁はオマエラダケデイナ？」

「何言って？……グオオオオオオホオオオオオオ」

さーて、狩りの時間だ

「なんだ貴様!？」

一人が聞いてくる

「俺か？俺は、ただの通りすがりの神様さ」

「ふざけるなアアアアア!!」

いや、ふざけてないよ？至って真面目だよ？

「よし、お前から袋叩きにしてやる」

そう言っただけを囲む 流石連携はピカイチだな

「一人で喧嘩を売るなんて馬鹿だな」

「フフフフ」

オカシイ、オモシロイ

「な、何を笑っている!？」

だって誰も一人できたなんて言っていないもん

「がア」「ぎゃ」「うお」

次々と神（笑）が倒れていく

「ナイス光」

「別にいいですよマスター」

私も、イライラシテマスカラ」

ちよつと狂気に満ちた感じでカタコトになってるよ

あくあ、大和の国の神達……ご愁傷様です

合掌（一人）

「ギヤアアアアア」

!!!!!!

テテレー

大和の国の神達にトラウマができました

さて、あつちは、どうなったかな……………

「ゼエゼエ」

「ハアハア」

うお、すつご!!クレーター出来てるよ

というか二人とも倒れてるし……………

「おー二人ともどつちが勝ったの?」

「私だ」

「いやどつちだよ」

「私の方が押していたよ」

「いや私だね」

「で、どつち?」

「私」

「仲いいな」

「別に、良くない!!」

面白いくらいハモるな

「弾幕勝負は、私が勝った」

と諏訪子

「組手は、私が上だった」

と神奈子

「他は、どんな勝負したんだ？」

どんなんだろう

「大食い、駆けっこ」

「じゃんけん、腕相撲、料理勝負」

「やっぱ仲いいな!?おい!!」

てか、これしつかりとした戦いだっただよね？

なんでこんなことになってんの？

結果は、3対4で神奈子の勝ちだった

信仰は、神奈子に移ると思いきや民衆は、ミシヤクジ様の崇が怖
いということ、表向きは神奈子、裏では諏訪子と、いう信仰が広ま
り諏訪子は、消えずに済んだ

「よかったな、二人とも」

「うん」「ああ」

よかった良かった、と言うか最初からこうすれば良かったし

「天童拓也」

「うん？」

「お前もここで祀られないか？」

え？なんで？

「神は、信仰があればあるほど強くなれるだ

どうだ悪い話ではないと思うんだが？」

「そうだね、拓也君それがいいよ」

うーん、力あるに越したことは、ないか

「そうだな、一応席を置いとくということ」

「任された」

あ、そういえば

「俺ってなんの神様？」

「知らないな、諏訪子は知っているか？」

「私も知らない」

うーん、なんなんだろう

「全能神ですよ」

「あ、光 全能神って？」

あれ？なんで？神奈子も諏訪子も固まってるの？

「知りませんか？全能神って結構位上ですよ」

え？そうなんだ

「で、全能神て？」

「そこからですか……………」

拓也の道のりは長い

第三十話

神無月の神のお祭り

10月

「神様の集まり?」

「そう、行かない?」

諏訪子に島根で行なわれる神様の集まりに誘われていた

「行かない」

「即答!」

だつてめんどくさいし

「そっかー美味しいご飯とかあるのにな……」

「何をグズグズしてる、早くいくぞ」

「身代わりはやっ」

メシだメシだ

「マスター私も行つていいのですか?」

「神だからいいんじゃない」

おーいっぱい居るな

日本は八百万の神つて言うしな

それにしても………

「飯うめー」

「あ、マスターずるいです私も」

「二人ともご飯は逃げないよ」

知ってるよ、でも美味しいから止まんねえ

「拓也、酒飲まないの」

「飲まねえよ」

昔、無理やる飲まされて記憶失ったもんな

「もしかして拓也か？」

え？俺の名前知ってるの？俺って有名人に… っ

「ツクヨミ様!？」

目の前には、月の神ツクヨミがいた

「いやー久しぶりだな」

「久しぶり」

「どんなもんびりだ？」

「2億5000万位かな？」

「死んだと思ってたけどまさか神になってたなんて」

「俺も、ビックリだよ

永琳達は？」

一番気になってたことを聞く

「最初は元気なかつたけど、少しづつ元気を取り戻していつてるよ」

「そっか……………」

あいつらもあいつらの道を進んでいる

俺も頑張らねえとな

さして、祭りを堪能しますか

「マスター」

「たぐやくん」

………… どうしてこうなった

両腕にしがみついている諏訪子と光を見ながらため息をついた

「大丈夫かい？」

「神奈子、これで大丈夫に見えるなら眼科紹介するぞ」

「諏訪子の奴いつも以上に飲んでやがったしな……光は、酒に慣れてなかったのかな？」

「ダロウナ」

「楽しんでるかー!!」

「マスターも飲みましようよー」

「断る!!もう二人とも飲むのやめろ」

酒を取り上げる

「返して」

「ヤダ」

「返せって言ってるんだろーが!!」
「!？」

急に弾幕を放ってきた

あぶねえな!!

「ちよつと待て」

「待てません 光苜「光明斬」」

光速の斬撃が飛んでくる

「ちよ基礎能力アップ（スピード） Level 15!!」

最大速度でかわす

いつの間に覚えたんだあんなん

数撃当たりながらも耐えしのいだ

あつぶねえー

「崇符「ミシヤくじ様」」

「あくもう!!」

休む暇なく、巨大な蛇が襲いかかってくる

「止めろって二人とも!!」

「アハハハハ」

ダメだ完全に出来上がってらっしやる

しやーないな

「鈴!!」

第三章 飛鳥編

第三十一話 神社が増えた

「本当に行くの？」

「ああ」

数百年諏訪子達と一緒に暮らしていたが一回都の方に拠点を移そうと思ひ離れる事にした

「そつか……寂しくなるね」

諏訪子はシヨンボリと肩を落とす

「アホか、二度と会えないわけじゃないだろ？」

諏訪子の頭をポンポンと撫でる

「そうだぞ諏訪子」

「神奈子……」

さて、そろそろ行こうかな

「じゃな、世話になったな諏訪子、神奈子」

「お世話になりました」

光がペコリとお辞儀をする

「こちらこそ」

「また来てねー」

見えなくなるまで諏訪子達に手を振り続けた

数時間飛んだ

「?……光なんか聞こえなかった？」

「え?そうですか?」

光は、聞こえてなかったようだ

確かに悲鳴が聞こえたような……

「キヤーー」

「!!」

「聞こえたな!？」

「はい、はつきりと」

「急ぐぞ!!」

間に合えよ……

ハアハアハアハア

こんなことになるなら家出なんてするんじやなかった

私は、後ろの妖怪を見ながらそう思った

妖怪は、五匹いてとても勝てる訳が無い

妖怪との差は着々と狭まって来ていた

もう、だいぶ走ったので足が痛くなってきた

「あ!？」

木の根に足をかけてしまい転んでしまった

妖怪はもう目と鼻の先まで来ていた

逃げ出そうと思っても足が動かない、さつきコケた時にくじいてしま

まったようだ

私は、もうダメなのかな？

そう考えると涙が溢れてきて止まらない

そんなことお構いなしで妖怪は、飛び掛ってきた

神様!!助けてください

神様なんているわけ無い……でも、今頼れるのは、そんな物しか無かった

私は、覚悟を決めてギュツと目を閉じた

その時声が聞こえた

「パラメータ基礎能力アップスピード(速)!!」

ドンと、言う音に驚き目を見開いたそこには妖怪を一匹吹き飛ばし

私の前に立つ一人の男の人がいた

「間に合ったな」

「あ、え? その……」

当然のことで声が出ない

「なんだ貴様は」

「通りすがりの神様だ 覚えとけ」

私の前に現れたのは神様でした

あつぶねえーギリギリセーフだったな

「さーって妖怪さん?俺と殺り合うか?」

妖怪は、少しの間睨んできたが諦めて森に帰っていった

ふいー よかった良かった

「大丈夫か?」

「は、はい!!あ、ありがとうございます」

「マスター、この子足怪我してるみたいです」

「なら、エンチャント付与リカバライ「回復能力アップ」」

「…… 凄い!!傷が治った!!」

きつて、この子を家に返さないとな

「光、村を探してきてくれ」

「はいー」

しばらくすると光が帰ってきた

「ありがとうございました」

「よし案内してくれ」

女の子を抱きかかえたまま空をとんだ

「空を飛んでる……」

信じられないだろうな……

昔は、俺もそうだったし

「美紀!!」

「お母さん!!」

美紀ちゃんっていうんだ

よかった良かった これが無事全部解決

「それじゃ 俺らは、この辺で」

「待ってください、お礼がしたいのですが」

別にいいんだけどなー

「マスター、ここは、好意に甘えときましよう」

「そうだな……じゃあ よろしく」

「はい」

盛大に祝ってもらい

さらに、なんかこの村の守り神になりました

まあ、守り神っていつでもそこに神社があるだけだしな

第三十二話 聖徳太子つて男だよね？

少しの間村でお世話になった

門から出てくのが見えた

あれは……この前助けた子のお母さんだ

「何処へ行くんですか？」

「あ、神様でしたか この前は、娘を助けていただきありがとうございます
います 私は、今から都に行つて買い出しと聖徳太子様に相談に行こ
うかと……」

「俺もついて行つていいですか？」

「いえ、別に氣を使つてくださわなくても」

「俺が行きたいだけです」

「それなら、分かりました」

いやー今、聖徳太子がいる時代だったんだな

歴史上の人物に会えるなんてラッキー

本当に十人の人の話をいつぺんに聞いたり、飛鳥文明アタックし
たりするのかな？ 楽しみだー

なんか忘れてるような…… まあいいか

その頃、光は

「マスターどこですか」

置いてかれたことに気付いてなかった

「へえーここが京都か」

「それでは、私は、聖徳太子様にお話をしてきます」

前方を見ると人がだいたいぶ群がっているところがあった
あそこに聖徳太子がいるのかな？

覗いてみるとヘッドホンを付けた変わった髪型の女の人が中心で
話を聞いていた

え？聖徳太子って女!?

俺の記憶が正しければ、ちよびヒゲのおっさんだったハズだけどな
つか、なんでヘッドホン付けてんの？この時代にあるわけ無いじや
ん!?

それに何あの髪型!?!耳なのか？耳だろ？耳だよね？

「太子様、うちの村は水がありません、どうすればいいでしょうか？」

「太子様、害虫がお米をダメにしています、どうすればいいでしょ
うか？」

いろいろ聞いているな……ちゃんと答えられるのか？

「そちらの方は、村の近くの川にダムを造りなさい」

そちらの方は、害虫を食べる生き物を使いなさい」

おーちゃんと答えてる答えてる

「太子様、息子の成績がのびないのですが……」

「太子様、髪の毛が伸びないのですが……」

「太子様、筋肉がつかないのですが……」

ちよ、そんな相談も受け付けてんの？

流星にこれは答えられんだろう

「そちらの方は、息子さんをベ○ツセに入れてみてはどうですか？

そちらの方は、リー○ズ21を試してください

そちらの方は、ラ○ズアップへどうぞ」

答えられるのかよ!?!ってか、絶対この時代にベネツ○もリ○ブ21
も、ライズ○ップも無いよな!?!

聖徳太子が、こちらを見てきた

「あなた、どんな悩みを持っているのですか？」

「いや、俺は聖徳太子ってどんな人か見に来ただけだから」

「そうですか」

ちよっと、残念そう……………なんで？

それにしても人気だな…… 聖徳太子って

太子様、太子様って

ん？なにか飛んでくるって

「危ない!？」

「きゃ」

聖徳太子を突き飛ばす

「何をするのじゃ貴様!？」って……」

近くにいた護衛？が叫ぶが声を詰まらせるそれもその筈、俺の腕には、矢が刺さっている

急すぎて能力使ってる暇がなかった

「大丈夫ですか？痛くないですか？」

太子が立ち上がり駆け寄ってくる

「大丈夫、大丈夫」

まあ、流石に痛いけど……

「まあ、こんなぐらいなら回復能力アップリカバリイ」

「凄い!!傷が治っていく」

これ、体力少し使うんだよな

ちよつと疲れた……

「凄いですね、あの助けてもらったお礼に家に招待させてもらえませんか？」

「いいんですか？」

「はい」

ついて行こうかな、どうせ暇だし

それにしてもなーんか忘れてるような…… まっいいか

その頃、光は

「マスターマスター」

森を駆け回っていた

「本当にありがとうございしました、改めて自己紹介させていただきます、私は、豊聡耳神子と申します」

「とおさんとみみのみそ?」

「豊聡耳神子です!」

聖徳太子つて名前じゃなかったんだ

「俺は、天童拓也です」

「よろしお願いします拓也さん」

おお、いきなり名前呼び

「豊聡耳さん、十人の人の話をいつぺんに聞くことできるって本当ですか?」

「はい、私は『十人の話を同時に聞くことが出来る程度の能力』を持っているので」

なるほど、能力持ちか

「あのー太子様 そろそろ、本題に」

緑ぽっい着物を着た女の子が手を上げる

「そうね屠自古、では、拓也さん私を守ってくれないですか?」

「ええ、良いですよ」

即答、これには豊聡耳さんも驚いたようだ

なんで受けたかって?そんなもん女の子が困っていたら助けるのが男だろ!!

第三十三話 暇な護衛

前回のあらすじ

豊聡耳神子さんの護衛をすることになりました

「それで、護衛って?」

「はい、実は……………」

豊聡耳さん、改めて神子さん（他人みたいで嫌と言うから、呼び方を変えた）がいうには、最近さつきみたいな攻撃や、嫌がらせなどが続いているらしい

だから俺に守って欲しいと言うことらしい

「よろしくお願いします」

と、引き受けたけども

一週間経っても襲撃無しってどういう事だよ!!

俺の見せ場は!?

まあ、平和が一番だけでも……………

「拓也さん、拓也さん」

神子が近づいて来る

「どうした?」

「お菓子貰っちゃいました、みんなで食べましょう」

…… うん 平和だな

つと

「危ない!!」

飛んできた矢を掴み取る

「きゃ!?!」

危なかったな…… さてと、飛んできた方角はあっちだな

「ちよつと行ってくる」

そう告げて、空を飛んで矢の飛んできた方角へ向かうと逃げるように走っている三人組を見つけた

お!あの三人組がそうか?

「ちよつと、その三人組ー」

「!?!」

あれ?こつちに気付いていない?

あ!ああ、空を飛んでるから気付かないのか

そして、三人組の前に着地する

「なつ!?!」「いま空から!?!」「どうやって!?!」

三人組は、目を白黒させている

あ、空飛ぶのは、普通じゃないか……

「ちよつと良いかな?豊聡mつて言ってもわかんないな…… 聖徳太子を狙っていたのは、お前らだな?」

三人の顔がこわばる……ビンゴだな

「なんでこんな事したか教えて欲しいんだけど…… おい、そこ逃げれると思うなよ」

逃亡しようとしていたのがバレ三人はギョツとする

「痛い目会いたくなかったら、吐いた方がいいぞ」

刀を作り、チラつかせながら脅す

三人組はもう泣きそうだ

これじゃあ、どつちが悪者だこと……

「話すの?話さないの?」

「話す!!話すから!!」

話を聞くと、全員脅されてやったらしい

その犯人の特徴は、聞けたし良しとするか
青髪で簪を刺していて、天女みたいな格好した女か……………

帰ってきました神子の家

だいぶ遅くなっちゃったな…………… 青髪に襲われてないといいけど……………

「キヤーーーー!!」

今の悲鳴、神子!?

家に飛び込み、悲鳴の方へ向かう

「神子!!大丈夫か!」

「え?」

神子がいた、体に怪我をしてる様子もない

しかし問題があった、それは……………

「あ、あれ?」

「出ていって下さい!!」

神子が風呂上がりで服を着ていなかったことだ

桶などいろいろ飛んでくる……………

本当に申し訳ない……………

その後、屠自古と布都に説教された

やっと、説教が終わり屋根の上で夜風に当たっていた

ふと、視界に青髪が映った
素早く立ち上がり、青髪を追う
少しづつ距離を縮めていった
青髪が角を曲がったところで見失ってしまった
しかしそこは、行き止まりだった
一体どうやって逃げたんだ？

第三十四話 邪仙と対面

「拓也さん」

「ん？」

日向ぼっこをしていたら神子に声をかけられた
警備体制ザルすぎだな……………

「どうした？」

「メールが届きました……………」

え？メール？この時代には、携帯電話もあるのか？

「これなんですけど」

出してきたのは矢、その端に紙が括り付けられた物だった……………
ってこれ矢文じゃん!?

神子から矢を受け取り中を見る

中には、『仙人に興味はない？』とだけ書いてあった

十中八九、黒幕だろう

ちなみに、まだ神子には、犯人の特徴を教えていない

「なんなんでしょう？」

「さあ でも、お前を仙人にしたいそうだ」

「仙人ですか……………」

その日の昼頃、俺は、お使いに行っていた
護衛からパシリになつてるし……………

俺、神なのに……………

えっと、買うものは、墨汁、筆、墨汁、紙、布、墨汁、肉、野菜、墨汁、墨汁、墨汁……………墨汁多いな!!何本買うんだよ!!

「キヤーー泥棒!!」

少し先の方から悲鳴が聞こえた

暇だし人助けしてくるか……………

飛んで行ってみると、男が走って逃げていた

その男の前に急降下し、足をかける

「なっ!？」

男はスピードを殺しきれず転がり、近くの八百屋の品物を盛大にぶちまけた

ヤツベ、こなれ俺のせい？弁償しないといけない系？

少し目を離している隙に男は人質をとっていた

「近づくな!!」

どうしようかな……………相手には、人質がいるしな　むやみに突っ込めん

遠距離、相手に気付かれにくい、ならアイツかな

俺は、小声で能力を発動した

「能力模倣アビリティコピー 模倣対象コピー 「霧栄きりえ」

空気中の水分を集め霧を作り、操る

「近づくな!!って、うおおあああいつ!!」

霧の腕で男を掴み吹き飛ばす

いつちよ上がり

いやー、随分と遅くなったな

「ただいま……なんでもここにいます」

そこには、青髪で簪を刺して天女みたいな格好の女がいた
「あら、もう帰ってきたの」

女は、呑気な声で言う

「それでは、私は失礼させてもらおうわ」

女は立ち上がり、神子の横を通りすぎる

何か言ったようだがここからだと言えない

「待て!!」

女を追うが、壁をすり抜けて行ってしまった……

能力持ちか……

「お前の好き勝手には、させねえからな!!」

女が消えていったほうに向かって俺は、そう叫んだ

何なんだろう、この方は……

霍青娥と名乗る女の方がやって来た

「仙人に興味はないかしら?」

その言葉に覚えがあった、あの手紙にあった言葉だ

「人の命は、あまりにも短すぎる、仙人になれば長い時を生きていける、あなたの目的にもあうでしょ? 聖徳太子いえ、豊聡耳神子」

「あなたは、いったい「ただいま」」

そのタイミングで拓也さんが帰ってきた

青娥さんを見た瞬間、鋭い目つきになった

「なんでここにいる」

声色が変わり、威圧感がここまで伝わってくる

「それじゃあ失礼させてもらうわ…………… 仙人のこと考えておい
てくださいね」

そう言つて、壁の中に消えていった

どうしましょう……………

第三十五話 VS 天狗

青娥が来てから数日後

神子のところに一人の人が駆け込んできた

「太子様!!」

見るからに只事じゃない

「どうしました?」

「娘を娘を助けてください!!」

話を聞くと、娘さんが昨日から居なくなっている人々に聞き回った結果、妖怪が住み着いている山に、向かって行くのを見た人がいたというらしい

お役所に頼んでも行ってくれなかったらしい、それで神子を頼ってきた

神子を生かせるのは危険だしな

「俺が行くわ」

「拓也さん!?!」

「大丈夫だって、早い方がいいだろうからもう行くわ」

「気をつけてくださいいね」

「おう!!」

行く前に部屋の外にいた、屠自古と布都に声をかけていった

「俺がいない間、神子頼む 青娥には、気をつけろ」

「わかったわ」

「任しておけ、さっさと戻ってくるのじゃぞ!!」

妖怪の山へ俺は、スピードをあげて向かった

「ここが妖怪の山か……………」

山を見上げ眩き、森に入っつていった

その時、目の前に三匹犬耳の白い妖怪が現れた

「生まれ人間!!ここは妖怪の山だ、人間の来るところでは無い!!帰れ!!」

うっわ、すごい言われよう 全然歓迎されてないなー

まあ、無視して進みますか、俺人間じゃないし

「貴様!!生まれと言っているだろう」

無視して進む

「ツツ!!全員かかれ!!」

一斉に剣を振り下ろしてくる

「正当防衛成立!!」

パラメータ基礎能力アップ (攻)アタック (守)プロテクト (速)スピード Level 13!!」

剣を腕で弾き後ろへまわる

あんまり被害を拡大させないように、気を失わせる程度で倒すか…………

後ろから蹴りを入れ次々時を失わせていく

「いっちょ上がり………… ってまだ来るのかよ!?!」

空から次々と犬耳が降りてくる

2. 4. 6. 8. 10. 12…………… 多過ぎだろ!!

「かかれー!!」

「あーもー、めんどくさいな!!」

「あーもー、めんどくさいですねー」

山に侵入者なんて白狼天狗に任せておけばいいのに

「文様!!」

「分かってます、今行きますから」

…………… どういう事ですか？

白狼天狗がやられているんですか？

騒動の中心にいるのは、男か女か分からないような人だった
ヤルしかないですね……………

「その人間!!よくも山を荒らしてくれましたね」

「お、違うのでできた っつか先に手を出したのは、そっちだ」

飄々と話しかけてくる

「白狼天狗は、下がりなさい私がやります」

「文様が!?!」これで勝てる」

さてと、中々やるようですけど、どこまでついてくれるでしょう？

「…………… 天狗だったんだ……………」

天狗と気づいていなかったらしい

「私についてくれますかな?」

最初から出し惜しみなしで行きます

轟と風が吹き荒れる

「うお!!速っ!!」

私は、天狗界でもトップの早さを持つ天狗です

そう簡単に追いつかれては、困ります

相手もそこそこ速いが私の敵じゃない

これなら能力を使わなくていいかもしれないですね

人間に、蹴りを入れては、下がる、攻撃しては、下がるを繰り返す
着々とダメージを与えていく

「チィ ^{チェンジ}変更Level5!!」

人間の速度が上がるがまだ私には、追いつけない

「マジかよ…… Level5でも追いつけないとか……」

「それが、あなたと私の差です!!」

地面へと叩き落とす

「痛エな くそ」

土煙の中から人間は、出てくる

しぶとい人ですね……

「仕方が無い…… 本気出すか」

人間の目がギラりと光る

ここからが本番だと言うように……

第三十六話

Level 15を超える

「仕方が無い…… 本気出すか」

その人間はからは、ものすごい威圧感を感じた

「変更チェンジ（光速ライトニング）!!」

そう叫んだとともに人間の姿が視界から消え、それと共に背中を衝撃が襲った

「なっ!？」

突然のことで思考回路が追いつかない

この私が速さで負けた？

そんな、ありえない

体制を整えて人間を追うが追いつけない

くそ、なら………

扇を取り出して、『風を操る程度の能力』を使い風を操る

「うお!？」

人間は、突然の突風（台風レベルの風）でバランスを崩すそこに攻撃を叩き込む

人間は、木をなぎ倒しながら吹き飛ばされて行く

だいぶダメージは、与えられた筈

「なんだ？能力の類か？」

「!？」

後ろを見ると少しボロボロになった先ほどの人間がいた

「クツソ痛エリカバリな 回復能力アップ」

傷が癒えていく

「さあ、そろそろ終わりにしようか」

「くっそオオオオ!!」

二つの影が交差した

荒らしすぎたな……………

まず、こいつらを全員、回復能力リカバリイアップで回復させておくか……………

妖怪の回復力ならすぐ治るだろ

戦っている時城みたいの見えたからそこがコイツらの基地みたいなもんだろう

さてと、あの建物にこいつら運ぶか……………でも、何匹いるんだこいつら？

愚痴をこぼしながら、天狗を運ぶ

これ終わったら、森を探すか……………

「う、うーん」

ここは？私の部屋？敵は？私は、あの人間に倒されたはず、なのに何故？

自分の体じゆうを見渡すが、傷がない　しかし、服は、汚れており夢では、無い事がわかる

どういう事でしょう？援軍が、あいつを倒したのでしょうか？

いや、ありえない

自分の考えを即座に否定した

あの強さなら、白狼天狗全員かかっても勝てるか分からない

なら…… アイツが回復をさせるところまで運んだのか？

理由が見つからないが、それなら納得できる

多分、白狼天狗も同じ処置を受けているだろう
少し安心した……

頭の整理がついたところで自分の姿を見る

服がドロドロだしシャワーでも浴びようかな

ベットから立ち上がりシャワー室に向かう

服を脱ぎ捨ててシャワーを浴び泥や血を流す

ふー スツキリする

蛇口を閉め、タオルで体の水滴を拭き取る

「……、……？」

あれ？誰かの声が聞こえる、白狼天狗か？

その時、私の部屋の扉が開かれる

「森には、いなかったなー ここにいるかな？……… って、あ」

扉を開けて入ってきたのは…… あの人間だった

「あ、えっと、その……」

私の姿を見てアタフタします、なんでだ？

「その…… かつこう……」

「？……！？」

そう言われ、理由を気づく

シャワーから出たばかりだったので私は、服を着ていなかった

タオルを持っていたが、小さなタオルだったので体を隠しきれ
なかった

そして、私の格好を見て動揺したことで、初めて男だと分かった

「きゃああああ!!」

風を起こしその男を吹き飛ばす

「うおおおお!!」

あ、派手に吹き飛ばしてしまいました……
早く服着ましょう……

なぜ、こうなった？

後からついて来る人を見ながらそう思う

私は、今 この人間、天童拓也を天狗の長、天魔様のところに案内している

この男は、迷子を探しに來ただけで我われと敵対する気がないことがわかったからだ

コンコン

ドアをノックする

「射命丸です」

「入れ」

巨大な扉が開かれた

第三十七話

V S 天魔

やっと、天狗の長とご対面か……………長かったな……………
女の子こと事知っているかな？

開いた扉を通り抜け奥へと進む

奥には……………幼女？

「なあ、射命丸　なんでチビツコイ幼女がこんな所にいるんだ？」

「なっ!?　私は、ちっちゃくないよ!」

身長130センチぐらいの天狗が足元でびよんびよん跳ねている
いや、君ちっちゃいから

「これでも、天狗の長なんだぞ!」

「はいはい、そういう設定のおままごとなんだろう？」

「違ーーーう!!」

「じゃあ、偶然そう言う名前か」

たつく、天魔は、どこにいるんだ？

「射命丸、天魔は？」

「ん」

そう言つて幼女を指さす

「いや、それじゃなくて……………」

「ん」

もう一度指をさす

「……………マジ？」

（。、）コク

……………はあ？　これが天狗の長？　マジで!?　俺にイジメられ
て半泣きしてるけどマジで？

「えっと、じゃあ本当にお前が天魔？」

「そうだとおっしゃっているだろう!」

マジかよ、信じれん

「それで？ 私になにか用かい？ これでも忙しいんだよ」
トップに立つ者は、大変なのか

「いや、嘘ですよね 天魔様何時もだらだら遊んでるだけじゃないですか」

「あー!!それ言っちゃダメー」

ほんと子供みたいな長なこと

「えっと、本題に入っていないか?」

何故か取っ組み合いを始めた射命丸と天魔を止めながら言う

「なに?」

「いや、人間の子供来ていないか聞きたいんだけど」

これまでの経歴を語る

カクカクシカジカで……………

「なるほど、よし私と勝負して勝ったら教えてやろう」

「……………はあ?」

何言ってるんこのロリ?

「私も一応天狗の長だ、部下がやられて黙っておれんのだ」

成程

「いいぜ始めよう」

「それじゃあ It's show time」

中二病患者(ここ)にも

うむ、天狗だけあつて動きがなかなか早いな、射命丸程じゃないけど
ど

弾幕を交わしながら考える

「よけるな!!」

「よけない奴がいるか!?!」

よけるだろ普通、当たったら痛そうだし

突如空中で爆発が起こる

なんだ？なんだ？能力の類か？

天魔を見ると口角があたりニヤニヤしていた
手を前にだし握るしぐさをしだす

「なんだ？……ッカ!？」

息ができない!?!何故だ？能力か？

何の能力だ？分かんねえと能力停止アビリティキャンセルも使えねえし………
せめてどうなってるか分かれれば

「ククククク、苦しいか？お前の周りの酸素を無くしたのだ」

酸素を無くしただ？息が出来ないのはキツイな

やばい意識が朦朧としてきた、脳に酸素が行っていないな、早く打
開策を………そうだ!!

「ククククク、これで私の勝ちかな？」

「甜めんじゃねえぞ」

「な!?!どうやって息をしている!!」

「なければ作ればいいだけだ!!」

緑さん能力『植物を操る程度の能力』で植物を出し、付与エンチャントで植物
に基礎能力アップパラメータの（能アビリティ）を付け光合成を活発にさせたのだ

「お返しをしてやる 能力模倣模倣対象アビリティでコピー識別コード「文」あや!!」

「え？私？」

風を手のひらで集め回転を上げていく

「くらえ螺〇丸!!」

「きやあああああ」

こうして、俺と天魔の戦いは、決着がついた

第三十八話 帰宅

「いやー中々苦戦したな、何の能力だ？」

膨れている天魔に聞く

『空気を操る程度の能力』さ、気体ならなんでも変換させたり操れた
りできるのさ」

ああ、じゃあの時爆発したのは、水素か

結構使い道ありそうだな……………

「それじゃ俺が勝った事だし、女の子のこと話してもらおうか」
「ちえ、分かったよ 付いて来て」

天魔に案内されてある部屋に着く

天魔がその扉を開けると

「天ちゃーん」

小さな女の子が天魔に飛び付いた

「こら!! 離れんか!!」

「いやー」

この子がその女の子だろうか？

「天童 この子がその女の子だ」

あ、やっぱそうなのね

「なんでこんな所にいるんだ？」

普通の妖怪なら匿ったりしないだろうし

「べ、別に遊び相手が欲しかったわけじゃないし!!」

自分で暴露してんじゃねえーか!!

てか、その言い方お前ツンデレか

「お姉さん誰ー？」

可愛らしく首をかしげながら聞いてくる

俺は、お姉さんじゃないです

「俺は、天童拓也、神様だ 決してお姉さんではないよ

君のお母さんに頼まれて迎えに来た」

「え!?神様!?!」

「あれ言っでなかつたけ?」

「言っでない(です)!!」

あれ?そうだっけ まあ問題ないだろ?

「それじゃ、帰ろうか」

「うん」

「天魔 この子連れていくぞ」

「べ、別に私は、寂しくないもん」

「声裏返ってるぞ」

変なところで気を張るなこいつ

「アビリティコピー能力模倣模倣対象「ド美紙」」

紙を操る程度の能力を使用し、デツカイ鶴を作る

「ほら、乗って」

「うわあーすごーい 天ちゃんバイバイ」

「ううううう、ぶあい……………ぶあい……………」

もう泣いてんじゃねえーか

「二度と会えないわけじゃないんだから」

「わがっでる!!」

そろそろ行くか

「そんじゃ、しゅっぱーつ」

鶴は、空を飛ぶ

「すごーい、お空飛んでる」

さっさと帰るか

鶴は、スピードを上げた

「ありがとうございます」

「いえいえ」

女の子をお母さんのところに返した

「それでは、俺は、ここで」

「バイバイ、神様のお兄さん」

「本当にありがとうございます……え？神様？」

めんどくさくなる前に帰ろう

その時、俺にめがけて光速で何かが近づいていることを知らなかった

「フッフッフ、やっと見つけましたよ」

あのマスターこんなところにいたとは

まあ、とにかく

「この数週間、よくも放つたらかしにしてくれましたね」

光速でマスターに突っ込む

「この、クズ、クソマスター」

「ん？グウフオオオオオオオオ!?」

ふー 殴ったら少しスッキリしました

「うん？ああ、光か」

「光か じゃないです ここ数週間私を置いてどこ行ってたんですか?」

「いやー悪い悪い、完全に存在忘れてたわ」

「そんな!?(。D ーーー)」

酷い、酷すぎる

「読者も半分ぐらい忘れてただろう、多分」

「読者って何ですか!？」

ダメだこの人の話には、ついていけない

「それでどこ行っていたんですか？」

「聖徳太子のとき」

あ？

いやー光の事完全に忘れてたわ

まあいいか

「良くないです!!」

心の中読まないで……………

なんやかんやしてるうちに神子の家に着いた

「ただいまー」

「うむ、おかえり…………… 拓也、その方は？」

「ああ、布都か コイツは光、付喪神だ」

「私、月明 光と言いますウチのマスターが^バお世話になっ^カています」

「おい光 今、マスターと書いてバカと呼んだら」

「何のことですか？」

「上等だ表出ろや!!」

「拓也何やっておる!? ささ、上がって下さい」

「お邪魔しまーす!」

光と布都はそのまま奥へ行ってしまった

「…………… 屠自古」

「なに？」

「神子は？」

「あなたのいない間なるべく外との接触は、避けさせたわ
はず」 問題ない

「そうか、ありがとう」

神子が安全が分かればいいや今日は、疲れたから寝よ

第三十九話 少しの違和感

妖怪の山の一件以来、また暇が続いていた

何か、光も住み着いてるし、と言うかこの家に住んでる男女比1:4ておかしいだろ

男子来いよ!!いや、来ても困るんだけども

それにしても、全然神子に会わないなあ どこ行ってるんだ?

そんなことを考えてると見知った人影が…… 神子だ

「おう、神子 おはよう」

「…」

あれ?反応なし!?

「神子ー」

「ぴゃ!?た、拓也さん!?ど、どうしたんですか?」

「いや、そっちがどうしたんだよ?挨拶しても反応してくれないし」
軽く泣きそうになったぞ

「ああ、スミマセン ちょっと考え事をしてたので」

考え事?なんだろう?乙女には、色々あるんだろうか?

「まあ、大変だろうけど頑張れよ」

「……… はい」

神子に元気がなかったのは気のせいだろうか?

今、俺は妖怪の山に来ている

理由は、この前の女の子に「天ちゃんに会いたい」と頼まれたからである

ちちゃんとお母さんにも了承を貰っている
神子の事は、まあ光もいるし大丈夫だろ……………

むしろ、あいつらが何かしないかの方が心配である

「天ちゃん遊びに来たよ!!」

「別に会いたかったなんて全然思っていないし、寂しくも全然なかったし」

何時までその強がりキャラやるんだよ

「そっか、じゃあ帰ろうか」

「あ?」

「そうだね、天ちゃん私と会いたくなかったんだね」

「ちよ」

「帰ろっか」

「うん」

「ちよつと待ってええええええええええええ!!?ごめん、私が悪かったから、行かないで、お願いいたします、私を捨てないで!!」

最後の方何か変な言い方だな、はたから見たら勘違いされそうな言い方すんじゃねえーよ

「天魔様……………」

文も呆れてるじゃん

「天ちゃん泣かないで、一緒に遊ぼう」

「グッス うん」

それじゃあ、俺は、迎える時間までのんびりするk「拓也さん あの螺旋○のやり方を教えて下さい」そうはいかないらしい、人生というやつは

約束の時間になったから帰るか

「拓也さん!!もうちょっと、もうちょっとだけでいいですから」
「ダメだって言ってるだろ!!諦めろ」

と言うか、文がなら一人でも習得できるだろうし

「天ちゃん、バイバイ」

「また来てもいいし」

「何時までそのキャラやるの?」

「五月蠅い!!」

へいへいスミマセン

「そんじゃ、帰るぞ」

「はーい」

今日は、おんぶして空を飛び帰る

ヤバイ、5時まであと5分しかねえ

スピードを上げて帰った

「ただいま」

「「おかえり(なさい)」」

あれ？また、神子がいない

「神子は？」

「部屋におるぞ」

「OK、布都Thanks」

「それは、どこの言語じゃ？」

あ、今の時代英語知らないか

「神子、ただいま」

「!! 拓也さんでしたか、おかえりなさい」

やっぱり、俺にビビってる？

「俺なんかしたかな？」

「？いえ、別に何もされてませんが」

「そうだよな」

よかったー

「じゃあ、部屋戻るから 何かあったら呼んでくれ」

「……はい」

この時、神子の変化に気づくべきだった、そして
ら……………

第四十話 尸解仙になるには

「神子、おはよー!!!」

「…… おはようございます」

神子を見るからに体調が悪そうだった

「大丈夫か?」

「… はい」

「休んどいた方がいいよ」

3日後

神子は、相変わらず寝込んだままだ
早く元気にならないかなー

1週間たったが、一向に良くなる気配を見せない
それどころか、どんどん衰弱している
大丈夫か?

2週間がたった、神子が血を吐いた
衰弱もいちじるしくなった

くっそ!!!

何なんだよ、俺にできること、出来ることはないのか!?
.....
そうだ!!

薬を作ることができれば.....

薬草が取れそうな場所って言ったたら.....

妖怪の山か.....

よし、行くか

薬草を求め妖怪の山へ

「神子が、大変なんだ手伝ってくれるか?天魔」

「まあ、良いだろう 1つ貸しだからな」

「分かったよ.....ありがとう」

「気にしないでいいよ」

天魔がこういうやつで良かった

「じゃ、指定する薬草を頼む

まずは.....」

なんでだ!?　なんでできない!?

永琳の能力を使い薬を作ろうとしたが………　うまいこといっ
ていない

なんでだ?　病気とは違うのか?

何があつた?　神子のまわりで、ここ数週間の間……

まさか!!

「神子、正直に答えろ　……………　仙人とあつたな?」

「……　ええ」

やっぱりか……………　くっそ!!

「これを飲めば仙人になれると言われて」

これは……………　辰砂 (HgS) だ

辰砂、水銀が塩素と化合したもので非常に高い毒性を持っている
辰砂などの水銀化合物は、その特性や外見から昔は、不死の薬とし
て珍重されて、中国の皇帝などに愛用されていた

不老不死の薬、「仙丹」の原料と信じられていて、それが日本に伝わ
り飛鳥時代の女帝持統天皇も若さと美しさを保つために飲んでいた
と言われている

今は、ちょうど飛鳥時代……………

「あら、だいぶ進んでるわねえ」

「!?」

そこには、青髪の仙人…… 霍青娥がいた

「神子になんてもの飲ましたんだ」

「仙人にするために、薬を飲んでもらったただけだけど？」

「ふざけんな!!薬だあ?ただの毒じゃねえか!!」

轟と、神力が溢れ出す

「一つだけ聞く、神子はどうなる」

「さあ?どうなるんでしようねえ」

プチと俺の中で何かが切れた音がした

「ブチコロシテヤロウカ?」

地面を蹴り、右拳を振り上げ叩き込む

が、しかし手ごたえがない

それどころか、霍青娥をすり抜けてしまった

「なっ!?!」

「ふふ」

「クツソが」

「無駄よ、私は、貴方という壁を何度でもすり抜ける」

何度も何度も試したが、すり抜けてしまう

「なんなんだ!?!、それは!!」

『壁をすり抜けられる程度の能力』、まあ私自体にあるんじゃないやなくて

コレにあるんだけど」

と、ツンツンと簪を叩いて見せる

能力なら、どうにでもなる

足に力を込めて、霍青娥の懐へ飛び出す

アビリティキャンセル
「能力停止!!」

「何度やっても同じ」

しかし、霍青娥は腕を確かに掴まれた

「なっ!?!」

「ようやく捕まえたぜ」

能力を解かないように注意をしながら

「ひとつ質問する」

「何かしら?」

「神子は、豊聡耳神子は本当にもう助からないのか?」

「ええ」

「そうか、ならお前は、用済み「仙人に、尸解仙になるには、一度死ぬ必要があるの」」

「はあ?」

「一回死なないといけないだど?」

「私が最後の手を加えれば、何年後になるかわからないけど仙人になれるわよ、まあその気が私には無いんだけど」

「やれ、そしたら見逃してやる」

「何としても成功させてやる」

「分かったわ、行きましよう?」

「…………… 成功するんだろうな」

「どうでしょう、五分五分と言ったところかしら」

「相変わらずヘラヘラ笑っている」

「もし失敗したら、テメエを「成功したわよ」……………」

「そうか、ここに俺がいる理由が消えたな」

「立ち上がり部屋を出ていく」

「…………… 屠自古、布都」

「部屋を出ると二人がいた」

「拓也、ワシらも、仙人になろうと思う」

「なっ!!一回死ぬことになるんだぞ!!」

「分かっている、が、あの方を太子様を一人にはできないからな」

「………そっか、分かったよ」

「二人とも神子をたのんだ」

「ああ」

「任しておけ」

「二人を後にし家を出る」

「……光」

「止めなくて良かったんですか?」

「少し心配そうに見てくる」

「ああ、あいつらが決めたことだからな」

「そう言っても、後悔してないわけではない」

「………帰るか」

「………はい」

とは、言っても向かう場所に、心当たりが見つからない
が………

どこを目指すわけでもなく、ただただ次の出会いをもとめて歩いて
いく………

オリキャラ説明2

天童 拓也 (てんどうたくや)

能力：『能力を操る程度の能力』

神化？ 『能力を司る程度の能力』

性別	男	身長	165cm	種族	全能神	年齢	?????
歳							?????

・基礎能力アップ

基礎能力値を上げる能力

(力) ^{パワー} すべての能力値を1.5アップさせる

(攻) ^{アタック} 攻撃力アップさせる

(守) ^{プロテクト} 防御力アップさせる

(速) ^{スピード} 速度アップさせる

(技) ^{テクニック} 技術の模倣する

(能) ^{アビリティ} 特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで

Level1からLevel5まであり、Levelが増える事に
能力値が上がる

注 (Level1は、言わない)

(攻) (守) (速) は、もう一段階上がある

(攻) ? (破壊) ^{デストロイ}

(守) ? (反射) ^{リフレクション}

(速) ? (光速) ^{ライトニング}

(破壊) ^{デストロイ} すべてを破壊する (誤って自分の腕を破壊

することもある)

(反射) ^{リフレクション} 攻撃を反射する事が出来る

(光速) ^{ライトニング} 光速で行動することが出来る

この3つのいずれかを使う時、一つしか能力を使えない

・能力模倣
アビリティコピー

能力名を知る、能力を認識する

この二つの条件を満たせば相手の能力が使える
一度に使えるのは一つまで

- 『金属を操る程度の能力』 音無鈴
- 『あらゆる薬を作る程度の能力』 八意永琳
- 『劣化させる程度の能力』 劣鬼
- 『重力を操る程度の能力』 重鬼
- 『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』 剛力要
- 『傷を癒す程度の能力』 薬師恵
- 『植物を操る程度の能力』 草壁緑
- 『音を操る程度の能力』 音無響
- 『紙を操る程度の能力』 美紙彩
- 『霧を操る程度の能力』 渋谷霧栄
- 『ありとあらゆる物を遮る程度の能力』 剛力円
- 『絵を具現化する程度の能力』 墨野絵里
- 『繊維を操る程度の能力』 生糸小鞠
- 『電子を操る程度の能力』 原子穂
- 『五感を繋ぐ程度の能力』 夢彩結
- 『乾を創造する程度の能力』 八坂神奈子
- 『坤を創造する程度の能力』 洩矢諏訪子
- 『十人の話を同時に聞く程度の能力』 豊聡耳神子
- 『風を操る程度の能力』 射命丸文
- 『空気を操る程度の能力』 天魔
- 『壁をすり抜けられる程度の能力』 霍青娥
- ↓使える ? ↓使えない

・能力停止
アビリティストップ

相手の能力を停止させる

相手の能力が分かかっていない場合使用不可
自分も能力が使えないくなる

・付与
エンチャント

能力を対象の物、人に付けることができる

・回復能力アップ
リカバリイ

回復能力を一時的に上げる

体力を使うため疲れると、効力が落ちる

・能力破壊
アビリティブレイク

対象の能力を消す

能力での攻撃を打ち消す

(イメージ的には幻想殺し、違うのは能力者に対して使うと相手が能力を失うこと)

・能力創造
アビリティメイク

能力を作ることができる

一度使うと次に使えるのが一年後

少しおちやらかな温厚で優しい男の子

神の手違いで死んで転生した転生者

茶髪の髪でアホ毛が立っていて、髪を後ろで結っている

中性的な顔だちをしている

服装：白いシャツ 黒いジャケット 黒いジーンズ 左手首に鈴の

鈴蘭の模様の腕輪

月明 光 (つきあかりひかり)

能力：『光を司る程度の能力』

性別 女 身長 154cm

種族 付喪神

年齢

???歳

光を吸収し攻撃に変える レーザーや、光弾も吸収することができる

少しの間光速（299,792,458 m / s）で動くことができる

目はクリットとして蒼い、輝く金髪は横で三つ編みを作り後ろで束ねている

性格は、真面目で怒るとすごく怖い

お酒に弱い

服装：真っ白なワンピース 腰に月明光を掛けている

第四章 竹取物語編

第四十一話 境界を操る妖怪

今俺は、全国を転々として、回っている
だから一定の所に留まらない状態である
基本、食べ物、自分で採って自分で料理する
そんな生活を続けていた……………

「もう限界です!!」

「えー結構楽しいじゃん、野宿とか」

「私、一応女子なんですけど!?!」

光さんが五月蠅い、もう女子って年じゃないのに……………

まあ、無視して食べるか

今日の献立、焼き魚、山菜のあえもの

うーん、やっぱり日本人として、穀物食べたいよなー 無いから
しょうがないけど、と言うか普通の今の時代の食事に比べればいい食
事してるよな…………… うん、うまい

「聞いてますか?」

「モグモグ きゆいてにゃい (聞いてない)」

「聞いてくださいよ!?!」

「ゴックン 食わないの?」

「食べます!!」

うん、俺の料理スキルがまた上がったぜ

フフフフ、フフフフ、フフフフ

ん?

「光? 何笑ってるの?」

「?、笑ってませんよ?」

「いや、でも今……………」

フフフフ、フフフフ、フフフフ

「マ、マスター!？」

まただな、なんなんだ？

ガツシ

「な!？」

何も無い空間に亀裂が入り、手が伸びて俺の足を掴んできた
その手の力は、強くそのまま引きずり込まれる……

「せい」

「きやあああ!？」

ことは、なく逆にその手の犯人を引きずり出す

「何だんだ?……妖怪かな?」

見ると、小さな（小学生ぐらい?）の女の子がいた

「なんで?なんで人間が妖怪の力に勝てるのよ!？」

成程、人間と思つて襲つたのか

「残念、俺等神様」

「え!？」

その子は絶望しきつた顔になり

「う、うえ、うえええええええん」

泣き出した

え!?なんで?ちよつと泣かないでくれよ!!

「うわあー」

光さん、うわあー泣かしたつて顔で見ないでくださいよ

「うえええええええん」

「いい加減泣き止んで!!こっちが泣きたくなってきたから!!」

「スミマセン、とって食われると思って」

「いや、食べないよ」

ハモった

「何であんな事を？」

「私、弱い下級妖怪だから、こうやって人間を捕まえるしかなくて
なるほど……………」

「さっきのは能力かい？」

「はい、スキマっていうのを開けるだけなんですけど……………
こんな感じに」

パツカと空間に亀裂ができる

「おお!!」

「そういえば名前聞いてなかったね、俺は、天童拓也」

こっちは、月明光だ」

「光です、よろしく」

「私は、八雲紫です」

「じゃあ、ゆかりんで」

「なんですかそのあだ名!？」

「ゆかりくん、ゆかりんの能力って『スキマを開く程度の能力』?
ゆかりんは、止めてください!?!多分そうだと思いますが」

「んー でもなー さっきからコピー出来ないんだよなー」

「え?コピー?」「えー出来ないんですか?」

「うん、だからゆかりの、の能力はもつとすごいと思うんだけど」

「そんな!! 私なんて全然ダメですよ!!」

ゆかりんは、手を横に振る

「だからさ、ゆかりんさえ良ければ調べさせてもらえないかな?」

「能力をですか?」

「そう」

「で、出来るんですか!?!」

近い!?!近い!?! そして、光さん怖い!!怖い!!

「相手の許可がいるけど…… どうするやる?」

「はい!! 私にもっと可能性があるなら、それを知りたいです!!」

「分かった、ちよつと失礼」

ゆかりんの頭に手を置く

「検索!!」

頭の中に情報が流れ込んでくる

…… スキマ妖怪……

…… ただ一人の種族……

八雲…… 賢者…… スキマ…… 境界……

…… 操る……

能力……

「ふうー分かったよ『境界を操る程度の能力』だ」

「境界?」

説明が要りそうな感じの反応だな……

「境界っていうのは境目のことだ、それを操れるっていうことは結構すごいことだぞ

絵や夢、物語の中の中にすら入り込むことが可能だし、

水と空気の境界である水面、天と地の境界である地平線すらも操れることができる」

「そ、壮大すぎて想像ができません」

まあ、そんなだけの力を使うには、そうとう強くないと無理だろうけど

「上級妖怪ぐらいにならないと多分しつかり使えないぞ」

「え!?!そんなんですか?」

「まあ、少しは、特訓につきやってやるよ、ゆかりん♪」

「ありがとうございます、と言うか、ゆかりんで決定なんです
ね……………」

ゆかりんは、ガツクリと肩を落とした

第四十二話 月の姫からの難題

面白い情報が入った

その情報は、都で買い物した時のことだ

何時も通り、調味料を買っていたら、屋台のおっさんが話してくれ
た

” あんちゃん知ってるか？ 都にかぐや姫っていう人がいるんだって”

” かぐや姫？”

” そう、かぐや姫だ、なんでもすっごい美女で、金持ちたちが何人も求婚に行ってるらしいんだ か〜!!俺も一目でもいいから見てみたいな〜”

かぐや姫、日本最古の物語である竹取物語に出てくる竹から生まれた、月出身の姫である

実話だったとは……………

もしかしたら、かぐや姫をとうして月とコンタクトが取れるかもしれないな……………

かぐや姫か…………… 会いに行ってみようかな？

でも、流石にこの格好は、目立つよな…………… 神子の時は気にしなかったけど

今の服装は、洋服よりである

和服ばっかの時代では浮きまくりである

しやーない、途中で買うか……………

着替え完了、黒ベースの浴衣みたいのにしてみた
変じゃないかな？

えっと、ここかな？

デツカイ、館だな……

「待て!!」

「うお!!」

門番?に止められる

「おなごが何のようだ?」

え?

「おなごじゃ、ないです」

「え?ああそうか、貴様みたいのがまさか姫に求婚と言う訳では無い
だろうな?」

はい、違います

求婚に来たわけじゃないしなあ

そうだ!!

「私は、姫を一目見るだけで満足です その為に試練を受けに来まし
た」

一応丁寧な言葉で

「うむ、そうかでは、通るがよい」

よかったー通してくれた

1、2、3…… もう何人かいるな

「かぐや姫のおなーりー」

お!!やっとか………ん?

スダレみたいみたいなのでも顔見えないな

「おお、かぐや姫わたしと結婚してくれ!!」

「いや、私と!!」

「いや、私と!!」

おっさん達「元気だな

「石作皇子と申します、ぜひ私と結婚を!!」

「車持皇子といいますが、絶対幸にしてみせます!!」

「右大臣阿倍御と申します、私こそがあなたにふさわしいです、ぜひ私と!!」

「大納言大伴御行です、あなたが望むのを手に入れます!!」

「中納言石上麻呂と申します、あなたのことを思うと夜も眠れません、ぜひ私と結婚!!」

「……………ん?」

「おいお前!!自己紹介は!?!」

ああ、俺かあ

「天童拓也、結婚は別にいいです、ただあなたと会って話がしたいだけです」

「……………な、なに〜!!……………」

結婚する気ないし、と言うか月に繋がりがああるかな?と思ってきたわけだし

「天童……………拓也……………」

かぐや姫さんにも印象がついたみたいだな
「分かりました」

では、石作皇子は仏教の宝である『仏の御石の鉢』を車持皇子は美しい七色の実を付ける『蓬萊の玉の枝』、右大臣阿倍御主人は燃えない毛皮の『火鼠の裘』、大納言大伴御行は龍が持つと言われる『龍の首の珠』、中納言石上麻呂は『燕の産んだ子安貝』、天童拓也さんは、この先南にある太陽の畑に生えているという『向日葵』を持って来てくたさい

持つてこれた方の要求をのみましよう」

うえー ハードだなみんな……………

にしても、俺だけ向日葵?簡単すぎだろ?

それにしてもみんななんで自信満々なのか?

あ、そっか、偽物作ってくるんだったな……………
どうせバレるのに……………

「ククククク、小僧残念だったな？」

お、この人俺を男として認識してた

久しぶりだな……………なんか嬉しい

「太陽の畑には、強力な花の妖怪がいる 命が惜しかったら諦めるんだな」

ああ、全然簡単じゃなかったな……………

まあ、明日にでも行ってみるか……………

命足りるだろうか？

第四十三話 VS花の大妖怪

「…………… と言う訳で、今から太陽の畑に行きたいと思いまっす!!」
「と言う訳でじゃない!!なんなんですか、あなたは!？」

次から次へと厄介事持ち込んで、あなたホントはドMでしょ!!このドM!!」

「Mじゃねえよ!!」

何だよ、この前伝えず行動してた時怒ったくせに、伝えても怒るのかよ

「それじゃー出発ー」

「話聞いてました!？」

…………… 向日葵しかないんじゃないんじゃん

右を見ても左を見ても一面向日葵畑である
ん?あれは……………

向日葵畑の中心に白のカッターシャツとチエツクが入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチエツク柄のベストを羽織って日傘をさす緑の髪の女性がいた

「こんにちはー」

「あら、こんにちは」

「綺麗な向日葵ですね」

「ええ、心を込めて育ててますもの」

「一本貰っても?」

「いいわよ」

よかったー断られたらどうしようと思ってたけど……………
「ただし……………」

ん?

「あなたも命と引換に……………ね?」

なっ!?

突如、閃光が襲う

「くっ」

空に一旦避難する、が

向日葵が追尾してくる

「光!!」

手に月明光^{ゲツメイコウ}、黄色い刀身の日本刀が手に現れる

「テエリアアアア!!」

花を薙ぎ払い、緑の髪の女性に斬りかかる

キーンと、甲高い音を立て傘と剣が交じり合う

はあ?なんで斬れないの?、あの傘どんなに硬いんだよ!!

「基礎能力アップパラメータ(攻)アタック(守)プロテクト(速)スピード Level 3!!」

次々と襲いくる向日葵を躲し、懐に潜り込み

「光符「光明斬」!!」

光の斬撃を至近距離で放つ

少しはダメージ入っただろう

攻撃によって巻き上がった煙の方を見ていると、突如極太レーザー
が飛んできた

「ツツ!」

身をよじり回避を試みるが間に合わず、月明光で受け止める形で吹
き飛ばされる

「ガアツ!!」

「ふふふ、いいわ、いいわ、すっごくいい 久しぶりにワクワクして来
たわ!!」

なんか、オラ、ワクワクすっぞ!!みたいな感じになってるんですけ

ど……………

遠くにいる敵を見ていると、一瞬にして目の前まで来る
!!

急に速度上がり過ぎだろ!!

くっそ、防ぐので精一杯だ

敵のラツシユを防ぐのが精一杯で反撃ができない

「ハア!!」

「ガハアツ!!」

腕を弾かれ腹に叩き込まれる

っ、強ええええ なんなんだよコイツ!?

敵を見ると傘をこちら側に向けていた

傘の先には、高エネルギー

本能的に危険を察知する

「ヤバツ!」

「元祖「マスタースパーク」!!」

傘の先端から極太レーザーが放たれる

「くっ!!^{チェンジ}変更Level5!!」

最大出力で躲す

あつぶねー

あれ?そう言えば……………

「なんで戦ってたんだ?」

戦いになっている理由がわからない

「俺らなんで戦ってたの?えつと……………」

「風見幽香よ、あなたが向日葵を採ろうとしたからでしょ?」

「イヤだから何でだよ」

「あなたは向日葵の命を奪おうとした、だから私があなたの命を貰う
の」

「?」

本当にようわからん

「まあ、今は強い相手と戦いたいだけだけどね」
戦闘狂かよ!!

ガシ

足に違和感を感じ、視線を落とす。そこには、足に絡みつく向日葵のツタがあった。

慌てて蔦を切った。

その瞬間、風見幽香から目を離していた。

その一瞬が命取りだった。

風見幽香は、距離をゼロまで一気に詰めてきて、傘を突き立てる。しかし、さつき^{Level 3}までとは違う。

月明光を使つて傘を受け流し、そのまま攻撃

「!？」

ギリギリのところかわされ、髪の毛に当たり風見幽香の緑の髪が舞う。

いきなりの、動きの変化に戸惑う風見幽香を隙を見逃さず、もう一撃放つ。

「クツウ!!」

風見は向日葵を操り妨害をする……………が

「^{アビリティコピー}能力模倣模倣対象^{みどり}「緑」」

こつちも、^{向日葵}植物を操り、応戦する。

「しゃくらせえ!! 緑符「プラント・インパクト」!!」

植物を集め、手の形を作り叩き込む

「グウ」

傘で防御を試みたが、威力を殺しきれず吹き飛ばす。

風見幽香の持つ傘がくの字に折れ曲がる。

やったか……………？

しかし、倒れずに風見幽香は、立っていた。

ボロボロになりながら、血を流しながら

それでも彼女は笑っていた。

その姿は、異形だった。

静寂が広い、広い、向日葵畑を包む

そして……………

全能神は剣を構え
花の妖怪大妖怪は傘を構え
そして、二つの影が激突した

第四十四話 輝夜の頼み

うへえー強かったー

今までで一番強かったな……………

「疲れましたねえ」

「ああ」

まあ、向日葵を無事手に入れたからいいか
もう、戦うのは、ゴメンだけど

屋敷についたな

ん？あれは…………… 右大臣阿倍御主人か

えっと、燃えない毛皮、火鼠の裘を持って来いって言われてた人だ

あ、毛皮燃やされた

ああ、ああ、めっちゃ燃え上がってんじゃん

かわいそうに、帰っていちやっただ

おお、次に来たのは、車持皇子か

なんだっけ？あの人を持つてこいって言われた物

そう思っていると、家来みたいな人が綺麗な玉をつけた枝を出して
きた

ああ、蓬萊の玉の枝か

なんだったけな、確かあれガラス細工だったけ？

「あなたの言う蓬莱の玉の枝を持って参りました」

うーん、なかなか精巧に作られているな

まあ、バレルんだけど

「これは!!本物です……」

「やったあ!!」

かぐや姫困ってんな、でも大丈夫、今 取り立て呼んできたから

「車持皇子様!!ちゃんとお金を払ってください!!」

「なっ?!お前は」

しつかりお金は、払ってから来ようぜ

さてと、俺の番か………

「向日葵を持って参りました」

「いいでしょう、中へどうぞ」

かぐや姫に呼ばれて中へ

うわあ、めっちゃ睨んでる、睨んでる

自分が悪いんだろ

怖いなあ ……

「失礼しまーす」

部屋に入ると、黒髪ロングの姫、かぐや姫がいた

確かに美しい

「どうぞ」

「どうぞ」

お爺さんがお茶を置いていく、この人が竹取りの翁かな？

「下がっていいわ」

かぐや姫がそう言うとおじいさんは、部屋から出ていった

「…… あー疲れた、なんなのあのクソオヤジどもは、揃いも揃って嫌な奴ばっかり」

「え？」

さつきまでの喋り方から一変、すごい口が悪くなった

「ああ、ごめんなさい でもこれが素だから」

「はあ」

「改めて自己紹介するわ、蓬萊山輝夜よ

それにしても会えて嬉しいわ、天童拓也さん」

「え？俺の事知ってたの？」

「当然よ、月にいる者なら誰でも知ってるわ、教科書に載ってるぐらいだから…… でも、まさか女だったとは」

「女じゃない!!」

みんな間違えてくるな……

まあそんなことよりも、俺 教科書に載っているってマジかよ

「どんなふうに言われてんの？」

少しワクワク

「問題児軍の問題教官」

「何その悪口!?!」

酷くねえか？

問題児軍ってあいつらのことか!?!絶対あいつらだな!?!俺関係なくない!?!

問題教官って何だよ あれか？警戒態勢の時、連絡行つてなくて、あっちこっちブラブラしてたからか？ツクヨミが住んでるタワーを壊しかけたことか？

「ププツ 嘘よそんな訳無いじゃない、英雄さん」

「英雄？」

「地球から月への移動のさい、一人で地球に残り妖怪の追撃を防ぎ多くの人の命を救って、死んだと言われてるわ」

いや、死んでねえよ!?! 確かに死にかけたけども……

「まあ、永琳は あの人のことだから地球で飄々と生きてるわ って
言ってたけどね」

「永琳を知ってるのか？」

「ええ、私の世話係だったからね、あなたのことはよく聞いたわ、永琳
は何時も貴方の事を嬉しそうに話してたわ

天童拓也って名前が出た時まさかと思ったけど、本物だったなんて
ね」

そうか、永琳も頑張ってるんだな

「拓也、一つお願い聞いてくれない？」

「お願い？」スズツ

質問に質問で返しながら、お茶をすする

あ、美味しい

「私を誘拐して」

「ぶっ!!熱ッ…………… はあ?」

何を言ってるのこの子?

「次の満月の日、月から迎えが来るの」

竹取物語でもそうだったな、確か帝が軍を用意してもダメだったけ

「私、月に帰りたくないの」

え?

「私は、月での生活に飽き飽きしてたの だから蓬萊の薬を飲むとい
う罪を犯し地上に降ろされるようにしたの、もしかしたら永琳が言っ
ていた、天童拓也に会えるかもって、そうでなくても、この退屈な生
活も変わるかもって」

「地上に降りてから毎日が楽しかったの

だから私は、退屈なあそこへ戻りたくないの」

誘拐してって言うのは逃がしてくれていうことか

「心配しなくても大丈夫さ、お前が願えばうまいこといくって」

「本当?」

「ああ、願いを叶えてこそ神様だしな」

「え?拓也って神様なの?」

「まあな、とにかく俺に任せとけ!!お前の望みは俺が叶えてやる」

「フフ、ありがとう。そして、よろしくね拓也」
「おう、任せとけ!!輝夜」

第四十五話 対、月の使者の作戦会議

「話し合いするならコイツも出しとくか……………」光
「はい」

拓也の持っていた刀が女の子になった

「え?えつ?」

え?何が起こったの?

「コイツは、月明 光だ」

「光です よろしくお願いします」

普通に自己紹介してるけどなんなのこの子は?

と言うか、なんで刀が

「えつと、なんで刀が人に?」

「?」

ダメだ……二人とも何がおかしい?って顔してる

「普通刀は人にならないわよネ」

「!!」

あ、伝わったみたい

「光は元々刀だったんだけど、付喪神として人になれるようになったんだ」

「という事は、アナタも神様ってこと?」

「はい、そうです」

「じゃあ、自己紹介も終わったし話きかせてくれる?」

「はい、わかりました」

すこし、心配になってきた……………

「まず、いつ来るか どんな奴か 後武器とか戦法かな」

「いつ来るかは、次の満月の夜ね」

「明日ですね」

「早いな……………」

「武器は、月で最新鋭の武器で来ると思うわ」

「最新鋭って?」

「レーザー砲とか、ビームサーベルとか……………かな?」

「まあ、今の時代の技術の数万年後ぐらいの技術の兵器で間違いないわ」

「こっちの戦力(地上の兵)は、役に立たなそうだな

「どんな奴かって言うのは、あなたも知っているわ」

「俺が知っている?」

「ええ、軍総隊長…………… 剛力要」

「うんうん、軍総隊長の剛力要…………… え? はあ? 要え!」

「要が総隊長? 何あいつめちやくちや偉くなってるんじゃないか

「その要さんの奥さんの軍医療部隊 隊長、剛力恵さん」

「ああ、恵…………… ん? 奥さん!? 剛力!」

「あの二人結婚したの!」

「後、軍最強の特殊部隊の美紙彩、剛力円、渋谷霧栄、音無響」

「あいつらかよ!?!いや問題児だよねあいつら!!」

「こんな所かしらね」

「全部知り合いなんですけど……………」

「情報は、オシマイ…………… 何かある?」

「何もなし…………… じゃあ、色々準備とかするから、明日な」

「ええ明日」

くある森にある手作りログハウス

コタツに入りながら考え事をしていた

え？コタツどうしたかって？作ったんだよ!!寒いんだよ!!この頃
うーん、どうしようかな……………

相手は、知り合いだしな…………… 顔バレたくないしな

ズズツ あくお茶うめえく 身に染みる

「私にも一杯下さいな」

「ああ、ちよつと待ってろ」

ゆかりんに、お茶を注いでやる

「隙間使つて出て来たんだから、もう少し驚いてもいいと思うんだけど……………」

「この年になると、大抵のことじゃ驚かんのじゃよ」

あれ、今何歳だっけ？

ま、いいか

「ゆかりん」

「なあに？それとゆかりんは、止めて」

「明日、多分お前を呼ぶからそんな時手伝ってくれよな」

「いいわよ、師匠の頼みだし」

さて、ゆかりんにも頼めたしあとは、明日になるのを待つだけ
か……………」

そのままこたつで睡眠しよう、おやすm「コタツで寝たら風邪ひきますよ」………… 布団に行くか……………」

第四十六話 ヒーローは遅れてやって来る

私のお屋敷にはたくさんの軍隊が押し寄せてきていた
お爺さんに月からの迎えがあると云ったら、大変な事になってしまった……………

天皇が兵士たちを集めだようだ
それにしても、拓也はどこかしら？

「敵軍!!敵軍!!戦闘準備よーい!!」

兵士の一人が叫ぶ

月の兵士のおでましのようだ

空から降りてきたのは、鉄で覆われた船であった
普通の船では無く、宇宙艦のなうな形だ

「弓矢隊よーい!! 放てーーーー!!」

弓矢を持った兵士たちが一歩前へ出て一斉に火矢を放つ

この時代ではかなり強力な攻撃だろう……………が

戦艦の装甲を撃ち破れるわけは無く、だだむなく弾かれていく

「怯むなー!!放て!!」

弓矢を放ち続けるがギズすらつけられない

突如、戦艦の先頭についている大砲のようなものが光り出した

あれは!!

「逃げてえ!!」

危険を伝えるために叫ぶ 次の瞬間、大砲から高エネルギーの

レーザーが発射され兵士を薙ぎ払う

一瞬にして多くの兵士を灰に変えてしまった

「ああ、あああああ」

私のせいでこの人達は……………

「逃げて!!早く!!あなた達では敵わないわ!!」

「それは無理です!!我々は、あなたを守るためにここにいます」

「でも!!」

その時、ゴゴゴコと大きな音を立てて戦艦のハッチが開き中から月の兵士が出てきた

その中には見知った顔があった

「永琳……………」

「姫様……………」

永琳は何か言いたさげな顔でこちらを見る

「永r「迎え撃てー！！」「オー！！」「」

月の兵士と地球の兵士がぶつかり合った

しかし、戦力差が足りすぎた

兵士の量では断然こちらが勝っているがそれを大きく上回る兵器の力

地球の兵士たちは、見知らぬ武器に戸惑いつつ戦い、そして次々と倒れていく

庭は、どんどん紅色に染まっていった

「姫様」

「え、永琳!？」

気付くとすぐ近くに永琳が立っていた

「もう止めて永琳!! こんななの、こんなのがあんまりだわ!!」

「姫様は…………… 姫様は、地上に残りたいのですか？」

「え……………」

「もう一度聞きます、姫様は地上に残りたいのですか？」

「ええ、私は、地上に残りたい!! もう月になんて戻りたくない!!」

「…………… 分かりました」

永琳は、静かに頷き　そして弓矢を構え矢を放った

しかし、永琳が矢を放ったのは地上の兵士ではなく月の兵士の方だった

月の兵は頭を貫かれ倒れた

「八意永琳!! 我々を裏切ったか!!」

「裏切つてなどないわ

ただ、私は姫様の味方であり続けるだけ!!」

そう言つて月の兵士に向かって矢を放つ

「姫様!! こちらへ」

永琳に手を引かれて逃げ出そうとする

「逃がすな!!反逆者を撃てえ————!!」
「なっ!!」

多方向から、レーザー砲が飛んで来る

永琳でもよけきれない

衝撃に耐えようと目をつぶる

が、衝撃はいつまで経っても来ない

目を開けるとそこには

「よう、永琳!!遅れてスマン」

いつか永琳が話していた時のように天童拓也ヒロキがたっていた

少年は無邪気な笑みをこぼしていた

第四十七話 昔の仲間、今の敵

「よう永琳!!遅れてスマン」

「どなた？」

「え？分かんない!?酷くない!？」

拓也だよ、天童拓也!!」

「嘘よ、拓也は男よ」

「俺は、男だ!!」

「…… 本当に拓也なの？」

「そうだと云ってるだろ……」

「……」

「何だよせっかくの再開なんだから喜べよ」

拓也は、月明光をもち黒いローブに身を包んで現れた

「まさか、女の子になってたとは……」

「うん？永琳一旦女の子から離れようか」

女の子にしか見えないからしょうがない

「まあ、積もる話はまた後で…… ゆかりん!!」

「ゆかりん言わないで!!」

何も無いところから誰かが出てきた

「ゆかりん、この二人を逃がしてくれ」

「頼みってこれだったのね、まあいいわ師匠の頼みだしね」

「じゃあまた後で」

そのまま、拓也は、敵軍に突っ込んでいった

「さあ、貴方達はこっち」

ゆかりんと拓也に呼ばれていた、妖怪が空間に亀裂を作る

「でも、まだ拓也が」

姫様は心配そうに言うが

「大丈夫よ拓也（師匠）はそう簡単には負けないわ」

妖怪とセリフが合う、この妖怪も拓也の強さを知っているのだろう

「では、お願いします」

「どうぞ」

私達は、亀裂の中へ進んでいった……………

さーて、始めますか

俺がローブを着てきたのは、知り合いにバレないようにするためである

「基礎能力アップパラメーター（攻）アタック（速）スピード Level 4

次々と敵を薙ぎ倒していく

「何なんだアイツは!？」

「何でもいいこっちの味方みたいだからな!!

あやつに続けえ!!」

よしよし、こっちの兵士の士気も高めれたな

「紙符ペーパークラフト「紙創造（剣）」ソード!!」

!! この技は

迫っていた剣を避ける

剣は地面を叩き割った

……美紙か

教え子が出てきたよ、てか威力高くなりすぎだろ!!殺す気か!!

「くっ、外したか やりますね

でも、まだまだ、ここからです!! 行きます!!」

おお、中二病治ってる

お父さん嬉しいよ（泣）お父さんじゃないけどね

「紙符ペーパーガン「紙弾」!!」

おっと、流石に数も多くなってるな

チェンジ
ライトニング
「変更（光速）」

「なっ!？」

玉を全てよけ、剣を振り下ろす

痛いだろうけど、みね打ちで許して

ガツキーン

ゑ？

「…… 遮断ディフェンス・アーマー「防御の装甲」」

はい、二人目来ました、円ちゃんです

「ふん」

「うお、あぶねえ!!」

いきなり手を横に振ってくるな!!絶対当たったら体もげてたわ!!

ギャー

ウォー!ダイジヨウブカ?

ナンダナンダ?

風圧で向こうの方がグチャグチャに……… うん、もげるです

まないな、塵と化しちゃうなこれ

「はっ!!、たあ!!、てい!!」

危ない!!、危ねえ!!、危ないです!!

おい、教官への配慮がなってないぞ!!

あ、教官ってわかってないか

「ちよこまかちよこまかとお 要にいい!!」

えっ、ちつよと!! 要まで来るの!?!勘弁してくれよ

「なんだ?美紙、円」

来ちやったよおーーー来なくていいのにーー!!

「要にい 気をつけてコイツかなり強い!!」

「私もやられかけました」

そんな時にやられとけよ

「マジかよ……… 三人で協力してやるぞ!!」

「はい!!」

止めて!!本当にやめてくれ!!

「うおーくうらえ!!」

要が突撃してくる

拳からまっすぐ伸びる一直線が綺麗さっぱり消える……………消える?

「うおおおお!」

なんだよあれ?なに?有効範囲操作可能なの!?

要さんマジパネエス!!

「くっそ、かわされたか……美紙!!、円!!」

「はい!!」

「まかせて!! 紙符ペーパー「紙創造クラフト(拳)グロフ」!!」

二人同時、に殴りかかってくる

くっそ、そろそろ一刀じや限界かな

「鈴!!」

言葉に反応し剣が生まれる、そこまでイイ剣じゃ無がしょうがない
迫る拳を剣と刀で防ぐ

「「なっ!!」」

あ、やっべえ コイツら鈴の腕輪知ってる奴らだったわ
でも完全には気付かれてないな……………

よし

「アビリティコピー能力模倣模倣対象「てんま天魔」ボソツ」

くらいやがれ!!

空気砲くドツカーン

「うお!!」

「「要(さん)にいい!」」

ちなみに非殺傷なので攻撃力は、皆無である

「くっそお 行くよ!!円!!」

「ええ!!」

要はだいぶ吹き飛んだから帰ってくるのにもう少しかかるだろう
な

今のうちに一人でも倒したいな

剣をグローブに変更させて手に金属を纏わせる

「鈴符「鉄拳制裁」!!」

「きやあ!!」

「円!!」

円を吹き飛ばす、まあ防御ディフェンス・アーマーの装甲発動してるから無傷だろうけど

今のうちに気絶させるか

「霧符「霧ミスト・ラッシュの連弾」!!」

うええええええ!?

あぶなっ!!

と言うか今の技は………まさか……

「大丈夫ですか皆さん」

「霧栄!!」

来ちゃったよー3人目!!霧栄さん!!

このままだと、4人目も来ちゃうよ

いや、考えるなフラグにしか聞こえてこないぞ、俺

「お待たせー」

「響!!」

………来ちゃった

フラグ立っちゃったよ!!あくもおく

「スマン皆!!」

要も帰ってきちゃったし!!

5人は、こっちに向き直り

「気を引き締めて!!皆行くぞ!!」

「「はい!!」」

ヤバイ、どうしよう………

第四十八話 逃げるが勝ち

ヤバイヨ、ヤバイヨ

どっかの芸人みたいなセリフが出てしまうぐらいヤバイ
だいたい、5対1なんて不利すぎるだろ!!

要が正面、円が右、美紙が左、響と霧栄が後衛で来る

「せい!!」

美紙は、紙の剣 円は、拳で攻撃をしてくる

剣を避けてから円の腕を掴み放り投げるが

「うおりああ!!」

「グッ!!」

要が正面から突っ込んで来て吹き飛ばされる

そこへ、霧の拳と音の衝撃波の追い打ち

「ハアアアアア!!」

「ガアッ!!」

屋敷にそのまま激突した

なんなんだよ、コンビネーション良すぎだろ!!

「回復能力アップ……………ん？」

疲れてきたせいかな、回復が遅い

マジかよ……………

『大丈夫ですか？私も出ましようか？』

刀の状態の光が提案してくる、仕方無いな

「光!!」

「はい!!」

声に反応して、刀が人型になる

「「「なっ!?!」」」

そりゃあびつくりするよな、刀が人型になったら

「光、行くぞ!!」

「はい!!」

光が光速で前へ出て刀を振り下ろす

それに反応して5人は、散らばる

「マスター見ててください!!私、月の光が一番強くなれますから」

光は、そう言い刀を掲げる

いつもより強い光を帯び輝き出す

「行きます!!」

光は、光速で動き5人に次々と斬りかかる

いぞ!!時間稼げるだけ稼いでくれ!!

もう少しで、準備が終わる

「たぁー!!」

「くっ」キン

「なんなんだコイツ!」

「こつちだつて分かんないよ!」

「お喋りしてる暇はありませんよ!!ハアアア!!」

光が黄色い斬撃を放つ

「うわあ!!」

「きやあ!!」

要と円が吹き飛ばされる

「光!!ナイス時間稼ぎ!!」

光がみんなの気を引いている間に準備をしていた

何の準備かって?

その答えは、空にあった

空には、月を覆い隠すほどの大量のナイフが設置されている

「まさか!!ちよ!!マスター私まだここにいるんですけど!!」

「大丈夫!!お前ならかわせる（*☒ω☒*）?」

「嬉しくない信頼!!」

「鈴符「降り注ぐ刃」!!」

「ちよつと!!ギヤアア!!」

ふう、これで終わりか.....

「貫通「一点貫通撃」!!」

突如、腹を貫かれる

「ガアハッ…… あっ…… あ……」

口の中にも血の味か広がる

神力を流し、傷の回復に努める

迂闊だった、まだ倒れずにしかも、攻撃をしてくるとは……………

「流石だな…… 要」ボソツ

かつての親友、一筋縄では行かないようだ

「みんな畳み掛ける!!貫通」「一点貫通撃」!!」

「断符「遮弾」!!」

「紙符「紙の連弾」!!」

「霧符「霧の連撃」!!」

「音撃「爆音波」!!」

五つの攻撃が迫り来る

「ツツ!?マスター!」

光は駆け出すが間に合いそうにない

五つの攻撃が衝突するが、攻撃そこで消えてしまった

俺は使ったのである、俺の能力の最強の技、相手の能力、能力によ

る攻撃を完全に消去する技……………
能力破壊を

「あの技は……………」

ローブが使った技に見覚えがあった

能力停止かつての仲間天童拓也が使っていた技に似ている

その前に使った技にも見覚えがあった

まさか…………… いや、それはないか

自分の考えを否定する

アイツは死んだ筈だ

しかし、よくよく見ると腕輪は、鈴の腕輪と同じもの、刀も月明光である

鈴の腕輪に、能力は無いはずだし刀が女の子になるなんて聞いたことがない

やっぱり、ただの勘違いなのだろうか？

「要さん…… あれって……」

他の皆も同じように感じたようである

ローブで顔が見えないから、判断しようがない

この際、任務とかどうでも良くなってきた

「皆!!ローブを剥ぐこと優先にして攻撃!!」

輝夜姫は、後回しでいい!!」

「「はい!!」」」

待っている、今その化けの皮を剥がしてやる

「大人しくやられる!!ってか顔見せやがれ!!」

あ、これ感づかれたやつや

「と言うか任務は良いのかよ!!軍総隊長の名がなくぜ!!」

「勝手に泣かせておけ!!」

明らかに、ローブ狙ってきてるな………

でも、もうそろそろいいかな

「光!!」

「はい!!」

「逃げるぞ!!」

「はい!!……… ぁ?」

「逃げるぞって言ったんだ!!」

「倒さないんですか?」

「輝夜逃せばそれでオーケーなの

Are you OK?」

「お、オーケー?」

「そうと決まれば………」

「逃がすか!!」

あぶなっ、ローブ取れかけたじゃん

「パラメーター基礎能力アップ (光速)!!」

行くぞ光!!全速力だ!!」

「はい!!……… ってどこへ向かうか知らないんですけど!?あ、置いてかないで!!」

「待って!!……… 行っちゃったか」

く帰り道く

にしても、みんな強くなってたな……… 死ぬかと思った、うん

昔の俺だったら5回は死んでたな

「マスター待ってください……… ぐうへえ!!」

急に止まらないでください!!」

そう言えば……… 恵いなかったな………

() < 〇 > () 、 ; ; . . クツシユン

「なんででしょう？忘れられてたきが……」

第四十九話 語らい

「いやー無事でよかった」

俺らは、竹林にいた

「寒いですねー マスター、家作って下さい」

「唐突だな!?!... まあいいけど」

「いいの!?!」

テレテツツテ テレテツツテ テレテツツテ テレテツツテ

テテテ テレテツツテ テレテツツテ テツツツテ

天童3分クッキング!!

用意するもの天童拓也... 以上

3分で家を建てマース

少年建設中...:

「出来た!!」

「はやっ!?!」

和風な感じで仕上げました

永琳達は、ここで暮らしてもらえばいいか

「いやー、それにしても久しぶりだな」

「そうね、何年ぶりかしら?」

「3億年ぐらいいじやねえ?」

3億年か……自分で言っていて凄いな……

「拓也、ちよつといいかしら?」

「ん?何?輝夜」

「アナタなんであんなに来るの遅かったのかしら?」

「……」

「何でかしら?」

寝過ごしましたなんて言えない

「ほらローブの用意とか……」ローブは、昨日用意できてたわよね

?」……はい」

「何でかしら?」

ヤバイ、黒い影が見える

「ほら、アレだよ アレがアレでアレだったんだよ」

「アレってえ?」

「アレは、アレだよ」

ヤバイ、ヤバイ

「ふうーん……… 光さん」

「はい?」

「拓也、出発前何してた?」

うおおおおお!!光に聞くのは反則だろ!!

言うなよ?絶対に言うなよ!?!?!?! フリじゃないからな!?

伝われく伝われく

お、こつち見た あ、頷いた よかったー 伝わったみたい

「寝てました」

うおおおおお!!

裏切ったよこの子!!うわあ、すっごいいい笑顔

何?伝わってなかったの?伝わった上で無視したの?後者ならタ

チ悪すぎだろうちの付喪神

「よし、お仕置きしないとね?永琳?」

永琳助けて………

「はい!!姫様」ニッコ

ジリジリと二人が近づいてくる

「待て!! 話せばわかるから!! ちよつと待って!! 話し合えば……………」
「うわああああ!!」

「もう嫌だ………… お婿に行けない」

「お嫁じゃないの?」

「俺は、男だつて言ってるだろ!! 永琳!!」

「疲れた………… こたつが恋しい

「今後、あなたはどようするの?」

「どようするつて?」

「私は、姫様とこの家で暮らしていくけど………… あなたはどようするの
かと思つて」

「ああ、まだ旅を続けるつもりだ」

「そう………… 気をつけてね」

「おう!!」

「お待たせーつて何この空気」

「お、ゆかりん帰つてきたか」

「ゆかりん言わないで!!」

ゆかりんに食べ物を買つてきてもらっていたのである

「よーしつ、鍋パーティー始めるぞ!!」

「二「おー!!」二」

みんなで仲良く食べました…………… 闇鍋を……………

「うわあ、ナニコレ!」

「下駄!」

「なんてももの入れてるのよ!？」
「俺のせい!？」

第五十話 神社の名前

「ひさっしぶりに、あの神社行こう」

「あの神社？」

「どこですか？」

「ほら神子の時の……」

「ああ、あの神社」

「??」

ゆかりんは、知らないよな……そんな時は、会ってないし

「でも、またなんで急に？」

「この前、去った時かなり急だったからさ、一応俺の神社なんだし行つ
ところと思つて」

「いや、何百年前の話ですか!?その時の人誰も生きてませんよ!」

「あのー話についていけないんですが……」

「まあ、気まぐれに行くだけだし」

「あれ?聞こえてませんか? 師匠く光さんく」

「まあ、良いですけど」

「じゃあ、行くか!!」

「はい」

「無視しないで」グッス

とーちやく

いやーひっさしぶりだな、だいぶ村、大きくなったな……村つて

より町？

神社は……………あれ？ない!!

前（数百年前）に来た時にあった場所に神社がなかった

「ナンデナイノ？」

「見限られて取り壊されたんじゃないんですか」

「そんなあ!!」

まさか、そんな人々だったとは……………いや、諦めるのは、まだ早い聞き込み開始だ!!

「すみませーん」

「？何でしょうか？」

「ここにあつた神社知りませんか？」

「神社ですか？…………私が覚えている限りでは無かったと思います
が」

なん、だと!!

「そうですか、ありがとうございます」
諦めるな俺!!

「神社知らない？」

「知りません」

ズーン

ま、まだだ

「神社「知らんナ」」

まだいつてねえーよ!!

くっそ、どこ行ったんだ？

「あのーちよつといいかのお?」

誰このじいさん？

「神社を探しとるんじゃないやろ？それならちよつど百年前に山の上に移転

させたんじゃ」

山の上？誰も来ないじゃん

まあ、行ってみるか……………

あつたあああああ!!

神社あつた!!

まあ、俺は最初から信じてたけどね

「良かったですね」

あー、でもなんでこんな山の頂上に立てたんだ？

「どうしましたか？」

知らない声を聞き振り向くと巫女さんがいた

「いや、なんでこんなところに移転したのかなって、ここの関係者ですか？」

「あ、はい　ここ、博麗神社の巫女です」

「どうも、その神社の神です」

「あ、神様ですか…………　あれ？え!?神様!？」

「そう神様、でなんでこんな山の頂上に？」

「あ、それはですね　昔妖怪が攻めてきた時にこの神社から結界が出まして、町も大きくなったし結界の範囲を広げるため高いところに」

よかったーなんか普通の理由で、邪魔だったからとか言われたら泣いてたよ

「今日泊まっていい？」

「は、はい!!どうぞ」

神社を無事発見できました

よかった……………

第五章 妖怪の山編

第五十一話 天狗の山、再び

俺と、光、紫は修行しながら旅を続けていた

「ゆかりん、だいぶ強くなつたなー もう上級妖怪ぐらい行つたんじゃない?」

「ありがとうございます」

ぶつちやけ、どので覚えてきたか知らない結界術は、こっちが教えてほしいぐらいである

「そうですね、わたし達も頑張りませんとね…………… あれ?ここは……………」

「どうした?…………… あっ!!」

目の前の山に目をやる

そこは、妖怪の山であった

いやーひっさしぶりだな…………… よって行こうかな……………

何でこうなつた……………

周りの白狼天狗を見ながらそう思う

「ここは、我々天狗が治める山 貴様たちは去れ!!」

なんかデジャブ

「おい、俺一応関係者だぞ…………… そうだ!!文、射命丸文を呼んでくれ」
「文様だとお?貴様のようなものが知り合いの筈がない!!去る気がないなら…………… 覚悟!!」

この前もやったから…………… はあ、仕方ない

「光、ゆかりん、行くぞ」

「頑張ってください」

「あ?」

光は、刀になり 紫は、スキマで逃走した

裏切りやがった!! あいつら!!

「覚悟!!」

「クソ野郎!!」

怒りを白狼天狗にぶつけた

「ガッア!!」

勢い良く白狼天狗は、宙を舞う

「なっ!!」 「こいつただ者じゃない!」

これで引いてくれると嬉しいんだが……………

「……………助けに来たぞ!!」 「……………」

いや、何人いるんだよ!! あ、匹か、まあいいけど

「パラメータ基礎能力アップ (攻) (守) (速) Level 2!!」

そそののそいと倒していく

いや、弱すぎだろこいつ等

キーン

ん?」

「あなたの好きには、させません!!」

他の白狼天狗より強そうだな…………… 実際、今、刀受け止められたし

「警備部隊隊長、犬走権参る!!」

隊長か、だから他より強いんか……………

「よっ」と

後ろに回り込み手刀、そのまま隊長様は、落下

強いて言っても所詮白狼天狗か……………

「なんですか？これは!？」

白狼天狗たちがなぎ倒されている

「一体誰が……………」

「あれ？文？」

「えっ？って拓也さん!？」

なんでこんな所かというと、まさか……………

「拓也さん？白狼天狗たちは……………」

「俺がぶっ飛ばした」

「ですよええー」

「何してくれてるんですか!？」

「大丈夫!!殺してないから、気絶してるだけだから」

「そういう問題じゃないです!!」

まあ、拓也さんで良かった気もする……あいつ等じゃなくて……………

「天魔様のところに行ってください、私も後から行きますから」

「おう」

拓也さんは、飛びさっていった

さて、この子達どうしましょう……………

第五十二話 あれ？身長縮んだ？

「天魔ー」

「誰だ、いま考え事を…………… おお!!誰かと思えば天童か」

「おっ久ー」

「久しぶりだな」

「いやー久しぶりだな…………… ん？」

「天魔、身長縮んだ？」

「グツホオ!!」

「ほんの3cm位だけど……………」

「嘘だよね!?!嘘だと言って!!」

「うん、嘘」

「そ、そうだよねー身長が縮むわけ無いじゃん」ハハハ

「ホントは5cm位」

「うあわああああん!!」

天魔をいじるのは、楽しいな

「天魔様をいじめないでください」

「文」

射命丸か………… やっぱ上司だしな庇うのか

「ちよつと、小さいだけですから!!後正確には、5cm4mmですよ縮んだのは!!」

「文!」

結局、縮んでるじゃん…………

あ、あくあ そうとう堪えたか………… 完全に撃沈してやがる

「天魔く起きろ…………… 息をしてない!!」

「本当ですか!?!」

「ああ、残念ながら…………」

「そんな、天魔様ちいちゃいだけで、いい人だったのに……………」

「ああ、すつごくちいちゃかったけどな」

「とつても、ちいちゃかったです」

「ちいちゃくないよ!?!と言うか生きてるよ!!」

天魔が言うには、こうだった
昔この山は、鬼の支配下だったらしいんだけど、独立したらしい
で、今になってまた鬼が来るから守って欲しいということ
だ……………

うん、やっぱり面倒なことだ

鬼ってアレだろ？角があつて、虎のパンツ履いているマッチョだろ
？

嫌だなー

まあ、頼みだし頑張るか……………

頼みは、受けたのはいいけどどんな相手なんだろう？

「どんな人でしょうね」

「師匠なら大丈夫でしょう」

「そうだよな…………… ってテメエ等さつきは、よくも逃げやがった
な!!」

こいつ等ナチュナルに戻ってきやがった

光と紫と話していると

「きゃ!!」「うわあ!!」

誰かとぶつかり倒れる

ムニユ

「むにゆ？」

「ななななにするんですか!!」

上から女の声が聞こえる、じゃあこれは……………

「早く離れて下さい!!」

「グツホオ」

殴り飛ばされる……………痛い……………

「スマン!!……………って警備部隊隊長さんじゃん」

「私には、犬走権という名前がある!!と言うか貴様は、さっきの……………成敗してくれる!!」

えく面倒くさ、天魔!!部下に情報伝えとけ

「はーい、ストップ」

「ひゃあ!？」

犬走権が体をビツクンとさせる

この声は……………

「どうもー、清く正しい射命丸文でーす」

知ってる……………

どうやら、文が尻尾を掴んだみたいだ

「文さん!?!いつも尻尾を掴むの止めてくださいって言ってるじゃないですか!?!」

犬走権は、ギャーギャーと喚いてる

「ゴメンゴメン、気をつけますから」

それより、その人に喧嘩は、売らない方がいいですよ

私だけでなく、天魔様もかなわなかったんですから」

「な!?!……………分かりました」

犬走権は、コツチを恨めしそうに睨み去っていった……………

第五十三話 鬼は嘘をつかない

「そう言えば鬼っていつ来るの?」

「今日だ」

「なにい!?!」

いや、いきなり過ぎんだよ

今日って、頼み受けたの昨日だよ!?

俺らは、山の麓で鬼を待っていた

「来たぞー!!」

上のほうで飛んでいた天狗が叫ぶ

前を見ると3つの影が見えた

あれ? 3人? てつきり数万人で押よしてくるものかと思っただけ
ど

真ん中の鬼が叫ぶ

「天魔!! どうする? 明け渡すか? それとも戦うか?」

「戦うさ、ただこっちは助っ人がいるからな」

鬼がコツチを興味深そうに見てくる

嫌だあ、そんなに見つめないでえー

「まあ、いいだろ…… さあ、早速始めようかルールは、そつちで決めてくれ」

え？こつちで決めていいの？

「じゃあ、1V51で 何でもあり降参か気絶で負け、でいいか？」

あれ？なんか変なこと言ったかな？

みんなキョトンとしてる

「ハハッハハッハハッハハッハハッ!!いいねえわかり易くて実によ、お前名前は？」

「天童拓也だ、覚えとけ」

「最初は、私が相手になるよ」

大きな2本の角を持つ鬼が前に出てきた

ちっさいな…… 天魔とおんなじくらいかな？

「鬼の四天王」「技」の伊吹萃香だよろしく」

「よろしく……じゃあ」

「始めるか!!」

瞬間、衝突した

金属を手には纏わせ距離を詰める

「いつきに、行くぜ基礎能力アップ（攻）（守）（速）Level 4!!」

互いの拳が激突する

いってえー!!

固ったあ!! やべえ強すぎ

拳じや勝てないな……………

金属のグローブをしまい、月明光を取り出す

チェンジ
ライトニング
「変更（光速）!!」

伊吹萃香の後ろに回り込む

「速い!!」

「もらったあ!!」

月明光を縦に振り下ろす……………が、伊吹萃香は、消えた

「……………は?」

あれ?今消えた?何、瞬間移動?

「危なかったな」

「何だよその能力」

「そうだな、私との勝負に勝ったら教えてやるよ」

「本当だな?」

「ああ、鬼は嘘をつかない

嘘が大嫌いだからな」

「よーしっ、いくぞ!!」

月明光で斬りかかるが、やはりまた消える

「くっそ!!どこだ!」

「こっちだよ」

「そっちか……………え?」

向いた方に伊吹萃香はいた、いたのはいいのだが、その大きさが問題だ

先程までの、数百倍ぐらいの巨人になっていたのである

デカすぎたろ

「潰れな」

巨大な拳が近づいてくる

「鈴符「鋼鉄の壁」」
メタルシールド

鉄の壁を作るが、ベコと音を立ててあっけなく潰れる

「くっ」

壁後ろから転がり、避難する

なんなんだよ、消えたりデカくなったり!!

くっそ、目には目を、歯には歯を、鬼には鬼だ!!

「能力模倣模倣対象「重」!! オラッ!!」

「なっ!?!」

重力を操り押しつぶそうとする

「ぐぬぬぬぬぬ!!」

100Gかけてんのに何で倒れないんだよ!!! どんな力だ

「今のうちに 重力「重力拳」」

「チィ」

また消えようとする

「させるか!! 鈴符「金属箱」!!」

金属で閉じ込める

「潰れる!!」

金属の箱は、少しづつ小さくなる

その瞬間、巨大化して萃香は、箱から脱出した

これで、あれが瞬間移動でわななことが分かった

萃香は、小さくなり接近してくる

攻撃力は、質量と速度!!

「うおおおおお」

月明光に、重力の負荷をかけて振るう

空間が歪み、萃香は吹き飛ばされた

「うわあ!!」

その瞬間を逃さず接近し、月明光を首元に当てる

「…… 参った、降参だよ」

歓声が上がった

こうして、1人目の鬼を倒した

あと2人

第五十四話 破壊の力

「いやー、強いねえ また手合わせ願いたいね」

俺は、正直結構です

「約束通り能力を教えるよ」

あ、忘れてたわ

「密と疎を操る程度の能力」だよ、まあ聞いたところでなんにもない
だろ？

次も頑張りなよ

「よし、次は、アタシだ鬼の四天王「力」星熊勇儀だ

よろしく」

声のする方を見ると、さっきの萃香とは違い一本角の鬼が目の前に
立っていた

「まあ、死なないように頑張りな」

死なないようにってなに!?!どんなけ強い!?!

「よーし、やるぞ!!」

襟引っ張らないで!!大丈夫だから逃げないから引っ張らないで

「いくぞー」

2回戦目なのに、疲れがヤバイ

萃香みたいな分かりにくい能力だとやだなー

お互いに構える

先に動いたのは勇儀の方だった

ドツゴツと大きな音を立てて飛び出してくる

踏み込みの力で地面にクレーターが出来る、そして一瞬にして目の
前まで来た

「なっ!?!」

とつさに、腕をクロスして攻撃を防ぐが

「ヴアアッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ!!」

メシメシメシと腕が音を立て吹き飛ばされる

「ガア、ア”ア」

「どうした?もうダウンか」

なんなんだあの力

「もう一発行くよ」

「くっそ、アビリティコピー能力模倣模倣対象「円」!!

遮断「ディフェンス・アーマー防御の装甲」!!」

ギイン

「!!」

何ちゆう、馬鹿力だ!!

「急に硬くなったね、いいねえガンガン行くよ」

「くっそ、断符「遮弾」!!」

「ふん!!」

「なっ!!」

見えない弾幕を放つが全て弾かれてしまう

勇儀となるべく距離を取る

勇儀は、その場で構えだし、そしてつぶやいた

「四天王奥義「三步必殺」」

ヤバイ、あれはヤバイと本能がそう伝える

メシと音を立てて地面にクレーターを作る

「一步」

ヤバイ、逃げなければ

「二歩」

数十メートルあった距離が一気に縮まってくる

「三步!!」

あつという間に目の前まで来ていた、そして拳が腹に突き刺さり、腹に大穴が開く

口の中に鉄の味が広がり、それを吐き出す

地面に、真っ赤な血が広がる

「がつ!!あああああ!!」

くっそ、力が入らない……………

「天童!!」

「拓也さん!!」

天魔や文の声が聞こえる

くっそ、情けねえぞ俺!!

根性だせ!!

「もう終わりか?」

「ま、まだだ!!まだ終わってない!!」

腹を押えながら、ゆっくりと立ち上がる

「へえ、やるじゃん」

これは使いたくなかったか……

「パラメータ基礎能力アップデストロイ(破壊)」

体全体から、赤黒いオーラが滲み出る

「この一撃で決める!!」

「来な!!」

「うおおおおお!!」

拳がぶつかり合う

メシメシメシと、腕か音を立てる

「グツヌヌヌ!!」

痛みを必死に堪えて突き出す

「はあああああ!!」

勇儀の突きを押し返し吹き飛ばす

勇儀は、バウンドしながら吹き飛ばされる

そして、倒れたまま言った

「ハハハハハハハ、ダメだ体が動かない

あんたの勝ちだよ」

二人目を倒した

俺は、残りの一人を見たが、目の前がブレ意識が飛んだ

第五十五話 暴走再び、そして決着

「う、うくん」

「あ!!目が覚めた!!」

「大丈夫ですか?」

俺は、確か勇儀に勝ってその後…………… はっ!!

「俺、どのぐらい気失っていた?」

「ほんの数分ですよ」

「そっか…………… よかった…………… よし」

立とうとするが体が思うように動かず、痛みが走る

見ると、腹の穴は気を失っている時に無意識に直したのか塞がっていたが、体の至る所が骨折している

肋骨が2、3本 左腕 右足もか……………

フラフラと立ち上がり、最後の鬼に向かおうとする

「もう、止めてください!!貴方は充分戦いました!!」

文が目の前に立つ…………… でも

「いやだ」

「なぜ!?!」

「俺が引いたら、お前らが鬼に怯えて暮らす事になるんだろ?それは俺的にも面白くない、だからこれは俺のわがままだ」

「でも……………」

なにか言いたげな文の横を通り過ぎる

「…………… でも言っただけ、引いてくれるだろう」

「…………… 待たせたな」

「本当だよ、こっちはお前と戦えるのを楽しみにしてたんだ、そう簡単に終わってくれなよっ…」

「残念ながら終わらせるつもりだ、俺の体が持ちそうにないからな」

「鬼神焰だ、楽しましてくれよ」

「チィ!!」

「どうした? そんなもんか?」

「うるせえ!!」

月光を振り下ろすがかわされる

「オラっ!!」

「グッ、クツソオ!!」

拳を刀で受け止める

足が折れているせいで踏ん張りが効かない

鬼神が、突っ込んでくる

それに向かって、突きを放つが横にそらされ手首を掴まれる、その

瞬間

「ぐあががががが!!」

脳が体が全身が揺さぶられる感覚が襲う

「ガハア」

血を吐き出す

意識が飛びそうになるのを必死にこらえる

「そんなもんか? じゃあ、次はあいつらに付き合ってもらおうかな」

ギロっと、天魔や文達の方を見る

あいつらじゃ絶対に勝てない

ふと、脳裏に血まみれになった天狗たちが浮かぶ

嫌だ

もう誰かを失うのは

——力が欲しいか?——

聞いたことある声が聞こえ、意識が飛んだ

「オイオイオイ、マジかよ」

天童拓也の方を見ながらそう言う

さつきまで瀕死だった筈だが、今日の前に立っている

さつきと違うな、この力………妖力だ

だが、コイツはさつきまで神力を使っていたはず、妖力が使える筈がない

「ガウ!!」

「!!」

黒い刃がとんでくるのを横に回避するが天童拓也?の拳を喰らってしまう

「チィ!!」

振動を操り、ダメージを逃がし最小限にとどめる

『振動を操る程度の能力』それが私の能力だ

「振動「内部破損」!!」

相手の内部の水分を振動させ内部から破壊する

「グガギイ!？」

よし、効いている

「ガッア!!」

「なにいい!!」

黒に腕が地面から伸び体中を縛りつけて来た

「くっそ、離れろ!!」

「ガッア!!」

「しまった!!」

黒に腕に気を取られて拳をモロに喰らう

「ガッ、ハアハア」

なんなんだあの力は……………

「何なんですかあれは……………」

目の前の光景に言葉を失っていた

拓也さんがなぜ妖力を？

「……文」

天魔様を気付いたようでこちらを向いてくる

ほかの天狗たちは、気づいていないようで、いいぞーなどと歓声をあげている

「おい、そこの妖怪何か知っているか?」

拓也さんと一緒にいたスキマの妖怪に天魔様が質問する

「いいえ、私もあんな師匠見たことありません」
「そうか……………」

話していると突如、横に何かが飛んできた
「いったいなんなん… 焔!？」

「いててて、一体なんなんだあいつは」

飛ばされてきたのは拓也さんと戦っていた鬼神焔だった
前を見ると、黒い刃が目の前までに迫っていた

「みなさん避けてください!!」

「!!」

各々で黒い刃を避ける

「アイツ、敵も味方もお構いなしかよ!!」

「しつかりして下さい、拓也さん!!」

「…」

声かけにも全く反応しない

「皆さん!!大丈夫ですか?」

光さんも刀から、人型になり近付いて来る

「はい、しかし拓也さんが……………」

「あんなマスター私も見るのは、初めてです」

付き合いの長い光さんでも知らない力…………… 一体あれは何なのか

「おい!!文!!」

「え?きやあ!？」

考え事をしているうちに、黒い刃近くまで来ており弾き飛ばされる
「ぐう………… は!!しまった!!」

黒い刃が私をめがけて飛んでくる

「!!文(さん)!!」

黒い刃までの距離が3cm、2cmと近づいてくる

しかし、触れるか触れないかのところで刃は、停止する

「ガア!?グウ!？」

急に苦しむようにもがき始めた

「ガア!………… テメエは………… グウ!………… 引っ込んでろ!!」

その瞬間全体に広がっていた黒い刃が跡形もなく消えた

「ハアハアハアハア、悪かったなみんな」

いつもの拓也さんが戻ってきた

「悪い、またしたな焰…………… 決着を付けようぜ」

「それは、ありがたいね、私も、もうぼろぼろだ」

二人は構えた、能力を使わないただの殴り合いだった

数十分もしないうちに二人同時に地面に倒れた

戦いは、幕を閉じた

第五十六話 妖刀村正

鬼との戦いから一週間後……………

怪我也だいたい治っていた

「はあ？俺が妖力を使っていたあ!？」

「はいマスター、間違いないと思います」

「どういう事？百歩いや、千歩譲って霊力ならまだしも妖力!?妖力つてアレだよな妖怪の力の源だよな

それが俺の中に？

しかし、あの感覚どこかで……………

「う〜ん」

「いや、意識を失う瞬間なんか聞いたことあるような声が聞こえたんだけど……………」

「どのような？」

『力が欲しいか?』って言うものだった、それ以外はなんとも……………」

一体あれは、何なのか……………

「おお、天童 起きたか!!」

「あ、天魔……………げっ!!」

「そんな顔しなくてもいいだろ?」

俺は顔をしかめた

天魔と一緒に焰もついて来たからである

「そうだ、天童 お前神になる前、種族はなんだった?」

「そりゃあ、人間だろ?」

「本当か?」

「嘘をつくも何も、俺は俺を人間と思って過ごしてきたけど……………なん
で?」

「いや、貴様が半人半妖の可能性を考えてな」

成程、半人半妖か……………あれ?そう言えばあの神に

『種族とか決められるけどどうする?』

『テキトウにそっちで決めといて』

「……………あ」

「ん？どうした？」

「天魔そうかもしれん……………」

「マジ？」

「マジ」

「「「……………」」」」

うおおおおお!!

あの駄神なんていう種族設定してくれたんだ!!

なんか気まずい雰囲気になっちゃやし

天魔達は、なんか方法考えてくるて出て行っちゃったし

どうしよう、どうしよう

ドン!!

「!!」

突如、ドアがひらかれる

「一体なんだ？天魔」

「… ったぞ」

「え？」

「見つかったぞ、方法」

只今、天魔に連れられて妖怪の山の頂上から少しくだった場所にある、倉に来ていた

「こんな所あつたんだ……………」

「天魔、何だここは？」

「ここには、ある物が置いてあるんだよ」

「ある物？」

「妖刀村正」

「村正!？」

「だいたいの人が聞いたことがある刀の名だ」

「でも、なんで村正を？」

「村正には妖力を引き出す力がある、それでそれを抑えることができれば……………」

「使いこなす事も出来るかもって事か」

確かに、挑戦しがいがある
だが

「抑えている間絶対暴走するぞ？」

「我々で食い止めておくから大丈夫だ、それに」

「「わたし達もいるしな」」

焰、勇儀、萃香が前に出る

「ありがとう…………… こんなのあるならすぐ言ってくれば良かったのに」

「忘れてた」

「おい!!かなり有名な代物だぞ、忘れるなよ!!
「じゃあ、皆頼んだぞ」

「「「「「おう（はい）！！」」」」」

俺は、村正を抜刀した

その瞬間、意識は暗闇の中へ……………

第五十七話 心の中

「ここは、どこだ？」

真つ暗な空間に俺は、いた

多分俺の精神の中の場所なんだろうけど

本当、何も無いな………あれ？

向こうの方に誰かいる？

確かに人らしき影が見える

近付いてみると女の子だった

真つ黒な腰の辺りまである髪、頭からはえる二つの耳、腰から生え

ている尻尾、血のように真つ赤な瞳の少女だった

「大丈夫？」

「……」

声をかけるが反応がない

「おーい、大丈夫ツツ!？」

もう一度声をかけ、少女の肩に手をのせた瞬間、無数の黒い刃が襲ってくる

すぐさま、後ろに飛び退き回避をする

「これは、光たちが言ってた黒い刃……お前が、妖怪か」

少女は、何も言わずにゆらりと立ち上がりこちらを向き、そしてまた黒い刃が襲いかかってくる

月明光を抜こうと腰に手を当てて、刀がないことに気づく

「あ、やべ!!」

刃は、待ってくれずそのまま飛んでくる

「くっせ!!」

転がるようにして、回避をする

ここは、俺の中だ考えろ、想像しろ

すると、月明光が生成される

「よし」

刀を抜き、飛びかかる

「悪いが、倒させてもらおうぜ!!」

刀を振り下ろすが、少女は手に黒い刃を纏わせ禍々しい腕へと変え防ぐ

「なっ!!」

少女は、その華奢な体つきからは想像もできないような力で押し返してくる

「くっそ!!なんちゆう馬鹿力だ」

少女は、ゆらりと動いたと思った瞬間、とてつもないスピードで、近づいてくる

「!!」

ギリギリのところ、刀を盾にし拳を防ぐ

数十メートル吹き飛ばされる

息付く間もなく黒い刃が襲ってくる

「くっそ!!」

数発受けきれず、体に掠る

——寂しいよ——

「!!」

どこからか声が聞こえた気がした

どこから?

黒い刃を受け流しながら考える

また、黒い刃が体に掠る

——怖いよ——

——一人は嫌だよ——

「!!」

また聞こえたあの声、黒い刃が体に掠るたびに、助けを求める声が聞こえる

これは……………あの子の声？
攻撃を受けるたび受けるたび、負の感情が体の中に流れ込んでくる

——
辛い——

——
悲しい——

——
どうして？——

——
騙したの？——

この子は、本当に悪い子なんだろうか？

そんな疑問が頭に浮かぶ

誰かと一緒にいたかった

誰かに裏切られた

そんな悲しみから逃げるために、暴れているのか

彼女の過去を知らない俺には何もわからない

ふと、少女のほうを見ると、黒い刃が腕に纏い突っ込んできた

そして、その腕は俺を貫いた

その瞬間、頭の中に映像が流れ込んできた……………

第五十八話 昔の話

むかろし、むかろしある所に一人の女の子がいました

女の子は妖怪でした

女の子はとても寂しがりでした、なのでよく人里へ降りていつていました

しかし、女の子に近寄ってくれる人は誰もいませんでした

当然です、女の子は妖怪、人里の人々が恐れるのも無理はありませんでした

人里では、女の子に近づかないように掟が定められました

ある時、一人の男の子が掟を破って女の子と仲良くしてくれました
女の子は、掟があることなんて知りませんでした

寂しかった女の子は、とても嬉しかった

初めてできた、友達だから

男の子は色んなことを話してくれた

他の友達のことや、美味しい食べ物のこと、寺小屋で習った勉強や歌のこと、女の子はとても嬉しかった、そして女の子はその男の子に恋をした

ある日のこと、いつもどおり約束の場所で女の子は、男の子を待っていた

しかし、いつまで経っても男の子は現れなかった

女の子は、男の子を心配して人里へこっそり降りた

茂みの中から人里の様子を伺うと、人が集まっていた

その中心には、男の子がいた

女の子は、男の子の姿を見て安心した

しかし、それは一瞬で絶望へと変わった

男の子が殺されたからである

男の子は掟を破った事で殺されてしまったのです

女の子は、怒りました

その人里の人々を次から次へと殺していききました
愛す人を殺されて怒ってくる人もいました

怒りたいのは、女の子の方でした

愛す人を殺されて悲しむ人もいました

悲しいのは、女の子も一緒でした

その人里には、生きている人は居なくなりました

里の真ん中で、女の子は男の子を抱きしめて泣きました

そのあと女の子は、男の子のお墓お作りしました

二人でよく遊んだ、小高い丘に作りました

何年か経ちました

女の子は、人ではなく妖怪に寄り添おうと考えました

しかし、ほかの妖怪は会った瞬間女の子を喰らおうと襲ってくる物ばかりでした

ある時、妖怪に襲われ怪我をおって動けないでいた時がありました
その時、人間の女の子が助けとくれました

妖怪の女の子は、嬉しかったと同時に怖かったまた自分のせいで誰かが死んでしまうのは

人間の女の子は、妖怪よ女の子に寄り添ってくれた

妖怪の女の子は、人間の女の子を突き放そうとした

妖怪の女の子は、突き放す理由を伝えた、すると人間の女の子は、
ずっとそばにいとると言ってくれた

妖怪の女の子は、嬉しかった

ただ、それだけだった

ある日のこと、人間の女の子に連れられて妖怪の女の子は、景色が
いいと言う崖に連れられていた

妖怪の女の子が崖の下を見ていると、誰かに突き落とされた

人間の女の子だった

その後ろには、大人の人間がたくさんいた

妖怪の女の子は、ハメられたのだった

妖怪の女の子には、人間の女の子の顔がひどく恐ろしく歪んだ笑顔
に見えた

どうして？妖怪の女の子はただそう思い続けた
そして妖怪の女の子は死んでしまった

第五十九話

御影闇

今のは……………

突如、頭の中に流れてきた、映像に俺は戸惑っていた
今の女の子はこの子？

目の前の妖怪の女の子に目を向ける

その顔は、とても寂しそうで、とても苦しそうだった

この子は、本当に悪い子なんだろうか？

助けを求めているのでわないだろうか？

俺は、どうするべきか？

俺は、どうしたいのか？

そして俺は、刀を捨てその女の子を抱きしめた

「グオ!？」

その女の子も驚いたような声を出す

「大丈夫、大丈夫だから

寂しかったんだな、苦しかったんだな、怖かったんだな

大丈夫だから、俺がそばにいるから、俺はいなくなったりしないから、そんな悲しそうな顔するなよ……」

語りかけるように、一言一言噛み締めるように言った

「ガア……………」

女の子が泣いていた

「タスケテ?」

「ああ、俺がお前を救ってやる、お前を絶望のドン底から引き上げてやるよ」

「アリガトウ」

瞬間、黒い空間に光が差し白い空間へと姿を変えた

「ねえ、起きてー」

ん？ 誰か呼んでる？

「あ!! やつと、起きた」

あれ？この子はさっきの子？

でも、小さくなってる？

「君は、さっきの子だよね？」

「そうだよ、私は御影^{みかげやみ}闇だよ!! 拓也おにいーちゃん♪」

「おにいちゃん……………」

さっきからは想像ができないような笑顔だった

縮んだ身長、ブカブカの黒い着物をきた少女、いや、幼女？

「なあ、御影「闇でいいよ」………… 御「闇」… m「闇!!」………… 闇」

「なあに？」

この子意外と傲慢

「闇は俺のどんな存在なんだ？ やつぱり半身みたいな感じか？」

「違うよ、私はおにいちゃんの一部分だよ」

「半身とは何が違うんだ？」

「私は、おにいちゃんて、くくりの中の一部なだけで、そんなに存在は、

大きくないの

だから、おにいちゃんは普通に昔は人間だったんだよ」

「そうなんだ？」

あんまりわからん

「むーわかつてないな………… まあ、いいか

時間がないから必要なことだけ教えておくね

私の能力は『影を操る程度の能力』だよ」

「影？」

「そう、影の形状を変化させたり色々できるよ」

「へく……ん？闇、体が透けてきてるぞ!？」

「そろそろ時間だね、意識が戻ろうとしてるんだよ」

「闇が消えるわけじゃないんだな……よかった」

「私は、いつでもおにいちちゃんの中にいるからね」

また会おうね、バイバイおにいちちゃん」

目の前が真っ暗になった

あれ？目が開ける

「マスター!!」

「光？」

「やつと戻ってきたか」

「天魔!!」

そうか俺戻ってきたんだな……………

「」「」「おかえり」「」「」

「ただいま」

第六十話 ゲーム

「暇だなー」

「そうですねー」

「暇すぎて、目玉焼きになりそう」

「どういう原理ですか？それ」

にしてもほんと暇だな……… よし、みんな誘って遊ぶか!!

「」「ゲーム？」「」

とりま、焰、勇儀、萃香、文、天魔、権を誘って来たぜ!!

「喧嘩か？」

「喧嘩じゃないです……」

「なんだ……なら、私らはパスで」

鬼3人組は、帰ろうとする

「しよがないな…… 神の酒もあつたのに……」

「よっしゃー!! 殺ってやろうじゃないか」

「酒!! 酒!! 酒!! 酒!! 酒!!」

よし、これで鬼たちはOKだな

「ふん、ものに釣られるなんて子供だな」

私は、大人だから別にいいけど」

「負けるのが怖いんだろ？天魔」

「そ、そ、そ、そ、そんなことあるわけ無いだろ!？」

「あ、お菓子もあるぞ」

「もう何も怖くない」

「天魔様!？」

それ、フラグです!？」

よし、これで天狗組たちもOKだな

く王様ゲームく

「最初は、王様ゲームだ!!」

王様ゲームとは（以下略）だ」

「なるほど（以下略）か」

「じゃあ、始めるか…… みんな選んだ？せーの」

「「「「王様だくれだ」「「「「」

俺は、一番か

「お、私か」

まずは、焰か…… どんな、命令するんだ

「よし、5番 私と喧嘩しろ」

おい、喧嘩ってなんだ!？」

誰だ、相手は

「……」ガタガタガタガタガタ

あ、権だ

めつちや、震えてる

「お、お前か？いくぞ」
「いくやくだく!!」

くババ抜きく

「こつちか……」

「……」プルプル（泣き目）

「…… こつちか」

「……」パー（笑顔）

分かり易い……

「…… 天魔」

「な、な、な、な、な、な、な、な、なんだあ!？」

「もうちよつと、落ち着こ

顔でバレバレ」

「え!?!本当に」

「おう、頑張れ

じゃあ、こつち」

「いやああああ!!」

く人生ゲームく

「いち、にい、さん、し、ご、ろく

えつと、落とし穴にハマってる一回休み……」

「食中毒に当たって、一回休み」

「一回休み」

「一回休み」

「一回休み」

「一回休み」「一回休み」「一回休み」

一回休み多いな

「俺か、えっと…… トラックに引かれて一回転生…… ん？」
一回転生？一回休みじゃなくて？

その後

「仲間を失い、一回覚醒？」

「爆発に巻き込まれて、一回死亡？」

死んだよ!?と言うか……… これ？なんか、俺の人生模してない？

「拓也く酒はもうないのか？」

「酒!!酒!!酒!!酒!!酒!!酒!!」

「天魔様!!権!!……… 息をしていない!？」

「マスター!?!どうしましょう?」

「ほっとけ」

こうして、日が暮れるまで騒ぎました

あれ?ゆかりんいなかったな………

第六章 西行妖編
第六十一話 紫の頼み

「暇だなー」

「暇ですねー」

「空間裂けて美少女が現れないかなー」

「呼ばれて飛び出て

美少女、紫ちゃんですーす!!」

「……………」

「あれ？反応薄くない？」

「光、今日の晩飯何？」

「鳥の唐揚げにでもしましょうか」

「ちよ、無視しないで!!無かった事にしないでえ!!」

「おお、ゆかりん久しぶり」

「むゝ」

「拗ねるなよ、後そうやってても可愛くないぞ」

「失礼ね!？」

久しぶりにゆかりんをいじるわゝ楽しいな

「で、どうしたんだ？」

急に帰ってきて」

「師匠に、私の親友と会って欲しくて」

「何っ？紫に親友だと!？」

「何か失礼な反応ですね」

だって、ゆかりんだぞ。友達もろくにできなかったゆかりんだぞ

「まあ、別にいいけど……なん「じゃあ、出発」

理由を聞こうとした瞬間、足もとにスキマが展開されて、落下する

「うお!!」

放り出されたのは、長い階段のまえた

ゆかりんの姿はない

この階段上がってこいつてことか？

階段の周りには見事な桜が植えられている

綺麗だな

って、さっさと行くか

「うおおおおおお!!」

しばらく階段を全力で上がっていくと人影が見えた

ゆかりんかな？

「おおい、ゆかりん……つつ!!」

声をかけた瞬間、頬を何かが掠めた

「ほお、今のを躲すとは……」

向こうに見えた人影の主は、一瞬にしてこちらまで来ていた

人影の正体はゆかりんではなく、緑色の着物をまとった二本の刀を

持つ老人だった

「これより先、通すことが出来ません

お引き取り下さい」

「いやいや、こっちは用があるんだ

通してもらうぜ」

「ならば、力づくで止めるまで!!」

老人が長さの違う二つの日本刀を抜き斬りかかってくる

それを月明光で受け止めるが、老人の力が予想以上に強く吹き飛ば

され桜の幹に背中をぶつける

それに追い討ちをかけるように、一気に距離を縮めてき連撃を繰り出してくる

刀一本では対応しきれず少しずつ攻撃が掠る

「くっそ、手数が足りないな……なら……」

地面に向かって斬撃を放ち、一旦距離を取る

「増やすまでだ」

自分の影に手をつ突っ込み影の中から村正を引き抜く

焰達で試したあの技使うか

「くっえ!!新技

影光「陰陽斬」!!」

月明光が光り輝き、逆に村正は黒く濁った

光と影、対になる二つを掛け合わせた斬撃が老人を襲う

「うむ」

しかし、老人は体を少しそらすだけで躲す

「なっ!?マジかよ」

「次は、こちらから行きます

人鬼「未来永劫斬」

巨体な斬撃が発生し、地面をえぐりながら飛んでくる

アレは、食らったらマズイな……

「パラメータ基礎能力アップスピード(速) Level 15」

速度を上げ躲し、老人の後ろを取る

もらった!!と思いい刀を振り下ろすが

「甘っ!!」

器用に、刀の側面で流されそのままカウンターの蹴りをもらう

やっべえ、この爺さん半端なく強いな

「だけど、負けねえけどな」

村正を地面に刺しそのまま影を操り老人が中心になるように囲む

「影符「影囲い」」

影が刃のようになり、前後左右から囲むように老人を襲う

老人は、これも読んでいたかのように上へ飛び回避するが

「待ってました!!」

「なっ!?!」

俺は、ジャンプした先に先回りした

空中ならよけられまい

「光速いっしょこうだん」「矢光断」

居合い切りのように刀を鞘から引き抜き、出せる最大速度で斬りつける

「ぬうう!!」

今度は、さっきのように受け流すことができず老人は、吹き飛ばされる

そして俺は、老人の首に刀を当てた

その時

「そこまです」

と、聞いたことがある声が聞こえた

見ると、そこには紫と黒髪の女性がいた

第六十二話 幽々子と西行妖

「そこまでよ」

「おい、ゆかりん

よくノコノコ俺の前へ出てこれたなあ？」

「えっ!? その、ごめんなさい」

まあ、そこまで怒ってないけど……………

ん? 隣にいるのは誰だ?

「紹介するわ、私の親友の西行寺幽々子よ」

「よろしく」

なんかふわふわした感じの人だな

「妖忌もお疲れく下がっていいわよ」

「はっ、幽々子様」

この爺さん妖忌って名前なんだ

「魂魄妖忌と申します」

「おう!! 俺は、天童拓也だ

にしてもホントに強いなアンタ」

「お褒めにいただき光栄です」

「妖忌って妖怪なのか?」

「妖忌はねえ半人半霊なのよ」

えっ!? 半人半霊なの?

てつきり、妖怪が混ざってると思ったんだけど

「なあ、妖忌って用心棒か何か?」

「いいえ妖忌は、うちの庭師なのよ」

庭師い!?

庭師ってあんなに強いものだっけ?

完全に剣の腕前は俺の数倍ぐらいだぞ!?

「立ち話もなんですし私の家へいらして頂戴」

「じゃあ、お邪魔します」

ほえ〜デカイ屋敷だな〜

「お茶をお持ちしました」

「お、ありがとうございます」

妖忌がお茶を持ってきてくれた

うむ、旨いな

「茶菓子もどうぞ」

用意がいいな

「ん?」

白玉楼の外の方に、とてつもなくデカイ桜の木がある

何年ものだ? 斬ってみれば年輪でわかるかな?

「斬っちゃダメですよ」

心を読まないでください

「凄い木でしよ〜私が生まれた時からあるの〜」

「へー……………あれ?」

話を聞きながら茶菓子を食べようとしたが、いつの間にか消えていた

あれ? 結構あつたよな?

「ゆかりん、茶菓子は?」

「幽々子が全部食べちゃたわ」

うそお!? 結構な量あつたよ!? それをペロツと

ゆかりんは、当たり前でしよみたいなふうに言わないで

「妖忌〜茶菓子追加してえ〜」

「はい、只今」

しかもまだ食べるのかよ!?

幽々子は、茶菓子を取りに奥へ行ってしまった

「で紫、俺を呼んだ理由は？」

「さすが師匠、理解が進んでいて助かるわ

幽々子のことで頼みたいの

幽々子は、能力を持っていて能力名は、『死を誘う程度の能力』だったの」

「だった？」

「ええ、最近変化して『死を操る程度の能力』になったの」

死をねえ、また物騒な能力だな

「急に變化した理由はあるのか？」

「師匠も、見たでしょあの外にある大きな桜を」

「ああ、でもあの桜がどうしたんだ？」

「あの桜は西行妖と言う名前で妖怪の一緒よ」

「え？あれ妖怪なの？」

全然気づかんかった……………

「幽々子は、力を恐れて一度死のうとしたわ

まあ、私が止めたけど」

「マジかよ」

「ただ気がかりなのは、西行妖が幽々子を取り込んでパワーアップし
おうとしているのよ」

「それを守るのを手伝って欲しいってわけか……………よし、いい
ぞ」

「本当ですか」

「ああ、可愛い弟子のためだしな」

「か、可愛いって…………」ボソツ

「ん？なんか言ったか？」

「いいえ、なんでも」

「そっか？なんか、顔赤いぞ

無理だけは、するなよ」

「は、はい」

「お待ちせよ」

話を終えたところでちょうど幽々子が帰ってきた

さうして、これから忙しくなるぞ

第六十三話 恐れていた事態

「妖忌」

「はい天童殿、なんででしょうか？」

「剣術を教えてください!!」

「はい？」

妖忌に剣術を習うことにした

元々、剣の事なんて分かってなかったし、ただでさえ難しいのに二刀流になったらさらに難しくなった

今のうちに習って置こうと思って、この際苦手をどんどん潰していこうと思う

少年稽古中……

「ふう〜疲れた〜」

ありがとう妖忌」

「いえいえ」

妖忌との剣の稽古を終えた

やっぱり強いな、能力ないと一撃も当てられないな

まあ、剣じゃないから死ぬことはないけど………なんか悔しいな……

「またお願いするよ」

「いつでもどうぞ」

「ゆかりん」

「わっ!? 師匠どうしたんですか?」

「結界術を教えて」

「え?」

今まで攻撃ばっかで、封印とか防御とかあんまり考えてこなかったけどこの際だから覚えちゃおう

少年修行中……

「だあく!!」

難しいっ!? ナニコレマジで難しいんだけど!?

ゆかりんなんて平然と何枚も結界出せるの? 俺、一枚キープするのがやっとなんだけど……

結界術ってこんなに難しいものなんだ

なんか頭がパンクしそうだな、剣の稽古の倍ぐらい疲れる

「ほう、なら剣の稽古を倍にしますか」

「妖忌さん、勘弁して下さい」

いつの間にか妖忌が近くまで来ていた、てかみんな心読み過ぎ

「読みやすいというか、顔に出てるわよ」

行ってるそばから……

「みんなくお茶にしましょう」

「はくい」「はっ」

幽々子の一声で、ティータイムになった

「はあああああ」

「ぬう」

あれからかれこれ二週間がたった

「やるようになりましたな」

「妖忌のおかげだよ」

剣の腕は、ちやくちやくと上がっていつて今では妖忌と互角ぐらいの腕になった

しかし

「ぐぬぬぬぬぬぬ」

「上手くならないわね」

結果は、一、二枚しか貼れないし、封印は自分を犠牲にしかねないものしか習得できてない

はつきり言つて才能がないかもしれない……………

残念だ

「大丈夫よく人には向き不向きがあるものゝ修行はやめてお茶にしましょ」

「ありがとゝ幽々子ゝ」

楽しい日々だった

これが続くことに何の疑いもなかった
しかし、それは一瞬で崩れ去った

ある日の朝目が覚めた

枕元にある時計を見ると七時半を指していた

おかしい……………

妖忌が朝食の準備ができたと呼びに来るはず時間をこえている

妖忌が寝坊したか？

ありえないとは言い切れないが、あの妖忌のことだから確率は低い
だろう

俺は、布団から這い出て襖を開け外に出る

冷たい風が流れ込む

白玉楼は、嫌な静けさに包まれていた

何か嫌な予感がする……………

俺は、走って紫の部屋へ行った

「紫」

紫の姿は、そこにはなかった

「妖忌!!」「幽々子!!」

妖忌も、幽々子も姿が見あたらない

まさか……………

俺は、出せるスピードを出して向かった

西行妖の方へ

西行妖の近くまで来ると見知った二人がいた

紫と妖忌だ

二人とも傷を負っているが命に別状は無いようだ

しかし、幽々子の姿が見あたらない

「拓也？」

「紫!?!しつかりしろ幽々子は？」

「西行妖の方へ……………」

「くっそお!!」

恐れていた最悪の事態が起こった

二人を抱え回復をしながら西行妖まで飛んだ

西行妖の根元には幽々子がいた

しかし、その胸元には穴が空いており、そこから血が流れ出ていた

「幽々子おおおおお!!」

西行寺幽々子は、死んだのだ

第六十四話 最凶の桜

「なあ、幽々子起きてくれよ!!」

冗談だよな?なあ、なあ!、なあ!!」

いくら揺さぶっても幽々子は反応しない

西行妖は、嘲笑うかのように揺れている

その枝がゆつくりと幽々子の方へ伸びてくるが俺は、その枝を乱暴に引きちぎった

「デメエに、幽々子を吸収させてたまるかあ!!」

神力を全開放して西行妖に向かう

妖力を纏った枝が俺をめがけて飛んでくるが無視して無理に突き進もうとするが、弾かれてしまう

何度も何度も向かうが結果は、同じだった

回復も後回しで突っ込み続けた

「止めて師匠!!あなたまで死んじゃう」

「止めんなあ!!俺は、アイツをぶっ殺さねえといけねえんだあ!!」

「いい加減にされたまえ!!天童殿!!」

いつも穏やかな、妖忌が声を荒らげた

「ただ闇雲に突っ込んで勝てませんぞ

今は、アレを止めるのが優先です、違いますか」

「くっ…… わりい、頭に血が上ってたわ」

「分かってもらえればいいのです、三人であれを止めましょう」

「おう!!」「はい!!」

「うおおおおおおお!!」

「はああああああ!!」

俺と妖忌で本体を攻撃、紫がサポートで戦う

躲しても躲しても、妖力を纏った枝が追尾してくる

「鬱陶しい!!影光「陰陽斬」!!」

月明光に光、村正に影を纏わせ放ち、枝を斬る

「よっしゃ!!」

しかし、斬った先から新たに枝が生えてきて、攻撃を再開してくる

オイオイ、再生ってありかよ!?

斬っては再生、斬っては再生、これじゃイタチごっこだ

いずれこっちの体力が切れるな

全体に目を通す

紫の方はまだ大丈夫そうだが、妖忌が危なそうだな

「光!!」

「はい!!」

月明光から、光に変化させる

「妖忌のフォローに回ってくれ」

「マスターは、大丈夫なのですか?」

「俺は大丈夫だ、早く行ってやれ」

「はい!!」

よし、これで妖忌方はひとまず安心だな

次は……………

「紫!!」

「何?師匠」

「あいつを倒しきるのは多分無理だ」

「えっ?じゃあ、どうやって」

「お前、あれを封印できるか?」

「封印!？」

「ああ、倒せなくても押さえつけられないかって思ってな」

「出来なくは無いけど、封印するには時間が……………」

「それは、こっちで稼ぐ」

後は、頼んだ!!」

「分かったわ」

紫が準備が終わるまで手出しはさせねえ

「妖忌!!光!!紫が封印術式を完成させるまで踏ん張ってくれ!!」

「了解」

「いくぞみんな!!影符「御影の刃」」

「光符「光明斬」」

「人鬼「未来永劫斬」」

黒い影の刃が、光りの無数の斬撃が、緑の巨大な斬撃が

西行妖を目掛けて放たれた

「みんな!!お待たせ!!」

紫の方も準備が終わったようだ

「八雲式封印術!!」

西行妖の周りに結界が出てその力を押さえ込んでいく

「はあああああ!!」

「「「いっけええええ!!」」」

そして、その場一体が光に包まれた……………

第六十五話

勝利のための犠牲

「やった……のか？」

「あいつの妖力の封印は、成功したはずよ」

西行妖は、ピクリとも動かない

「ふう」

身体中の力が一気に抜ける

とてつもなく強い相手だった

紫、妖忌、光誰でも欠けていたら封印する事が出来なかっただろう
すべてが終わった

誰もがそう思ってた

しかし

「天童殿危ない!!」

「え？」

妖忌に押し飛ばされる

俺が立っていた場所には巨大な枝が通過して行き、妖忌が代わりに
吹き飛ばされた

「なっ!?!妖忌!!」

「ぐっ、平気です」

俺は、その攻撃の主を見る

「くっそ、どうなってやがる封印出来たんじやないのかよ!？」

西行妖が動き出したのである

「紫!!」

「まさか……妖力が大きすぎて封印しきれなかったの？」

封印の許容範囲を超えたってことか……どんなパワーだ
よ……

「紫はもう一回封印の準備、妖忌と光は俺と一緒に本体を攻撃だ」
「はっ」

「くっそ!! さっきより枝の数が多し」

一つ一つに妖力がそこまで回ってないため強度が低いけど数がとにかく多い

しかも、少しでも油断をするときさっきみたいな、大きな枝が飛んでくる

気を全く抜けない

「ぬう!!」

さっきの一撃のせいか妖忌の動きが遅い

妖忌のわきを通って紫の方に枝が伸びてゆく

狙いは、紫か

紫は、封印術式のほうで手がいっぱいだから枝を防げない

「くっそお、無駄に頭いいなこの桜の木は!!」

紫の方に来た枝をすべて切り落とす

「ありがとう」

「おう、それより早く封印術式を、とびつきり強力なやつをな」

この瞬間、西行妖から目を離したのが悪かった

横殴りの攻撃をモロにくらい宙に浮く

「ガアハ!?!」

そして、今までで一番巨大な枝が向かってくる

くっそ、体が動かない

今度こそ、ダメかもしれないな……………

「マスタアアアアアアアアアア!!」

光が目の前に飛び込んできて枝を刀で受け止める

メシメシと音を立てて刀にヒビが入った

そして、刀が砕け散るとともに光は、そのまま弾かれ目の届かないところまで飛ばされた

「ヒカリイイイイイイ!!」

「天童殿!!よそ見してる場合じゃありませんぞ」

西行妖は、こつちのことなんてお構いなしで攻撃を仕掛けてくる

「があ」

「妖忌!!」

遂に、妖忌まで吹き飛ばされてしまった

残るのは俺と紫だけ……………

勝てるのか?コイツに……………

いや違う

「勝てる勝てないかじゃない

俺は、コイツに勝たないといけないんだあ!!」

村正をもう一度握り締め、呼吸を整える

「うおおおおおお!!」

単騎で西行妖に突っ込む

俺を落とそうと枝が飛んでくる

「鈴!!俺に力を貸してくれえ!!」

鈴符「千本針」!!」

腕輪が今まで以上に輝きだし、俺の後ろには千本の長さ五メートルを越える巨体な針が現れ

枝を次々破壊していく

その間に俺は、西行妖の幹にしがみついた

たった一つだけ覚えた封印術

「自中封印」

自中封印、名前通り、自分の中に対象を封印する術である

この封印は対象の力が膨大すぎると中から崩壊し絶命してしまうと言うデメリットがある

「ぐっ、がああああああああ!!」

「師匠!!」

「紫、コイツの力を俺の中に留めることで最大限まで落としてある
今のうちに俺ごと封印しろ」

「え? 師匠ごと?」

「ああ、そうだ早くしてくれ!!」

「無理よ、そんな師匠事なんて……」

「紫!!」

「分かってる、分かってるけど」

「紫はやk……がああああああああ!!」

「師匠!!」

「急げえ!!」

「でも……」

「でもじゃねえ!!」

「今しかチャンスはねえんだよ、お前しかやれる奴はいないんだ!!
俺の最後のわがままで、紫頼む」

「分かったわ、師匠……… 八雲式封印術」

「光りが俺と西行妖を包む」

「ありがとう紫……… またな」

「ええ、また会いませよ 師匠」

「そして俺の意識は暗闇の中に落ちていった………」

第七章 開放編

第六十六話 天童妹が幻想入り

どうも、私の名前は化野言音です…… っていったい私誰に向かつて自己紹介してるんだろう？

拓也が消えてから、一ヶ月がたったがまだ気持ちの整理がつかないホントあれは何だったんだろう？

拓也が私をかばってトラックに引かれたあと、拓也の体は光とともに消失した

普通人間は死んでも消えたりはしない

拓也は、今は一応行方不明と言う扱いだ

「あ、言音さん」

「あ、陽菜ちゃん」

この子は、陽菜ちゃん、本名は天童陽菜てんどうひなで拓也の妹

「はあくお兄ちゃん、ほんとにどこ言ってるんだろう」

「本当だね」

言えない、私をかばってトラックに引かれたあと光と共に消えたなんて言えない

あと、言っても信じてもらえないだろうしな

「では、陽菜はこの辺で」

「うん、バイバイ」

そして、そのまま私たちは別れた

たつくもくお兄ちゃん一体どこほつつき歩いてるのかなく

言葉さんなんか、暗い感じだったな…… お兄ちゃんのこと本当は何か知ってたりして……

まあ、そんなことないかな？

明日それとなく聞いてみよ

私がいろいろ考えながら歩いていると

「あれ？」

見慣れない階段を見つけた

こんなところにこんな階段あつたけ？

家の近くの山に見たことがない階段があつた

小さい頃からこの辺に住んでるため間違えることは、早々ないのだが……

何かある気がする

そう思い、自然と足を階段の方へ進めていた

そして、一段また一段と階段を上っていった

この上には何があるんだろ？ただ、そう思い階段を上り続けた

そして、最後の一段の上って鳥居の下に出た

「……神社？」

なんで、こんな山奥に神社あるのか？

うくん、やつぱり覚えがないな

名前を聞けば思い出すかもしれない、と思い神社の名前を探した

「ええつと…… あつた、博麗神社？」

博麗神社つて言うんだココ

でも、思い出せないな……

まあ、いいか

せっかくだからお参りして行こうかな

私は財布の中から五円玉を取り出し賽銭箱に放り込んだ

二礼二拍手一礼つと……

「神様お願いします

お兄ちゃんが早く帰って来ますように」

つて、神頼みでどうにかなる物でもないか……

「こんにちは」

「わっ!?!」

「あら、脅かしちゃった? ごめんなさいね」

いつの間にか、私の後ろに女の人が立っていた
かなりの美人さん……………

「あなた、天童陽菜よね?」

「なっ、なんで陽菜の名前を?」

「ふふ、昔聞いたのよ」

あなたのお兄さんに」

「お兄ちゃんのことをなにか知っていますか!?!」

「ええ、会いたい?」

「はい」

「そう、ならここを通過して」

すると、女の人の横の空間に亀裂が入り裂けた

え? 何これ?

中に沢山の目玉が見える

気色悪い……………でも、この向こうにお兄ちゃんがいるな

ら……………

私は恐る恐るその裂け目の中を通過した

通った先はさっきの博麗神社だった

しかし、さっきまでの神社と違い綺麗で手が行き通ってた

「ここは、いったい……………」

後ろにはさっきの女の人が笑顔で立っていた

「ようこそ幻想郷へ」

天童陽菜あなたを受け入れるわ」

第六十七話 開放の鍵

「幻想郷?」

「そんな、地名の場所あったかな?」

「ここは、日本なんですか?」

「一応日本よ、結界で外からは干渉出来ないけど」

「結果……アニメや漫画の中では見たことあるけど、実際にあるんだ」

「幻想郷って、いったい何なんですか?」

「ここは、忘れられたものが来る楽園よ」

「忘れられたものか……」

「ん?あれ、紫じゃない」

「何しに来たの?」

「神社の中から、頭に大きな赤いリボンをつけた巫女服?の巫女さんが出てきた」

「あら、丁度いい所に来たわね 霊夢」

「巫女さんの名前は霊夢と言うそうだ」

「どうせまた面倒なことを……あれ?誰、その子?」

「て、天童陽菜といます」

「ふくん、私は霊夢、博麗霊夢よ、この博麗神社の巫女をやってるわ
やっぱり、巫女さんだった」

「で、紫?なんでこの子を連れてきたの?」

「そうでした、早くお兄ちゃんに会わせて下さい」

「わかったわ、霊夢手伝ってくれる?」

「私の質問にまだ答えてないんだけど」

「そうだったわね、この神社の神様を封印から解くのよ」

「ふくん、神をね……えっ?!神?」

「さて、陽菜さん」

「はい」

「あなたにも手伝って貰いますからね」

「え?」

手伝うって陽菜は何をすればいいんですか？」

「ああ、まず能力を確認しないとね」

「能力？」

「そう、能力」

私だと『境界を操る程度の能力』だし、その霊夢だと『空を飛ぶ程度の能力』を持つてるの

正確な能力名は分からないけど、能力を持っているはずよ」

「陽菜にそんな力が……」

「じゃ、今日はもう遅いから、後は霊夢よろしく」

「はあ？ちよつと、待ちなさい……って、逃げたか……」

紫さんは、隙間？を開いてその中に消えていってしまった

「はあ、しょうがないわね」

えつと、陽菜って言っただけ？」

「は、はい」

霊夢さんは面倒くさそうに頭を掻きながら話す

「取りあえず、うちに上がって」

神社の中に案内された

神社の中は、殺風景でほんとに必要なものしかないって感じだった
「紫のことだからどうせ明日来るでしょうから、今日は泊まっていきなさい」

「いいんですか」

「いいもなにも、野宿なんてしたら妖怪に食われるわよ」

「妖怪!？」

妖怪なんているんだ

「紫も妖怪よ」

「紫さんも!？」

驚きの連続である

「すみません」

「別に謝らなくてもいいわよ、人を妖怪から守るのも博麗の巫女の役目だから」

霊夢さんはぶつきらぼうに言った、根は優しそうだ

夕御飯をご馳走になってから、霊夢さんに呼ばれて、居間に来ていた

「明日に備えて、能力の確認だけしておきましょう」
「はあ……」

やっぱり、まだ能力って言っても実感が無い
「目をつぶって、心を落ち着かせて」

霊夢さんの言う通りにする
「箱をイメージして、形は何でもいいわ」

そんなテキストウなど、思いながらも宝箱をイメージする
「その箱をゆっくりと開けて」

宝箱は開き中から、文字が出てきた
『開閉を操る程度の能力』？」

「おめでとう、それがあなたの能力よ」
「これが、陽菜の能力……」

開閉を操る程度の能力、いったいどんな能力なんだろう

第六十八話 陽菜の特訓

「うくん」

朝の日差しにより目が覚める

そう言えば、昨日霊夢さんの家に泊まらしてもらったんだった
霊夢さんはもう起きてるのかな？

布団から這い出て外に出る

霊夢さんは外で掃き掃除をしていた

「あ、起きた？ちよつと待ってて、いま朝食の準備するから」

「陽菜も手伝います」

「いいわよ、すぐ出来るから」

居間で待ってて」

居間で待っているとすぐに霊夢さんが朝食を持ってきてくれた

「朝食食べ終わったら能力の修行するわよ」

「修行ですか？でもなんで？」

「能力が分かったからって使いこなせるわけじゃないからね」

「なるほどお……」

よし!!頑張るぞい!!

朝食後

「さーて、そんじゃはじめるわよ」

「は、はい よろしくお願いします」

「それじゃ、まず能力を使ってこの鍵を開けて」

「はい」

前に置かれた箱の鍵穴を見る

開けく開けくと念じてみる

が、ピクリとも動かない

「ダメね」

「うゝそんなにキツパリ言わなくても……………」

「さーて、どうしたもn「霊夢く……………うるさいのが来たわね」

霊夢さんはそう言って空を見る

空？

って、えっえく!!

空にザ・魔法使いという格好をした金髪の女の子がいた

と、飛んでる……………

「暇だから遊びに来たぜ!!」

「来たんならちゃんと賽銭箱にお金入れていきなさいよね」

巫女さんがそんなこと言っつていいのかな？

「ん？見ない顔だな、外来人か？」

「紫が連れてきたのよ」

「ああ、なるほど」

私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

「天童陽菜と言います よろしくお願いします」

魔法使いって普通なのかな？

男っぽい喋り方をする、魔理沙さんを見ながらそんなことを思った

「魔理沙さん、どうやって空を飛んだんですか？」

「いや、普通にだぜ？」

幻想郷では空を飛べる奴は多いんだぜ」

「幻想郷では常識が通用しないものね」

「じゃ、じゃあ、陽菜も飛べるようになりますか？」

「「なれる（ぜ）わよ」」

「おしえて下さい!!」

空を飛べるなんて夢みたい

「そうね、能力の特訓と一緒に霊力を操る特訓もした方が能力を操る

のも早くなるし、そうしましょ」

「やったー」

「よかったな、陽菜」

「はい」

「さっさと済ましちゃうわよ」

「は、はい!!」

「えつと霊夢さん、これは？」

「瞑想」

そんな端的な、と思っているとまだ続きがあった

「あんたは、元から霊力が高いけどそれを全然引き出せてないの、霊力を高めるのも引き出すのも瞑想が一番だし、私がサボれる」

へく瞑想ってそんな効果があるんだ…… あれ？今とんでもないこと最後に言わなかった？

瞑想をしていると、身体の中から暖かい感じがしてきた

「いい感じね…… よし、外に出るわよ」

「まず、私がやるからそれを真似してみて」

そう言つて、霊夢さんは青白い球体を手のひらに出した

「これが霊力よ、やってみなさい」

「は、はい!!」

手のひらに力を込める、すると青白い球体が出る

霊夢さんより小さいけど

「そう、いい感じ」

体の中から力を出す感じ」

「はい!!」

体の中に霊力が流れているのをイメージをし、力をもう一度加える

「わあ!?!」

ボウと、音を立てて一回りぐらい大きくなる

「その調子よ

さて、次行くわよ」

「はい」

待っててね、お兄ちゃん!!

第六十九話 賢者からの忠告

あれから数週間

「お、おお、おおお!!空を飛んでる!!」

空を飛べるまでに霊力の操作ができるようになっていた

「いい感じよ、次は箱開けね」

「はい」

錠前の鍵穴を見て鍵をイメージしイメージした鍵をそのまま差し込み直す

ガチャと音を立てて鍵が開く

「やったあ!!」

今では能力をだいぶ使えるようになった

まだ、鍵穴があつたりロックしている物が見えないと使えないけど、着々と成長している

「そろそろアレをやらしてもいいかもね」

「アレって?」

「おお!!アレか!!」

「だから、アレって何ですか!?!」

「弾幕(ぶつぱん)」

「?」

良く分からないまま始まってしまった……………

「陽菜ー!!準備はいいかー!!」

正面にいる魔理沙さんは、やる気満々だ

霊夢さんは縁側でお茶をすすってる

えっと、弾幕ごっこは要は玉当てゲームってことでいいのかな？

「それじゃ、行くぜ!!」

魔理沙さんが魔力で出来た弾を撃ってくる

「わっわっわっわっ」

飛びながらそれをかわす

「お!!じゃんじゃんいくぜ」

「こっちだつて!!」

霊弾の作り方は幸い空を飛ぶ練習の時にやった

弾を作り方放つ

「どんどん行くぜ」

魔理沙さんの弾幕がだんだんと濃くなってくる

どうしよう、逃げ道が……………

「右35°よ」

「え?」

縁側でお茶をすすってた霊夢さんが言ってきた方向を見ると人が通れるぐらいの隙間があった

霊夢さん凄い

「ああ、霊夢!!ずるいぜ」

「初心者相手に何ムキになってんの?」

「あくもくいいんだぜ!!」

魔符「スターダストレヴァリエ」

星のような弾幕が、陽菜を襲う

「きゃああああ!!」

弾幕に当たり落ちてしまう

「大丈夫?」

「どちらかという大丈夫じゃないです」

「まあ、慣れる分にはよかったわ

今日の修行はこれでオシマイ」

今日も疲れました……………

「霊夢、陽菜お疲れ」

「わっ!?!」

「………… やつと来たわね、紫」

紫さんがスキマを使って出てきた

ホントにビックリするな……………

「今日は少し報告をしておこうと思って」

「報告って何なんだぜ？」

「あら？、魔理沙もいたの丁度いいわ

で、報告って言うのは最近妖怪たちに良くない動きが見えるから気をつけてということよ」

「よくない動き？」

「幻想郷のシステムに反対してる妖怪の一部が何かコツコツしてるよ
うなんだけど」

「それを止めるのがあんたの役目でしょ？」

「それとも、何か知ってて企んでる？」

霊夢さんが紫さんを睨む

「ふふ、どうでしょうね

それじゃ」

そう言って紫さんはスキマの奥へ姿を消した

第七十話 異変の始まり

「疲れたあ」

陽菜は、今日も修行に勤しんでいます

それにしても昨日の紫さんの言葉は何だったんだろ？

霊夢さんに聞いても「あんたが気にすることじゃないわ」って言われちゃったし……………

そんなことを考えていると、途轍もない音と地響きが起こった

ビツクリしてその方向を見る

音の原因は隕石だった…… 隕石!?

隕石は、一つの山に落ち山を消しさった

突然のこと過ぎて、ポカーンとするしかなかった

「なんでだぜ?!ここは結界の中だから隕石なんて降ってくるわけじゃないはずだぜ!」

「魔理沙、落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられるわけないぜ!!」

魔理沙さんもだいぶ慌ててるようだ

「紫が言っていた事はこれだったのね

これは、異変よ」

「異変……」

紫さんが言っていた事はこれだったんだ

隕石を降らせるなんてなんて危険な能力なんだろう

今も隕石は降り続けている

「どうするんですか!?!あれ」

「紫が何とかするでしょ」

ええ、もう少し真面目に考えてくださいよ

「さてと、面倒だけど行くしかないわね」

「腕がなるぜ!!」

「ちよと、お二人とも何処へ行くんですか!?!危険ですよ!!」

「そんなこと分かってるわよ、ちよとと異変の首謀者をボコしてくるだけ」

「ボコすって……」

「それに、異変解決は博麗の巫女の仕事でもあるからね」

「私はただの興味本位だぜ」

「なら陽菜も「ダメ」何でですか!？」

「アンタがいても邪魔になるだけだわ」

魔理沙行くわよ」

霊夢さんはそう言って飛び立ってしまった

陽菜だって、努力でしきたのに

空だって飛べるし、弾幕も貼れるのに

「ごめんな、霊夢のやつ言い方きつくて

本当は陽菜に危険な思いをさせたくないだけだと思っぜ

あいつ根はいい奴だからさ」

じゃ、私も行つてくるぜ」

「魔理沙さんありがとうございます

お気おつけて」

「おう!!」

「しっかし霊夢、異変の首謀者は何が目的なんだろうな」

「私に聞かないでよ、知るわけ無いでしょ」

どうせくだらない事でしようけど……魔理沙、来るわよ」

「何が? っとうわあ!？」

下から、攻撃が飛んでくる

「いきなりは、卑怯だぜ」

「文句言っていないで早く反撃」

「分かってるぜ」

攻撃が飛んで来た方にゆく、そこには二十、三十ぐらいの数の妖怪たちがいた

「一気に片付けるわよ」

夢符「封魔陣」

「おう!!」

魔符「ミルキーウェイ」

二人で同時にスペルを発動し、妖怪たちを一掃する

「さーて、親玉はどこかしら?」

「そんな簡単に出てくるわけないぜ」

「… 俺に何か用か?」

かすれた声でそいつは現れた

体全体が鱗のようなモノで包まれているが、姿はまるで人のような

男だった

「アンタが異変の首謀者」

「… そうだ」

「じゃあ、この降り注ぎ続けている隕石を辞めてもらえないかしら」

「… 無理だ」

「それじゃ、カづくで行くわよ」

「腕がなるぜ!!」

「… 来い」

赤と黄色、そして灰色の影が衝突した

第七十一話 灰色の男

「くっ!!」

「どうした?そんなものか?」

全身が灰色の鱗に包まれた男がゆっくり近づいてくる

「よそ見してたら危ないぜ!!」

魔理沙が横から弾幕を放つが、竜巻が吹き荒れ吹き飛ばされる

「邪魔だ」

男が手をかざすとまた竜巻が起こり魔理沙を襲う

「う、うわああああ!!」

「魔理沙!!」

「よそ見してる場合か?」

「な!?!」

さつきまで、目の前にいた男はいつの間にか後ろで構えていた

「夢符「二重結界」!!」

結界を展開し攻撃に備える

「天災「崩れゆく雪蜥蜴」」

突如、大量の雪が発生し雪崩のように押し寄せて来た

押し寄せる雪はまるで一匹の巨大なトカゲのような形になり、襲い

来る

「くっ!!」

結界を維持しながら押し流されないように踏ん張る

「ふむ、天災「押し寄せる水蛇」」

男は雪崩にプラスし今度は津波を生み出した

その津波は数千の水で出来た蛇のようだった

「くっ、きやああああ!!」

ついに踏ん張りが効かなくなり吹き飛ばされ、魔理沙の近くに倒れる

「終わりだ天災「暴れ回る風鰐」

風の鰐が魔理沙と私を襲い、そこで意識を失った

霊夢さん、魔理沙さん遅いな…… 大丈夫かな……

霊夢さんと魔理沙さんが出て行ってから数時間経っていた

心配しながらソワソワしていると空間に切れ目が入り中からは紫さんが出てきた

「紫さん…… ツツ!」

紫さんは見馴れた人を抱えていた…… 霊夢さんと魔理沙さんだ

「霊夢さん!!魔理沙さん!!」

「陽菜、二人を博麗神社に運び込んで治療するわ
手伝ってちょうだい」

「は、はい!!」

二人を神社の中へ運び込み、傷口を消毒してから能力で閉じた
しかし、傷口は閉じたが痛みは無くなっていないはずだ
二人が負けるなんて………

「う、うう……」

「霊夢さん!?大丈夫ですか!」

「傷口に響くから大きい声出さないで

……は…… 神社ね」

「はい、紫さんがお二人を運んで来ました」

「紫が?」

「あら霊夢、目が覚めたのね」

「おかげさまでね」

「……ところで、何があったの？」

「異変の首謀者にやられただけよ」

「霊夢さんが!？」

霊夢さんは普段ぼんやりしているけど凄い人だ、そんな人が負けるなんて……………

「今回の異変の首謀者を甘く見てたわ

隕石の方はどうにかしたから、今は体を回復させる方を優先しなさい」

「悪いけど、そうさせて貰うわ」

そう言つて霊夢さんは布団をかぶつたてしまった

早くみんなを守るぐらい力を付けなきゃ

そう心の中で決意した

その頃、階段を登る灰色の影があったのは誰も気づかなかつた……………

第七十二話 復活

「はなせー!!はなすんだぜ!!」

「無茶ですよ魔理沙さん!!そんな傷で行くなんて!!」

「私は、アイツに一発ぶち込まないと気がすまないんだぜ!!」

霊夢さんが目を覚ましてから数分後、魔理沙さんも目を覚ました

魔理沙さんは、目を覚ましてからずっとこの調子で異変の首謀者の所へ行こうとしている

「傷なんてないぜ!!」

「いや、それ陽菜が閉じただけですから」

中々諦めてくれ無い魔理沙さん

霊夢さんは魔理沙さんが五月蠅くて眠れなかったのかお茶をすすっている、少しは手伝って欲しいものだ

「……来る」

「えっ?何が……つつ!」

霊夢さんが急に発した言葉の意味を私はすぐに理解した

とてつもなく邪悪な妖力を放ちながら全身を灰色の鱗でつつんだ男が階段を登りきり鳥居の下に来ていたのだ

「魔理沙さん、あれは?」

「異変の首謀者だぜ」

「あれが……」

一緒に空間にいるだけで威圧感で押しつぶされそうだ

霊夢さんと魔理沙さんは境内へ出てゆく

「アンタ何しに来たの?」

霊夢さんの声色が変わる

「……高い場所を求めて来たが……まさか貴様らがいるとわな

ここなら、この世界を見渡すのにちょうどいいな」

「アンタ何をするつもり?」

「世界を変える」

「世界を？」

「俺は、半人半妖だ、そのせいか周りから忌み嫌わされていた

父と母は俺らを守るために人間に殺された、姉は散々弄ばれてから殺された、弟はそんな環境に耐えれず自殺した、何故こうなる？俺が半人半妖だからか？こんな世界はおかしいだから力をつけたのだ

この世界の格差をない世界へと変えるため、皆が等しく平等な世界へ……………

その為に、まずこの歪んだ世界を破壊する!!」

「破壊なんてさせないわ(ぜ)!!」

霊夢さんと魔理沙さんは同時に飛び出す

「邪魔をするな

天災「天降る岩龍」

男がスペルを唱えると空から岩の龍が霊夢さんと魔理沙さん目がけて落下してきた

「くっ」

二人とも怪我のせいで動きが鈍くなっているため、躲すのがギリギリだった

そこから、戦いは激化していった

陽菜が入る余地なんてなかった

霊夢さんと魔理沙さんは、どんどん追い込まれていき傷ついていった

陽菜は、怖くて恐くて見てるしかできなかった

「終わりだな」

霊夢さんと魔理沙さんを見下ろす男がそう呟き、今にも止めを刺そうとしていた

「つやめてください!!」

恐怖に震えながら男の前に立ちはだかった

自分でも何をしているかわからなかった、ただ霊夢さんと魔理沙さんを失いたくないと言う気持ちだけが体を動かした

「アナタが言う理想の世界は素晴らしいと思います、誰もが等しく平等、でもやり方は間違っています!!その理想な世界を創るために今生きている人たちの命を奪っていい理由にはなりません!!」

「…………… 黙れ」

「アナタの家族はとても優しかったんでしょ!!その家族のアナタなら分かるはずです!!」

「黙れ」

「もう一度考えてなおして下さい!!」

「黙れ!!」

半人半妖の男を中心として竜巻が起こり吹き飛ばされ倉にぶつかる

紫さんがお兄ちゃんが封印されていると言っていた倉だ

お兄ちゃんなら、この状況をどうにか出来るかもしれない

お兄ちゃんお願い、霊夢さんと魔理沙さんを…………… 幻想郷を守って

必死で願った、もう涙が今にも零れそうだった

届く筈がない拙い思いのはずだった…………… しかし瞬間、倉の

扉が勢いよく開かれ中から眩い光を放った

そして、中からは愛しい人が現れた

「…………… おにいちゃん?」

天童拓也が封印から解かれ復活したのだった

第七十三話 戦闘開始

まるで長い夢から覚めたような感じだった
はつきりせずボヤがかかっていた視界が少しずつ晴れていき意識
が覚醒する

目の前には、巫女装束の女の子と魔法の格好をした女の子が倒れて
おりそれを見下ろすかのように灰色の鱗を纏った男が立っていた
それぞれが、驚いたように目を見開きこちらを見ていた

えっと……これ、どういう状況？

全くもって状況が理解できない俺に誰かが抱きついてきた

「誰だ？…… って陽菜!？」

「おにいーちゃんー!!」

抱きついてきたのは、涙で顔をぐしゃぐしゃにした妹の陽菜だった
えっ!?なんで俺の妹がここにいるの？普通会えないはずだよね？

さらに俺の脳は混乱してゆく、誰か助けてくれ……………

「貴様も俺の邪魔をするのか？」

ふと、目の前の灰色の男が声をかけてきた

邪魔？何のことだ？

「お兄ちゃん助けて

あの人が幻想郷を滅ぼそうとしているの」

「えっと…… その……」

待て待て待て、また知らない単語が出てきたぞ…… 幻想郷？それ、
どこの地名？

「俺の邪魔をする者は誰であろうと消し去る!!」

天災「崩れゆく雪蜥蜴」!!」

何もわからない俺に向かって、灰色の男は雪のトカゲを創り出し攻
撃をしてくる

ちよと、誰か説明を!!説明をプリーズ!!

「ちよ!!」

陽菜を引つ張り上空に逃げ雪のトカゲをかわす

雪のトカゲはそのまま直進し俺達の後ろに建っていた蔵にぶつかり蔵を破壊した

なんだか知らないが、アイツは敵だこれは決定した

攻撃してくる奴は敵だもんな

「陽菜、アイツは何が目的なんだ？」

「えっと、理想な世界を創るために今ある世界、つまり幻想郷を破壊することだった筈」

理想な世界を創るために今ある世界を破壊か随分と無茶苦茶なことやろうとしてるなアイツは……

よく見ると隕石降ってるし、なんなんだよこの世界!!

「おい、お前そんな事しているの田舎のお母さんが知ったらお母さんが泣くぞ!!」

「母は、病気で死んだ!!」

「えっ?……じゃあ、田舎のお父さんが泣くぞ!!」

「父も殺された!!」

「えっえっ!?!……じゃ、じゃあ、姉兄きょうだいが泣くぞ!!」

「姉も弟も死んだ!!」

「もういい好きにしろ!!」

「ちよと、お兄ちゃん!?!」

だって、アイツすつごく可哀想だもん

「あんなのがうちの神社の神様?」

「ハハハ、変な奴だぜ」

おいその巫女と魔女、聞こえてないと思ってるかもしれないね
いがばっちし聞こえてるからね

「茶番はいい、さっさと終わらせようか」

「おうよ、かかって来いや!!」

目覚めてからいきなり戦いつて俺の人生ろくでもないな、そう俺は
思った……………

第七十四話 岩雨異変、解決

「ふん!!」

「うおっとお」

何故こんな事になったのだろうか

確か西行妖を封印して目を覚ましたらこの状況、ということは封印が解かれたということだろうか？西行妖はどこ行つた？

「逃げてばかりでは終わらんぞ」

「わかってるよ」

基礎能力アップパラメータ（攻）アタック（速）スピード Level 4」

灰色の男は、炎、水、雷、雪、風様々な攻撃を次々と放ってくる

その形は蛇だったり亀だったり蜥蜴だったり爬虫類の形をしていた

それをスピードを上げてかわしていく

「おーい、神様

さっさと終わらせなさいよ、神社がボロボロになるじゃない」

巫女の子が遠くから声をあげてくる

何あの子めつちやわがまま、俺の中の巫女のイメージ崩れるからやめて!!

「あーやればいいんだろ!!やれば!!」

鈴符「降り注ぐ刃」!!」

大量の刃物を設置し投下する

「ぬう!!」

灰色の男は風を上に向けて放ちナイフを弾いてくる

俺は、灰色の男の意識が上空のナイフに向いている間に背後に回り込む

「鈴符「鉄拳制裁」!!」

鉄の拳が灰色の男の頬に直撃し吹き飛ばす

灰色の男は、地面を転がり蔵の残骸のなかに突っ込んでいった

……どうだ？やったか？

そんな期待を裏切り灰色の男はゆらりと立ち上がった

しかし、灰色の男は口から血を吐き出し、頬のあたりの鱗が剥がれ落ち赤い肉が見えていた

「げっほげっほ」

あれ？もしかしてこいつ防御力めっちゃくちや弱い？

もう一発叩き込んでおくか

「おらっ!!」

「があ!!」

灰色の男を速度はダメージを負ったせいも格段とスピードが落ちており簡単に鉄の拳が男の腹に刺さり、口から血を吐き出す

流星に危険を感じたのか男は距離を取る

「ここまで追い込まれるとはな」

いや、アンタの防御力低すぎなだけだよ

「もう止めないか？もうあんたの体が持たないぞ」

「辞めるわけにはいかんだ、たとえこの身が朽ちようとも!!」

灰色の男の目には今まで無かった闘志のようなものが感じられた

「そうか……なら、全力で相手させてもらうぜ!!」

「天災「天変地異」!!」

灰色の男は宙に浮かび次々と天災を繰り出す

雪崩の蜥蜴、津波の蛇、竜巻の鱧、土砂崩れの亀、落雷のイグアナ、

隕石の龍が俺をめがけて飛んでくるが

「しゃくらせえ!!」

チェンジ デストロイ
変更（破壊）

拳一つで打ち破った

「なっ!？」

「相手が悪かったな、これで終わりだっ!!」

灰色の男にもう一撃いれるとピクリとも動かなくなり、空から降り注いでいた隕石の雨は止んだのであった

第七十五話 光の行方

「お疲れ様です、師匠」

ふと、聞き覚えのある声が聞こえその方を見ると、八雲紫が立っていた

「えっ？紫!？」

「ありがとうございます」

私の幻想郷を守ってくれて」

「本当にゆかりん？言葉遣い変わり過ぎて怖いけど」

「ゆかりん言わないでください!!」

「あ、ゆかりんだ」

よかったー安心したわ、もし偽物だったらどうしようと思ったわ

「ちよと紫、師匠ってどういう事？」

わがまま言っていた巫女がゆかりんに突っかかっていった

「どういう事って、彼は私の師匠よ」

「何言ってるの!？」

そこの神ぼっぴい人は陽菜の兄でしょ!?!?!?! いや、姉?」

「俺は、男だ!!」

「そうよ霊夢、それにこの人私より年上よ」

「なっ!？」

巫女さんはゆかりんと俺の顔を交互み見てくる

これでも君より年上です、それに男です

「お兄ちゃん、その人生きている?」

「大丈夫だ、手加減はした生きている…… 多分」

「その間はなに?」

え?生きてるよね?死んでないよね?ちよつと怖くなってきたわ、ちよつと君起きてー

「大丈夫よ師匠、その半人半妖は生きているわ

その身柄はこっちで預かるわね」

ゆかりんはスキマを開いて灰色の男を消した

「それにしても、あいつを一人で倒すなんてあんた何者?」

「人のことを聞くときはまず自分からって習わなかったのか？」

「習ってないわ」

「おい……じゃあ今、覚えろ」

「たっく、面倒くさいわね」

私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女よ」

「私は霧雨魔理沙だぜ!!」

わっ、急に魔女の子もはいつてきたな

「俺は天童拓也だ」

一応神をやってる」

「お兄ちゃん神様になつてたの!?!」

うん、陽菜ちゃんお兄ちゃんも最初はびっくりしたよ

もう慣れたけど……

その後、陽菜と霊夢と魔理沙にいろいろ聞かれたり神社を修復したりしてうちに夜になりそれぞれが布団をかぶり寝息を立てていた

俺は、なんだか寝付けなく外で月を眺めていた、寝付けないのは気がかりなことがあったからだ

……アイツは何処にいるんだ？

「師匠」

「おう、紫か……本当に神出鬼没だな、お前」

「師匠も出来るでしょ？それよりも気になってるんじゃない」光さんのこと」

「ああ、アイツは何処にいるんだ？」

すると、紫はスキマを開いて中から何かを取り出した

「これは……」

「……月明光よ」

紫が取り出したのは刃が折れボロボロになった愛刀月明光だった

「西行妖を封印したあと見つけた時にはこの状態に……」

「くっそお!!……光い」

付喪神である光は依代である月明光が壊れてしまつては消えてし

まう

「俺がしっかりしていれば……」

その日は、泣き続け疲れきってしまいそのまま深い眠りについてしまった

第七十六話 続く異変

「あの神様はまだ寝てんの？」

「はい、お兄ちゃんはまだ寝てます」

「あくもく、買い物行ってきてもらおうと思ったのに」

「いや、神様をパシリみたいに使っちゃいけないと思いますよ!!」

陽菜が鋭いツツコミをいれてくる

「わかってるわよ…。はあく仕方ない、私が行くか」

「ま、待っててください!! 霊夢さん」

「うん? なに?」

「私もついて行っていいですか? 人里つてまだ行ったことなくて…」

そう言えば、特訓ばかりでそうだったな…。と思いつつ、目を輝かしている陽菜を見る

断つてもお願いしてきそうだな…

「まあ、いいわよ」

「やったー!! 準備してきます」

そう言つて陽菜は神社の中へ戻つていった

はあー、めんどくさい事になりそうだな…

霊夢さんと一緒に人里にきました!!

時代劇のセットみたいですすごいなと思い、少しテンションが上がってくる

隣では霊夢さんが気だるそうに大きなあくびをしている本当にす

ごい人なのか自分を疑いたくなつてくる

「さてと、ちやつちやと終わらせるわよ」

「はい!! 霊夢さんお金は?」

「あるわよ、三百円」

「少な!!」

えっ?! 少なすぎじゃありません? 三百円で何が買えるかな……いや、今は時代が昔っぽいし、三百円も高価なのかも……

そう願いながら霊夢さんの後を付いて行っただ

はい、三百円は、三百円でした

そうですね、こんな少ないお金で霊夢さん今までよく生きてこられたなんて考えていると、歩みを止めていた霊夢さんにぶつかってしまっ

「どうしたんで…っつ!!」

霊夢さんに何かあったのか聞こうと思った瞬間にすべてを理解した

周りに黒い煙のようなものが充満しており、人里の人々が倒れているのだ

「霊夢さん、これってまた……」

「ええ、異変よ」

まったく、昨日の今日で… まだ傷も癒えてないって言うのに」

霊夢さんは、ものすごく機嫌が悪くなっている

下手に刺激しない方がいいよね

「はあ、陽菜!!」

「は、はい」

「私は、これ以上被害が広がらないようにするため結界を貼るから、アンタは倒れてる人達を家の中に放り込んで来なさい」

また、大事件にならないといいけどな…… そんなことを考えながら、霊夢さんに言われたとおりで道で倒れている人を家のなかに連れて

いった

倒れていた人を全て家の中に連れて行ってから霊夢さんの元へ戻った

「さてと、それじゃあ行きますか」

「行くって、どこへですか？」

「うん？決まってるんじゃない異変主犯者のところよ」

「え、でも……」その必要はありませんよ」

まだ怪我をしているため止めようと思ったとき、聞きなれない男の
声が響いた

「どうも、初めまして博麗の巫女さん」

急に現れた黒いスーツに見を包んだ丸眼鏡をかけた男は不敵に
笑った

第七十七話 開放者

「どうも、初めまして博麗の巫女さん。」

目の前に現れた妖怪？は、白のシャツにジャケットを羽織りっており、まるで執事のような服装だ。

その妖怪は、特徴的な丸眼鏡を指で押し上げて薄気味悪く笑う。

「誰なんですか… 貴方は？執事みたいな格好していますけど…」
「羊？」

「霊夢さん少し黙ってください。」

「私ですか？… そうですね。あえて言うなら、開放者でしょうか？」
「開放者？」

「そう開放者です。この幻想郷という檻から妖怪たちを解放するため
に立ち上がったものです。この幻想郷では、八雲紫の作ったキマリの
せいで妖怪たちが人間を十分に摂取出来ません。だから私は、博麗
の巫女を倒し結界を破るのです！」
「結界を…。」

そんな事をしたら、私がいた方の世界に妖怪が溢れて大惨殺が起
こってしまう。

「そんなk」そんな事させるわけ無いでしょ？だいたい、私が死ぬわけ
ないし。」

今まで黙っていた（黙らされていた）霊夢さんが、さも当然かのよ
うに言い放った。

「開放者だとか、知らないけどね。博麗の巫女として、とつとと退治さ
せてもらおうよ。さてと、私の休暇を奪った罪は重いわよ。」

「絶対、後半がメインですよね!？」

「ふふふふふ。では、こちらから行きますよ!？」

執事服の妖怪は体を煙のようにし、霊夢さんはお払い棒を構える。そして二人は衝突した。

早く…早く帰って、お兄ちゃんや魔理沙さんに伝えなきゃ!

私は、神社へ向けて飛ぶ速度を上げた。



くっ、厄介ね。目の前の妖怪を見ながらそう思う。

体を煙のようにしてくるせいで、物理攻撃が全然聞かないし、煙にして腕や足を伸ばしてくるから攻撃距離も変わってくる。

「ほらほら、どうしたんですか？博麗の巫女。私を退治するんじゃないんですか?」

「言われなくてもしてやるわよ!？」

と言っても、お札や零弾は、全然当たらない。面倒くさいと思ったらあ
りやしないわ。

「そろそろ決めますよ!？」

「なっ!？」

煙男は、煙幕を張り視界を奪ってきた。

慌てて煙幕から出るが、そこを狙って攻撃され民家につまむ。

「があ!？」

この前の灰色男にやられた傷が開き、巻いてある包帯に血が滲む。痛みを押さえつけて、その場を即座に移動する。

今、煙男からは、私の姿は捉えられていないはず。なら、そこから不意を突く。

民家の間を縫って移動し、煙男の背後を取る。

「もらったあ！」

完全に不意を突いたため、煙になる暇はないはず。これで決まった。

しかし、攻撃を受けた煙男は、煙になって消えた。

「なっ!？」

「これぐらい読めますよ。」

「なんで…?」

「煙で分身を作っただけですよ。さて、本気を出していきますよ。」

煙男は、そう言うとき煙で自分の分身を数十人も作り出した。

これは…マズイわね…

絶体絶命と思ったとき、強烈な風と一筋の光が煙男の分身を一掃した。

「待たせたな、霊夢」

そこには、白黒の魔法使い、霧雨魔理沙と博麗神社の神、天童拓也がいた。

第七十八話 援助

昨日は情けないところ見せちゃったな。

俺は、雲一つ無い青空を見ながら昨日の失態を悔やんでいた。

確かに、光が消えてしまったのはショックだったが、紫の前である姿を見せてしまうなんて…… 布団の中で枕に向かって叫びたいレベルである。

まあ、考えていても仕方ない、とにかく光の件は切り替えていかないな。

そう心の中で結論ずけて、もう一度青空を見ると何が見える。あれは………

「お兄ちゃあああああんん!!」

飛んできたのは、我が妹の天童陽菜だった。飛行速度を上げ過ぎ止まれなくなり俺のお腹へ突っ込んできた。

そのまま、後ろに吹き飛ばす。

凄く、痛かったです。



「で、どうしたんだ?」

少し、落ち着いてから陽菜に要件を聞く。あの慌てよう、そうとうな事があったはずだ。

「妖怪が現れたの!」

「?。そりゃあ、幻想郷には妖怪が沢山いるからな。」

「そうじゃなくて! 異変を起こす妖怪が現れたの! 今、霊夢さんが戦ってるの!!」

「なっ！また異変!？」

昨日の今日でまた異変とは、迷惑極まりないな。

「とにかく、魔理沙さんと呼んで「私ならここにいるぜ。」わっ!？」
「あれ？魔理沙帰ったんじゃないのか？」

いつの間にか今日の朝一に自分の家に帰ったはずの魔理沙が戻ってきていたのだ。俺も正直ビックリした。

「何かおもしろそうな匂いがしたから戻って来たんだぜ。それで、異変なのか？」

「おもしろそうな匂いって… お前の鼻はどういう仕組みになつたんだよ。ああ、異変だそうだ。」

「よっしゃ！腕がなるぜ！」

「なんでお前はそう元気なんだよ？」

こっちは、昨日の件で疲れてんのに……これが若さか……

「どうしたの？お兄ちゃん。顔がどんどん老けていつてるよ。」

「いや、若さっていいなと思って。」

「何言ってるの？それよりも霊夢さんがピンチなの！早く行くよ！」

「ハイハイ。」

「今度こそ私がぶっ飛ばしてやるぜ！」

あの鬼巫女さんなら大丈夫だろう。そう思いながら、陽菜の後をついて行った。



陽菜について行き、たどり着いたのは人里と呼ばれる場所だった。その中心で、赤と白の巫女装束に身を包み特徴的な大きなリボンを着けた霊夢と執事のような格好をし体を煙にしている妖怪が戦っていた。

煙の妖怪が少し押し押し気味で霊夢は苦戦しているようだ。

不意打ちを仕掛けても、なかなか攻撃が当たっていない。

しばらくすると、煙の妖怪は煙で自分の分身を作り出し霊夢を取り囲むように位置どった。

あれはやばいな……。早く助けないと。でも、煙になって物理攻撃が全然効いて無さそうだし……。あつ、そうだ。

「能力模倣アビリティコピー 模倣対象コピー「文あや」。魔理沙！一発ぶちかますぞ！」

「おお！恋符「マスタースパーク」!!」

「風符「風神一扇」!!」

極太のレーザーと吹き荒れる暴風が煙の妖怪を次々と吹き飛ばし残り1体にした。

「待たせたな、霊夢。」

さて、ここからは俺のステージだ!!

第七十九話 煙の妖怪

さてと、アイツが異変の主犯かな？

俺は、こちらを睨んでいる執事服の妖怪を見る。丸メガネの奥には、余計なことしやがってと言いたげな瞳が映っていた。

「貴方は、何者ですか？」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀だろ？」

「これは、失礼。私はグレイ・スモークといいます。この度は、妖怪の自由を求めて異変を起こしております。では、貴方のお名前を聞いていいでしょうか？」

少し挑発をして怒らせようと思ったが、失敗のようだ。

「俺は、天童拓也だ。一応、博麗神社の神だ。」

「成程。今、この幻想郷で一番の強敵ですね。なら、あなたを倒してしまえば私の夢は達成される。」

おいおい、簡単に言ってくるね。ここは、ビシツと言わなきゃな。

「そう簡単にやら」ちよつと待て、お前を倒すのはこの魔理沙様だけだぜ
！」

魔理沙さん、今、俺が喋ってるんだけど……

「貴女には、用はありません。皆さん出番ですよ！」

グレイがそう叫ぶと、どこからか大量の妖怪が出てきた。一体どこから出てきたのやら。大量の妖怪は、霊夢と魔理沙を囲むようにして引き離していく。

「いいのか？仲間全部向こうにやっちゃって。」
「いいんですよ。さて、行きますよー！」

面倒臭いが、しょうがない。そう、覚悟を決めて迫り来るグレイを見た。



とりあえず、相手が煙の能力つてことは、分かっているから、文の能力『風を操る程度の能力』をコピーして迎え撃つ事にした。

「風符「ウイングブレード」。」

カマイタチを利用して風の刃を作る。白と薄緑色の刀を振り煙をなぎ払っていく。

「やりますね。煙符「砲煙弾雨」。」

相手もスペルを発動してくる。煙の弾丸が雨のように降り注いでくる。それに、向かって薄緑色の刀を振る。風の刀は、形を変え、まるで生きているように動き弾丸を次々と切り裂いてゆく。

そして、そのまま後ろに浮かんでいるグレイ・スモークに向かっていく。

「くっー！」

とつさに煙になり回避をして、後ろに回り込んでくるが振り向きざまに蹴りを繰り出し吹き飛ばす。グレイは、そのまま家に突っ込むがすぐさま体を煙にし、機会をうかがってくる。

「なあ、もう降参しないか？」

煙になり姿を見ることのできないグレイに向かって言葉を投げかける。反応は無い。

ここで降参してくれれば、楽なんだけどな……

「ここで諦めてなるものですか！」

グレイは、完全に不意をつき、後ろに現れ煙の刃を突き刺した。勝った。そう思ったグレイだったが、その考えは一瞬で否定された。

それもそのはず、俺の体が煙になり消えたからである。

実は、グレイが家に突っ込んだときに、コピー対象を変えて煙の分身を用意しておいたのだ。

「なら、容赦しないからな。」

「なんなんですか!?! 貴方は!!」

「最初に言っただろ。博麗神社の神様だってな。」

そして、俺は戦いを終わりに近づけてゆく。

第八十話 黒い痣

「いくぜ!!^{パラメータ}基本能力アップ(光速)。」

自身の出せるマックススピードで、グレイの後に一瞬で回り込み蹴りを繰り返す。

スピードに全くついてこれないグレイは、そのまま吹き飛ばされ人里の外の森まで吹き飛ばされていき木々を倒していった。

「くっ！一体なんなんですか、この力は!!」

「言っただろ？手加減なしだって。」

「なっ!!?いつの間!!」

「オラっ！」

光速で次々とダメージを入れていくが、途中で煙となり逃げられてしまう。

「お返しです！煙符「砲煙弾雨」!!」

煙から実体化し負けずとスペルを発動してくる。さつき発動した時よりも、1つ1つの弾が大きく数も多い。

これをよけるのは、骨が折れそうだ…… よけないけどね。

「^{チェンジ}変更(反射)。」

(光速)から(反射)に切り替える。すると、煙の弾丸は俺の体に当たるギリギリの所で進行方向を反転させて、グレイの方へ返ってゆく。

初めて使ったけど、いいなこれ……。ちよつと強すぎな気もするけ

ど。

自分が放った弾丸が全て返ってきたことに、グレイは一瞬戸惑いを見せたがすぐに体を煙にして回避をした。

いい加減あの煙になるの鬱陶しいな。煙の成分から破壊してやろうかな。

「チェンジ デストロイ 変更（破壊）。」

また、変更をする。今度は リフレクション（反射）から デストロイ（破壊）だ。ここからやることは単純なことだ。拳を握り締め煙を殴る、ただこれだけだ。すると、グレイは煙から実体に戻り吹き飛ばされて行った。

「煙自体にダメージを与えられればいいと思ってやってみたが、どうやら成功のようだな。」

「くっ、くっそおおおお!!」

グレイは、狂ったように叫び分身を作り出す。その数、百人、千人……いや、もっと多い。

気づくと上を見ても下を見ても、右を見ても左を見てもグレイ・スモークだらけである。

気持ち悪い……と言うかこの数を相手にするのはメンドクサイな。じゃあ、キャンセルさせましょう。

「アビリティキャンセル能力解除。」

その一言の言葉と共に数千、数万人いたグレイの煙分身は一瞬で消えてしまった。アビリティキャンセル能力解除名前通り能力の解除だ。これで邪魔な煙人形も消えたな。

「んじゃあ、ラストにしますか。それじゃあ………歯あ食いしばれ!!」

「くっ、がああああ!!」

一瞬で移動し 그레이の顔面に拳を叩き込む。特徴的な丸メガネは砕けちり、そのまま地面へ落下していった。

これで、おしまい。そう思った時だった。突如、그레이を殴った右手に黒い煙が立ち、その煙の中から黒い鎖が飛び出した。右手首に絡まるようにして黒い鎖が巻き付いたのち、黒い鎖型の痣を残して消えた。……何なんだこれは？

「くっくっくっ…… あっはっはっはっは!!」

「テメエ！何しやがった!!」

「呪術「黒鎖封印」。これは、貴方を苦しめるでしょ。今回は引きませんが、次こそ幻想郷を開放させていただきます。では、ご機嫌よお。」
「待てえ!!」

俺の静止を聞かずに 그레이・スモークは、煙となって消え失せた。こうして、異変は俺の右手首に奇妙な痣を残して終了した。

第八章 現世復帰編
第八十一話 今の力

「で、何かわかった？ゆかりん」

「ゆかりん言わないで。呪術の類だと思っけど……… どんな効力かまでは………」

紫も分かんないじゃ完全に手ずまりだな。本当になんなんだろうな、コレ。俺は、右手首の痣を見る。この前の異変、黒煙異変の首謀者グレイ・スモークによってかけられた呪い。どんな呪いなのか………

「アンタの能力で解除出来ないの？」

「あつ、その手があったか」

「気づいていなかったのぜ!？」

く
いやー、自分の能力の事なのにすっかり忘れてたぜ。では、さっそ

「アヒリティキャンセル
能力解除」

しかし、何も起こらない。

「あれ？おかしいな……… もう一回やるか。能力解除」
アヒリティキャンセル

しかし何も起こらない。

「何故だああああ!!」

「霊夢さん、どうしましょう」

「私には関係ないわ」

霊夢さん、あなた結構酷い人ですね。それにしても、能力が封印されたのかな…… 試してみるか。

「魔理沙」

「ん？なんだけ？」

「弾幕ごっこしないか？」



「それじゃ、行くぜ」

「おう」

能力は、何が使えるか何が使えないかを見るために魔理沙を実験相手にすることにした。魔理沙の方はやる気満々のようだ。ちよつと、怖い。

「それじゃ、行くぞ！基礎能力アップ（攻）（守）（速）」
パラメーター
アタック
プロテクト
スピード

移動速度が上がる。どうやら基礎能力アップは、問題ないみたいだな…… よし、レベルを上げてみるか…… あれっ？レベルを2、3と上げようとしたが上がらないのだ。おつかしいなー

「どうした？ぶつぶつ呟いて、よそ見してたら怪我するぜ！魔符「スターダストレヴアリエ」!!」

「つつ!?能力解除…… だあ！くつそ!!」
アビリティキャンセル

魔理沙がスペルを発動し、無数の星が降ってくる。能力解除で解除しようとしたが発動せず無数の星が降り注いでくる。本当に何なんだよ！あつ、やべえな。よけきれないわ、コレ

「お願いだから発動してくれ！能力停止」
アビリティテストツプ

俺の必死の思いが通じたのか、元々使えたのか分からないが、無数の星は空中で停止した。

危なかったー、死ぬかと思ったわ。…… あっ、この星甘い。金平糖みたいだな……

スペルの外まで避難し能力を解く。向こうで魔理沙が卑怯だーつて叫んでるけど、気にしない気にしない。

さてと、やった感じでは上位技が使えなくなってるな。

上げていくなら、まず基礎能力アップのレベルアップにライトニング

リフレクション

デストロイ

パラメーター

アビリティキャンセル

（反射）（破壊）が使えない。あと、能力解除も使えないな……

あっ、あつちはどうだろう。

「獣符「獣の腕」」
クワイチャーハンズ

足元の影が浮上がり右手に巻き付き、黒くゴツゴツし、赤い爪を持つ手に変化する。妖力こっちは、無事みたいだな。

（久しぶり、拓也お兄ちゃん）

「おっ、もしかして闇か？」

（そうだよ。もう、酷いよ、私のこと忘れてたでしょ？）

「……わ、忘れてないよ？」

（あーっ！今の間はなに？）

「気にするな」

（気にするよ！）

「そんな事より、力が抑えられたりして無いか？」

（そんな事って…… うん、特になんともないよ）

「そっか、わかった。闇ひと暴れするぞ」

（おー!!）

右手に力を込めて魔理沙に接近し拳を突き出す。しかし、するりとかわされ地面にぶつかる。地面に大きなクレーターを作り出す。

「なっ!?何なんだぜ、その力!?!」

〔妖力〕

「妖力!?ちよつと、紫!あの神様なんで妖力まで持ってんのよ」

「そういえば持ってたわね。昔のこと過ぎて忘れてたわ」

「ハハハハ、お兄ちゃんどんどん人間離れしてるな……………」

「これは、まずいな…………… いつきに決めるぜ!恋符「マスタースパーク」!!」

魔理沙がスペルを発動し、七色のレーザーが飛ぶ。

「陰符「シャドーブラスト」」

こちらにも負けずとスペルを発動。黒い影がレーザーのように放出される。

そして、七色の光と黒い影衝突した……………



「いててて!」

「あっ!、魔理沙さん動かないでください!」

「くっそく、行けると思っただけどな……………」

「若いもんには、まだ負けん」

「アンタのお爺さんみたね」

今は、博麗神社で怪我の治療をしている。まあ、結果だけ言えば俺の勝ちだ。結構ヒヤヒヤしたけどな…………… まあ、そのおかげで能力の状況もだいぶ分かった。

取り敢えず、神力が全て抑えこまれてる。これによって神になって

からできるようになった事が出来なくなっている。それに、前よりも
霊力も低下しているところから『能力を操る程度の能力』の力が低下
していた。特に問題なのは能力模倣アペリテイコピーだ。なんで、3分しかコピーが持
たないの？弱体化しすぎだろ！

「そう言えば、神力が無いならあんたは人ってこと？」

「えっ？えく、どうなの紫」

「そうね、厳密にはちよつと違うけど、ほぼ人と言っていいたいと思うわ」

マジかく、神から人へランクダウンか……

「ねえ、師匠」

「ん？」

「元の世界に戻らない？」

「……へ？」

どうやら、まだ何かあるようだ……………

第八十二話 帰宅②

「ねえ、師匠」

「ん？」

「元の世界に戻らない？」

「……へ？」

元の世界？…どういうこと？

「元々、師匠は幻想郷の外の住人なんでしょ？」

「まあ、そうだな」

「なら、ほぼ人間に戻った今なら戻っても問題はないかと思うんだけど」

「いや、それ以外に問題あるだろ。向こうじゃ俺は、死んだことになってるはずだし」

「え？お兄ちゃんは、行方不明扱いだよ」

「えっ？そうなの？」

「そうなの」

まじか…… どうなってるんだ？まあ、いいか。みんな元気かな？

あつちは、たいして時間は、たってないんだけど。

「じゃあ、1回帰ってみるか。アビリティコピー能力模倣模倣対象ド「紫」」

紫の能力をコピーし、境界を開く準備をする。

「なっ、ちよつと待つぜ！」

「うん？何だよ魔理沙。3分しかないから急げ」

「いや、もう行っちゃうのかと思って。もう少しゆっくりして行って

ももいいのに」

「あんた寂しいだけでしょ」

「う、うるさいんだぜ！霊夢は黙ってくれ！」

「うーん。善は急げって、ことわざがあるしな。それにもう会えない訳でもないしき、また暇なときに来るさ」

「うう、わかったぜ」

「それじゃ、世話になったな」

「皆さん、お世話になりました」

軽く挨拶をし境界を開く。空中に空いた不自然な隙間に俺たちは、歩を進めた……



「家に帰って、キターー!!」

「お兄ちゃん、うるさい。近所迷惑だよ」

うう、久しぶり帰ってきたんだから、これぐらいのテンション許して欲しいな

「そう言えば、俺が行方不明になってから、どれだけ経ったの？」

「えつと、だいたい一ヶ月と少しぐらい」

「じゃあ、俺が居なくなっただのが三月終わりだったから、今は五月ぐらいか」

あゝ、出席日数やばいかもな……先生、プリントでどうにかしてくれないかな……

「ちなみに、今はゴールデンウィーク中です。あつ、もう今日で終わり

だった」

「なん、だと……」

!!
じゃあ、明日から学校行かないといけないうと。嫌だ行きたくない

「それよりも、お兄ちゃん。髪の毛切らないの？」

「えっ？あつ、あゝ、切らなくていいわ」

陽菜が伸びきった俺の髪を指摘してくるが、別にうちの学校は別段そういうのに厳しい訳でもないし、長いことこんな感じだったからな
いと落ち着かなくなる……と思う。まあ、ゴムで纏めるだけ纏めと
くかな

「明日も早いし、今日は早めに寝よっか」

「えっ、嫌だよ。溜まったアニメを消化しないといけないうし」

「お、に、い、ちや、ん？」

「怖っ！分かった、分かったからその黒いオーラをしまつてくれ」

仕方ない。夜中にこっそり見るか……

この後、アニメを見てるのを見つかって説教を喰らいました。正座
で2時間ほどね。足が痛いよ……

第八十三話 学校へ行こう

学校。それは、同学年の生徒と共に様々な知識を学び、コミュニケーションをとり友情など育むための施設の施設である。現代の社会では、学校での成績や出身校がその人の価値スベックとなる。

そんな、現代の社会に俺は言いたい……………

「滅びろ!!」

「止めてよ、本当に滅ぼしかねないから」

朝。今日から、数ヶ月遅れて高校に入ることになる。その為に少し早く学校に行かなければならない。しかし

「遅刻だああああ!!」

昨日の夜更かし&説教のせいで完全に寝過ぎした!ヤバイ、ヤバイ残り5分という間合うか微妙な時間だが俺の身体能力ならなんとかなるかもしれない。

食パンを加えてダッシュする俺。きつと次の曲がり角で俺のラブコメのヒロインとぶつかるんだ!えっ?ぶつからない?知ってた(。・ω・。)



「で?登校初日から遅刻した理由を聞こうか?」

只今、天童拓也は職員室にいます。そこで、遅刻した事をスーツをピシッと着て眼鏡をかけた女の先生に怒られています。怖い。

「まって下さい先生！これには山よりも高く、海より深い理由がありまして」

「ほう、ではその理由を聞こうか」

「実は、食パンを食わえて、遅刻といいながら走ればヒロインぶつからないかなって思ってたなら、車とぶつかりまして……」

「成程、事故にあつて遅れたと」

「はい、分かっていたただけでしょ」ただし、遅刻したことに違いはないな？」「ちよ！先生！！俺の関節きまつてる！きまつてますって！！俺の関節はそちら側には行きませんから！！」

何この人!?力入れても振りほどけないんだけど！化け物なの？化け物だろ（確信）。てか、事故にあつたことはスルーかよ！そういえば、あの車物凄く高そうだったな。凹ましちやっただど……

「まあまあ、水戸先生そのへんにして」

「……わかりました、神薙先生」

現れたまたもや女の先生の言葉により水戸先生腕お化けから開放される。
神薙先生マジ女神（確信）。

「あなたの担任の神薙巫月かななぎみつきよ。よろしくね天童君」

「よろしく願います」



「はい、みんな今日から遅れてこのクラスの仲間になる子を紹介します」

神薙先生のいきなりの言葉で教室内がざわつく。

「それじゃ入って来て」

「はっ、はいっ！初めまして、天童です。よろしくお願いします」

クラス中から歓声と拍手が飛ぶ。明るい感じだな、これならやっ
て行けそうだな。

「はい、はい！先生！」

「あら？どうしたの楠君」

楠と呼ばれた少し赤みがかった髪の毛のガタイのいい少年が手
を上げる。

「なんで、その子は女なのに男子用の制服着てるんですか？」

クラス中から、「あっ！」や「本当だ」みたいな声が飛び交う。確
かに俺は顔が中性的だし髪も長いだが、しかしな……

「俺は、男だああああ!!!」

この声は学校中に響いたらしい。



「俺は、男だああああ!!!」

その叫び声で私は、目を覚ました。今やっていることは……な
んだっただけ？昨日も拓也のことを考えていてよく眠れなかったせい
でまだ眠い。しかしその眠気は、一気に吹き飛ぶことになる。目の前
にいるのだ、天童拓也が。

えっ!? なっ、なんで!? 脳の理解が追いつかず混乱する。そして、同

時に声をあげてしまった。

「拓也ああああ!!!」

「へっ!? あっー!、言音ええええ!!!」

消えたはずの幼なじみが突然現れたのだった……………

第八十四話 帰り道

終わったああああああ!!

チャイムとともにS H Rが終了し先生が教室から出ていく。俺は欠伸をしながら体を伸ばす。ここ数年じつと座っている事が無かったので体が凝り固まって仕方がない。

「拓也く帰ろうぜく」

今日、仲良くなった男子の楠陸斗くすのきりくとが、声を掛けてくる。少し赤ぼつた茶髪になんとも羨ましい身長、そして帰宅部(らしい)なのに以上に発達し付いている筋肉。何でそんなムキムキマン何だよ! 普段はガタイがいいな程度にしか思ってたけど体育の着替えの時びっくりしたわ。

特に断わる理由がなかったので承諾し一緒に玄関へ向かった。



話しているとなんと、楠と俺の家が案外近所という事が判明しほぼ一緒の方向で帰る。それにしても……言音の視線がいたい、後ろから付けてきてるんだよな。今日、朝からずつと見られているんだよなあ、何なの? 俺のこと好きなの? えっ? それは無い? 知ってた。

「そーいや、拓也は化野と仲いいの?」

不意に楠が質問を投げかけてくる。朝の事があるから知り合いなのは間違いと見られているはずだからそれについて聞いているのだろうか。だが別に仲がいいかと聞かれると、それもどうだろうと思う。

「いや、別に特別良くはない。ただの幼馴染だ」

そういった瞬間、バキバキと音が聞こえた。気のせいだよな？

化野言音さん？さつきより目が怖いのですが…あとその隠れている電信柱が少し欠けているように見えるのは私めの見間違いでしょうか？女の子にそんな力無いもんね。あつ、でも霊夢とか出来そうだな…

というか、何か言いたいことあるならこっち来いよ！無言の圧力やめて！怖いよっ！誰か助けてっ！

「あつ、お兄ちゃん」

「ん？あつ、陽菜」

マイエンジェル降臨!!陽菜に言音をどうにかしてもらおう

「陽菜、あそこに言音いるだろ」

「居るねえ、凄い形相でこっち見てるよ。お兄ちゃん、押し倒したりでましたの？」

「してねえよ!!何言い出すんだお前は!」

「冗談だよ、お兄ちゃん。つまりお兄ちゃんは、言音さんをどうにかして欲しいんでしょう?任せておいて」

これで言音はどうにかなるな。ありがとう陽菜。家に帰ったらお前の大好物を作ってやる。確か大好物は筑前煮だったけ?なんか渋いな…

「なあ拓也、あの子って…」

「陽菜か?俺の妹だ」

「お兄さん!妹さんをください!!」

「誰がお兄さんだ!!それと妹は、やらん!!!」

こうして学校生活一日目は終了した。

第八十五話 手紙

どうも、天童拓也です。

皆さんは、どんな手紙をもらったことがありますか？

遠くの友達とのやり取りで？年賀状で？それともお礼状で？

さて、私めの下駄箱に手紙が入っていました。これは、なんと
手紙でしょうか？

「それって、ラブレターじゃねえ？」

「うおっしやあああああ!!」

ラブレター、それは男子の憧れ。何コレめっちゃ嬉しい。

「転校して一週間でラブレターとか拓也も隅に置けないな。いいな、俺も彼女欲しい。という訳で妹さんを俺に下さい、お兄さん！」

「という訳でって、どういう訳だよ！何度も言うが妹はやらん!!というか、まだ諦めてなかったのかよ」

「あきらめが悪いのが俺だからな。その手紙見せてくれよ」

「うん？ああ、いいけど」

手紙は、天童拓也さんへと書かれた封筒に入っていた。

手紙の内容はこうだ

『天童拓也さんへ』

お話したいことがあります。もしよろしければ、放課後5時に屋上へ来てください。お待ちしております。』

名前が書いてないから誰から送られてきたか分からないがめっちゃくちや綺麗な字だな。てか、めっちゃ達筆だな。でも、何かこの字、見たことあるんだよな

にしても、どんな子だろうな……可愛い子だったら嬉しいな。

そしたら、今日から俺はリア充だ!!
彼女……彼女かあ……

「彼女かあ……いいな……」

「そうだな」

「可愛い子だったらいいな」

「そうだな」

「昨日の宿題難しかったな」

「そうだな」

「妹さんを俺にくれるんだな」

「そうだ、って騙されるか!!」

「くっそお！惜しい!!」

「惜しくねえよ!!」

あぶねえ……流れに流されるところだった……

「でもさあ、これって本当にラブレターなのか？」

「楠、何いってんだよ。ラブレターの定番の書き方じゃねえか」

「いや、でも……普通、封筒を閉じるのにドクロのシール使うか？普通は、ハートとかじゃねえ？」

確かに……

いや、希望を捨てたちゃダメだ!!諦めるな！俺!!



↓放課後↓

4時30分

早く来すぎた……

落ち着け、落ち着け。男、天童拓也!!ここで逃げたら意味無いぞ!!
ああ、本当に来るのかなあ？なんか罰ゲームとかで送ったのかな

しにしてくれよ。

そう葛藤していると、屋上の扉が音をたてながら開かれた。

来た!!

そう思い、扉の方を向いた。

そして、目が合った。化野言音と。

「良く来たわね、拓也」

「……」

「ちよつと待ちなさい!何フェンス越えて逃げようとしているの?危ないから登るのやめなさい!!」

「い、いや。べべべ別に、にににに逃げよう何て」

「動揺しすぎよ!!」

だって、コイツは俺が死んだの見てるじゃん!明らかに俺の存在不自然じゃん!!

説明出来ねえよ!出来ても信じてもらえねえよ!

「単刀直入に言うわ。あなた、本当に拓也なの?」

「そうだよ」

「嘘!拓也はあの日に消えた!!」

やっぱり、そうなりますよね……

「消えてねえよ。だからここに居る」

「じゃ、なんでこの一ヶ月学校に来なかったの?」

「そ、それは……」

「ほら答えられないじゃない。この一ヶ月家にも居なかったみたいじゃない。陽菜ちゃんもすっごく心配してた。私も……。答えて、貴方は本当に拓也なの?」

真実を全て話すべきか俺は迷った。だが、陽菜を巻き込んでしまった。これ以上人に迷惑はかけれない。

「ああ、確かに俺はあの日トラックに轢かれて消えた。だが、俺は天童拓也だ。誰がなんと言おうと俺は、俺だ。」

「じゃ、消えた理由を答えてよ」

「無理だ。お前を巻き込みたくない」

「どうしてもダメなの？」

「ダメだ」

「……………」

「……………」

少しの間、沈黙が続く。

「分かったわ」

「いいのか？」

「拓也の事だから何かあるんでしょ？ならこれ以上聞かないわ」「すまんな」

「その代わり、近くの喫茶店の新作ケーキ奢りなさい」

「はあ？何でそうなるんだよ!!」

「陽菜ちゃんと楠君も誘おう。勿論拓也の奢りね」

「ちよつと！待って！」

こうして、俺の財布の野口さんが数人消えたのであった……………

第八十六話 勉強そして、テスト

「勉強を教えてください」

7月中旬

少しづつ夏らしく暑くなってきた日だった。

俺は幼馴染の化野言音にそう頼む。

ハッキリ言って勉強は苦手ではない(英語以外)。それこそ、そこそこ上の方のレベルであると自負している(英語以外)。

しかし、俺は1ヶ月ほど学校に来ていなかったことになっている為、基礎がほとんど出来ていない。基礎が出来ていなければ、勿論応用なんて出来るわけがない。

なのにテストがあと2週間後に控えているのだ。

赤点を採った生徒は夏休みに補修に来ないといけならしい。それだけは勘弁して欲しい。夏休みに遊べないなんて死んでしまします。

「いいけど。私、文系しかみれないよ?」

あつ、そうでした。この子、文系の科目は学年一桁に入るくせに理系はてんでダメな子だったわ……

「それでもいいので!・ぜひ!!」

「じゃあ、放課後にあんたの家に集合ね。あつ、私の友達もつれて来ていっしょ!」

「いっしょ!」

よおろし。頑張るぞい!!!



「ただま〜」

「おかえり〜」

家に帰ると陽菜がテレビに視線を向けたまま返事をしてきた。

「今日うちで勉強会するから」

「えっ？お兄ちゃんが勉強？……………熱でもあるの？」

「失礼だな、おい！」

確かにいつも全然して無いからしょうがないか……………

数分して言音達が家に来た。

「「お邪魔します」」

友達って、海堂の事だったのか。

海堂蘭、俺の同級生でクラスメイトの一人である。長い髪をポニーテールにしており、胸は言音よりも数段デカイ……………うむ、けしからんな!!（歓喜）

まあ、言音はほとんど無いようなもんだけど……………

「今何か変なこと考えなかった？」

「いえ、何も考えておりません!!」

一瞬、絶対零度の視線を向けられ冷やっとしたが何とかごまかせたようだ。

「いや〜ゴメンね。私まで押し掛けちゃって」

「いや、別に構わないぞ。それじゃ、勉強会を始めますか」



カリカリカリとペンが走る音が止まる。

「ダメだ！分からん!!」

「早っ！まだ、10分しか経ってないわよ!?!」

「私もダメえ〜」

「蘭まで!?!」

もう分かりません。英語なんて出来ません。

I can't English.

「だいたい、俺たちは何故英語なんてやってるんだ！日本人には日本語という素晴らしい言語があるじゃないか!!」

「そうだそうだ!」

「屁理屈いわないの!!2人とも楠君を見習なさい!」

「えっ?うおお!!お前いつから居た!?!」

横を見ると、勝手にベッドに寝転がって勉強をしている楠がいた。

「えっ?最初からいたけど?」

「まじか、全然気づかなかった」

コイツは忍びか何かか?

この後何やかんや騒ぎ、勉強会は終わった。



テスト点発表日

天童拓也

58位

国68 数76 英35 理95 社92

「うおっしやあああああ!!!赤点なし!!」

何とかピンチを切り抜けれた。助かったあ。

「何とかなったみたいね」

「お蔭さまでね、言音は？」

化野言音

28位

国98 数58 英99 理64 社96

「お前ホントに理系を頑張れよ！」

「私が1番分かっているわよ！」

コイツ、理系出来たら本当に1位とか目指せるんじゃないかな？

「おっ！二人共どうだった？」

「何とかなったぞ」

「私もよ」

「海堂は？」

海堂蘭

101位

国100 数31 英32 理34 社33

「国語100点!?!」

「ふっふくん、どや！凄いでしょ」

「まあ、それ以外が残念すぎるが……………」

「それは言わない約束でしょ！」

むくつと海堂がむくれる。にしても100点って取れるもんなんだな。初めて見たわ。

「そう言えば、楠君ってどうだったのかしら？」

「あつ！それ私も気になる！私と同族だったりして」

「じゃあ、楠に聞いてみようぜ」



「テストの点数？別に見せてもいいが面白くないぞ？」

「勿体ぶらずに見せてくれよ」

「まあ、いいけど」

楠陸斗

1位

国100 数100 英100 理100 社100

「「……………おう」」

全員して言葉を失った。これは何かのネタかな？

「ひどい、楠はこっち側だと思ったのに！」

海堂が、叫び。

「まさか、あの楠君が……………」

言音がボソボソと独り言を呟き始めた。

そりゃ、そうなるわな。

ほんと人生何があるかわからないな.....

第九章 紅魔編

第八十七話 暑い日、赤い霧

夏休み。それは学生達の最高の時間である。

学生達は、友達との友情を深めたり、恋をしようとしたりとそれぞれのやり方で夏休みを楽しもうとするはずだ。

そんな中、天童拓也と言うと……………

「あつい」

「そうね」

縁側で妹と巫女さんとダラくつとしていた。

ミーン、ミーンとセミがやかましく鳴くこの季節。俺と陽菜は博麗神社に訪れていた。

理由はエアコンが故障した。

なんでこの時期なんだよ！冬でも困るけどさ！

とにかく、あんな暑い空間にいたら死んでしまいそうだったので、山奥である？ここに来ている。山奥って妙に涼しいからな。

ただ、暑いのは変わらない。陽菜なんてさつきから一言も喋ってない。ただ、ダラくつとしていて、そのうち溶けてスライムになりそうだ。後で固めておかないとな……………

霊夢は相変わらず涼しそうな格好をしている。あれ？冬でもあんな感じだったよな？寒くないのか？

「来るのはいいけど、ちゃんとお賽銭入れて行ってよね」

「やだよ。神様がいない神社なんてお参りするだけ無駄だろ？」

「誰のせいだと思ってるのよ！ねえ、二元神様？」

俺のせいじゃねえよ！恨むなら、あの煙の執事野郎に言えよ!!
だいたい、元々参拝客少ないだろう！立地も悪すぎるんだよ。なんでこんな所に立てたんだよ！あつ、村を守るためにしたんだっけ？

博麗神社について考えていると頭が回ってきていないのがわかった。暑さでついに脳がショートしたか？だんだん意識が遠くなつていくのを感じる。

ああ、涼しくならないかな……………

そんな事を思いながら、俺はそのまま眠りについた。



「寒っ!!」

異様な寒さで目が覚めた。あれ？今夏だよな？幻想郷って季節まででたらめなの？

しかし、それは違った。空一面に紅い霧がかかっていたのだ。紅い霧が日光を完全に遮断してしまい温度が下がったのだ。

「さすが幻想郷。常識に囚われないな」

「これが普通のわけないでしょ？」

「つまり？」

”異変”よ」

岩雨異変や黒煙異変が脳裏に浮かぶ。本当にみんな異変好きだな。

まあ、博麗の巫女の霊夢がみんなのため異変を解決してくれるだろう。

「はあく。これじゃあ洗濯が乾かないじゃないの。仕方ない異変の首謀者をしばきに行ってくるわ」

自分の為でした。知ってましたよ、霊夢がこういう奴だって。

「それじゃあ、行ってくるから留守番よろしく」

「別に盗むようなものないだろ？」

俺のポケを無視して霊夢は紅い霧の向こうに消えていった。

さてと、俺も……………

お腹減ったし飯でも食べるか。

第八十八話 紅い館に侵入したら閉じ込められた
件

「それで？お兄ちゃんは、霊夢さんが異変解決に向かったのに呑気におにぎりを食べていたの？」

天童拓也は、ただ今妹である天童陽菜に正座をさせられています。理由は異変解決に向かわなかったことである。

「呑気にとは何だ！食事は大切だぞ！腹が減っては戦は出来ぬと昔の人は・・・「黙らっしゃい」はい」

何か、陽菜が最近たくましく見えるよ。幻想郷でのことが（悪）影響になってるのかな？

「とにかく、お兄ちゃんは一刻も早く霊夢さんのところに行くこと！」「ういゝ」

「返事は、ハイかYesですること！」

それももう拒否権ないじゃん。



ただ今、空を飛んでいます。

霧が出ている（ぽい）方へ飛んでいると、何やら前方から黒い球体が飛んできた。

「わはー」

俺はその黒い球体を……………

躲してスルーした。
さて、こっちで合ってるのか？



しばらく飛ぶと、でっかい紅色の屋敷が見えた。あんな場所に建物
あつたけ？

そつと、屋敷の近くに降りた。周りに人はいなさそうだ。

それよりも、この屋敷から紅い霧がガンガン出てきてるんですけど
！まさか、ここだったとは……………
勘で飛んできただけなだけだな。

とりあえず、どっかに入れる場所がないか探す。

ひと昔前なら、正面から突っ込んで行ったが今は流石にそんな事は
しない。俺のモットーは「いのちだいじに」だからな。

しばらく探していると小さな小窓を見つけた。とりあえず、あそこ

から侵入は出来そうだ。

空を飛び小窓から屋敷の中に入る。すると、小窓が消えた。

あれ？これもしかしくなくても閉じ込められたんじゃねえ？うそだろ？

何度も何度も確認するが、小窓のあとは見つからない。

ほんと出来心だったんです！許してください！！

誰に誤っているかわからないと思うが、俺も分からん。とりあえず逃げ道がなくなつたことだけは分かった。

その場所は諦め、ほかの出口を探すことにした。

この紅い屋敷は、中も”紅”の一言だった。極端に窓が少なく、屋敷の中には多くの炎で照らされていた。壁も、床のカーペットも、天井に至るまで”紅”だった。

この屋敷に住んでいるやつ絶対趣味悪い。そんな気がしたのは気のせいではないだろう。

しばらく歩いているとあるものを見つけた。

「なんだここの？地下への道？」

紅い屋敷にぼつんとそれはあった。コンクリートのような、ねずみ色の壁と階段が地下へ続いていた。

闇の中に続く階段をゆつくりと下つていった。

しばらくすると、金属の扉で閉じられた部屋があった。

ドワノブに手をかけ、ゆつくりと扉を開く。

ギギギギと重々しい音をたてながら扉は開いた。

そこには、少女がいた。

紅い瞳に輝く金の髪、左右に宝石のような羽を持つ少女だった。

少女は、こちらを向き無邪気な笑顔で言った。

「アナタが新しい遊び相手？」

狂気に満ちたその笑顔で……………

第八十九話 狂気

「アナタが新しい遊び相手？」

紅い目の少女の問に対して俺は……

「いいえ、違います」

即座に否定した。

だって、オモチャにされたら、たまないし。ここは、逃げる一択だ。

「では、俺はこれで——」

「逃がさないよ♪」

「ですよね〜」

逃げようとした俺を紅い目の少女は追いかけてきた。

ちよ!!速い!!

扉を蹴飛ばし階段を駆け上がる。

ふと、後ろをみると少女が手を突き出していた。

「きゅとして〜」

ぞくつと嫌な感じがした。生命の危険を感じ地面を全力で蹴る。

「どかーん!!」

少女が掛け声に合わせて手を握ると、さっきまで俺が立っていた場所の床が粉碎した。床だった物が周りに飛び散る。

なに!なに?なに!!なに!?

床が消し飛んだんだけど!!危なっ!!殺す気満々じゃん!!

天童拓也、死にたくなければ、とにかく逃げろ!!
後ろからは少女が笑いながら弾幕を放っていた。

「アハハハハ!! 凄い凄い!! こんなに壊れないオモチャなんて初めて!! これならいっぱい壊せるね♪」

「だから、俺はオモチャじゃなくいい!!」

「アハハハハハハ!!」

「はい、無視ですか!!」

全然、話を聞いてくれない。

こうなりや反撃だ!!

「パラメーター基礎能力アップ (攻)アタック (守)プロテクト (速)スピード」

影から村正抜き取り振るう。その攻撃はひよいと躲される。
くっそ!! 速い、当たらない。

「アハハハハ!! 急に速くなった、凄い凄い♪」

相変わらず少女は笑っている。見てくれは可愛いけどそれは恐怖でしかない。

「禁忌「レーヴァテイン」」

彼女の手には黒色のぐにやりと曲がった物があり、それは次の瞬間激しく燃え火焰の剣になった。

「そくれく♪ 壊れちゃえ♪」

「つつー! 熱っ!!」

火焰の剣が腕を掠り傷みが走る。アレをまともに受けたら炭も残

らないな……

はあはあ。ヤバい、追いつかれそうだな……ん？

視界の先にメイド服の女の人が壁にもたれ掛かっていた。このままいくと確実に巻き込まれる。こうなったら……

「チェンジ パワー スピード
変更(力)(速)」

スピードに特化させ距離を開ける。そのままメイド服の女の人に向かっていく。

メイドさんに近付いてからお姫様抱っこで拾い上げ、また走り出す。

「なっ!? 貴方は何よ!!」

「説明は後で、今はあれから逃げないと!!」

「あれって——妹様!？」

どうやらあの女の子と知り合いのようだ。にしてもこのメイドさんボロボロだな……。どうしたんだろ？

「とりあえず一旦逃げ切りたい。あんたこのメイドだろ？ 道案内頼む!! このままじゃ二人揃ってお陀仏だ」

「……わかったわ」

「俺は天童拓也。あんたは?」

「十六夜咲夜よ」

途中で拾ったメイドさん、十六夜咲夜との逃走が始まった。

第九十話 助けを求める・・・

「はあはあ。やっと撒けた。これで安心——」

「動かないで」

「——じゃなかった」

メイドさん。名前はえつと・・・咲夜さんだったっけ？

そのメイドさんに刃物を突きつけられています。

「貴方は何でここにいるの?」

「妹に異変解決に行けと言われ嫌々来ました。拒否権はありませんでした」

「兄としてのプライドはないの?」

「そんな物、命に比べれば捨てるのは容易だ。とりあえず今は協力しましょう」

咲夜さんはナイフを溜息をつきながら話してくれた。

溜息をつかれるような事なんか言っただけ?

「まずは、あの女の子について教えてくれる?」

「あの方はフランドール・スカーレット様。この館の主であるレミリア・スカーレット様の妹よ」

「へえ。そのレミリアって若いのか?」

「いいえ。吸血鬼ですもの、もう500歳はこえているわ」

「なんだ、(俺に比べれば)全然若いじゃん」

「へ?」

「へ?」

あれ?何か変な事言った?

「まあいいわ。他には?」

「フランドール……長いな。フランは、何であんなふうになっているんだ？」

「妹様はお嬢様に長年あの地下室に閉じ込められていました」

「何それ？嫌がらせ？二人は仲が悪かったの？」

「いいえ。お二人共とても仲が良かったと聞いています」

「じゃあ、何？放置プレイ？」

「真面目に聞きなさい」

ものすごい目付きで睨まれナイフも飛んできた。すみません。

「妹様の能力が危険だったからよ。」「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力」。妹様はまだ制御が出来ずとても危険だったの。だからお嬢様は大切なものを壊してしまう前に妹様を軟禁したの——」

そこまで話したところで隣の壁が爆散した。

そこにはフランドール・スカーレットが笑顔でたっていた。

「みいっつけた♪」

「ありや、隠れんぼはもう終わりか」

「呑気な事言っでないで！」

いや、呑気な事言っでないよこのプレッシャーに耐えられないのよ。

「アハハハ♪お姉様、大嫌いなお姉様♪壊してあげる♪何度も何度も壊してあげる♪」

「おい、メイド。本当に仲良かったのか？なんか凄く恨んでいる感じするんだけど……」

「そのはずよ！パチュリー様もそうおっしやっていたし」

「アハハハ、お姉様壊れちゃえ♪」

フランはまるで俺を姉と見立てて攻撃をしてくる。

にしても、この恨み方は半端じゃ無い。俺も陽菜とはケンカぐらいするがここまで恨んだことは無い。

フランはレミリアって言う姉が大好きだった筈だ。大好きだけど恨んでいる。何とも矛盾した思いだ。

「咲夜は逃げて誰でも良いから止められる奴を連れてこい!!その間俺が何とかする」

「わかったわ。死んだら骨は拾ってあげる」

「死なないように頑張るよ。鈴符「降り注ぐ刃レイン・ナイフ（銀バージョン）」」

吸血鬼に有効と言われる銀でナイフを作り攻撃する。

「アハハハハハ♪」

が、全て破壊される。

「嘘だろ……」

「いい加減壊れてよ。禁忌「フォーオブアカインド」」

フランがスペルを発動すると、フランドールが4人になった。

「ちよ!!4人って無理ゲーだろ」

「「アハハハハハ♪」」

4人つてのフランが次々と襲いかかってくる。一撃一撃が強力で、遂には吹き飛ばされ壁に叩きつけられ床に倒れる。

「リ、回復能力アップ」

回復を試みるが体力はほぼ限界。焼け石にだった。4人のフランが一つにまとまり俺の上に降りた。

「じゃあね、お姉様♪」

そう言つて、俺の胸を貫いた。

ああ、死ぬのか俺はそんな事を朦朧と考えていた。

その時だった、顔に水が落ちた。

涙だった。フランドールが涙を流していたのだ。

「ああ・・・いやあ・・・」

消えそうな声で呟いていた。この時、俺は確信したフランドールはレミリアを好いていた。大好きだった。大好きだが恨んでいた。

だから、恨みなどのマイナスの感情を晴らす為に物を壊していた。レミリアに見立てて。

それが、またストレスになりフランドールを追い込んでいたのだと。

おい、天童拓也。目の前で女の子が泣いてるぞ。救つてやるのがお前の役目だろ。

そう、自分に言い聞かせるが俺の意識は闇に飲まれた。

第九十一話 妖化

「起きろ、おにいちゃん」

「ぐへえ!! あ、あれ? 闇」

「やつと、起きたか」

闇がいるという事はここは精神空間という事になる。

「あつ、フランは?」

「大丈夫、まだ向こうでは1秒も経っていないから」

凄いな精神空間

「それよりも、おにいちゃん。このままでいいの?」

「いい訳ねえだろ。だけど、昔みたいに俺は大した力がない。そんな俺がアイツを救えるのか……」

「おにいちゃんはフランちゃんを助けたい?」

「そりゃあ、もちろん」

「なら、これをあげる」

闇に一枚のカードを渡される。真っ黒のカードだ。

「私が力になるよ」



目を開き俺はゆっくりと立ち上がる。前には驚いた表情のフランがいた。

「なんで、なんで立ってられるの?」

「フラン。お前はお姉ちゃんが大好きなんだな」

「そんな訳無い。お姉様は私を閉じ込めた、だから―」

「じゃあ、なんで泣いているんだ」

「つつ!!」

「大好きなお姉ちゃんを壊したと思ったんだろ？大好きだけど恨んでいるお姉ちゃんを」

「うる・・・さい・・・」

「なら、お姉ちゃんにいつてやれよ！一緒に遊びたいって、一緒に居たいって!!」

「もう、やめて!!」

フランは火焰の剣を振るうがそれは黒色の影に阻まれた。

「お前もお前のお姉ちゃんも本当に不器用だな。大好きだけど傷つけ、守りたいのに傷つける。しっかりと向き合えばこんなことにならなかったのにな」

「ああああああああ!!」

「仲直りの手伝いはしてやるが今はお前を止めさせてもらうぜ」

俺は闇からもらった漆黒のカードを懐から取り出した。

「妖化「解放妖」」

瞬間、足下の影が俺を包み込んだ。

そして、影がはじけ飛び中からは私が現れた。

真っ赤な目に腰まで伸びた漆黒の髪。女性特有の膨らんだ胸にくびれが出来ていた。

「ん？なんじゃこりや!？」

『私の力を全部解放したんだよ』

「でも、女になるなんて」

『まあ、元からそんな感じの顔してるからいいじゃん』

「さらっと、傷口をえぐるな!!」って、おわっ!!」

闇と会話をしていると、フランに攻撃をされる。

「闇、行くぞ!!」

『うん』

俺はフランに向かって斬り掛かる。ほぼ妖怪化したことによりスピードが上がる。

「っっ!!速い」

「影符シャドールエッジ「影の刃」」

「禁忌「レーバティン」」

火焰の剣と漆黒の剣がぶつかり合う。漆黒の剣が火焰の剣を受け止めながら形を変えてフランを襲う。

「くっ!!禁忌「フォーオブアカインド」」

「逃がさない。影符「影の迎え手」」

フランが4人に分身するが影の手によってすべて捕まえる。

「「何これ!?!」」

「これで少し頭を冷やせ。陰符「シャドーブラスト」」

紅の館は黒に包まれた。

第九十二話 お兄様!?

「う、うくん」

あれ？私は何をしてたんだっけ。私、フランドールは廊下で目を覚ました。

なんか、頭の下が妙に柔らかくそ、のままもう一度寝てしまいそう
だ。

「ん？やつと起きたか」

「!!」

声を掛けれ意識を覚醒し自分の状況を把握する。
膝枕だ。黒髪のお姉さんに膝枕されているのだ。

私は、慌てて起き上がり距離を取る。

「そんなに、警戒しなくていいよ」

その人は、いや人なのか分からないが、さつきまで私と戦っていた
人だ。

途中で変な変化をしたけど……

「その……ごめんなさい」

「へっ?」

「私のせいで怪我をさせちゃって」

いくら自分が正気を保ってなかったと言って、許される行為ではな
い。

私は必死で謝った。

「・・・・・・・・」

女？の人？はゆっくりと私に近づいてくる。そして、私の前で止まった。

そして、手をのばしてきた。

ぶたれる。

そう、思つて歯を食いしばる。しかし、その必用は無かった。のばされた手は私の頭の上に置かれたのだ。そのまま優しくポンポンと叩かれた。

「へ？」

「気にすんな。お前が正気になつて良かったよ。悪かったな吹っ飛ばしちやつて」

予想外の行動で戸惑うが許してもらえたようだ。

それにしても、不思議な人だな。自分よりも他人を優先する。殺そうとしていた私を助けるなんて。

「えっと、フランでいいんだな？」

「うん。アナタは？」

「俺は天童拓也だ」

「拓也・・・男みたいな名前」

「男だから」

「えっ!？」

「今はこんなふうになつてるけど男だ」

男の人だつたんだ。びっくりしちやつた。

優しいな。不思議だな。一緒にいると心がポカポカする。昔、お姉様と一緒にいる時もこんな気持ちだったな。

「じゃあ、お前のお姉様のところに行くぞ。それで、仲直りしてこい」

「うん!!拓也お兄様」

「よし!!——ん?えっ!!」



結果から言つて。レミリアとフランは仲直り出来た。

俺とフランがレミリアのところに行った時は霊夢がレミリアを倒していた。

レミリアと霊夢に誰? って顔されて説明したら、霊夢に爆笑された。解せぬ

そのあと、フランが自分のレミリアと一緒にいたいと言う気持ちを伝えて完了。

俺の出る幕は無かった。やっぱり仲がいいっていいね。

フランにお兄様って、呼ばれた時はびっくりしたな。信頼を込めて、て感じらしいけど。まあ、嫌な気はしないからいいか。

けっしてロリコンではないからな!!

そのあと、レミリアに「私もお兄様と呼んだ方がいいかしら」とかわれた。あんたなんでそんな初対面の人からかえるんだよ!!

とりあえず、この異変は終了だ。

そのうち紫が名前をつけるだろ。宴会もやるそうだしその時は行かないとな。

最終話

幻想郷は今日も賑やかだ

「宴会だああああ!!」

今日は、紅魔異変の宴会に来ている。

ちなみに、陽菜は向こうに置いてこつそり来た。宴会やるにしても来るのは、ほとんど妖怪や妖精らしいから念の為にね。

正直、喧嘩等に巻き込まれたくないが美味しい料理の誘惑には勝てなかった。

「おっ、来たわね拓也。ちよつと手伝いなさい」

「何でだよ霊夢。俺は手伝いに来たのではなく美味しい飯を食べきたのだ」

「手伝わないならあんたに出すものは無いわよ」

「分かったよ、手伝えばいいんだろ」

霊夢からシートを受け取り広げる。.....デカイシートだな。何人くるんだ？



よし。やっとシートをひき終わったな。

「お兄様ああああ!!」

「おっ！フラン——グッへえ!?!」

声の方へ振り返った瞬間、勢いよく飛んでいきたフランがお腹に刺さる。

なんか、前にもあった気がする.....

「あつ、お兄様大丈夫?」

「おく、大丈夫大丈夫。肋数本いったけど大丈夫」

「大丈夫じゃないよそれ!!」

「嘘だよ」

涙目で睨んでくるフランの頭を撫でてやる。するとすぐさま笑顔になり「えへへへ」と声をもらした。

何この生き物可愛い。

「相変わらずフランに好かれているわね」

「まあね。レミリア、そっちは最近仲良くしてるか」

「おかげさまでね」

日傘をさしたレミリアが近づいてきて軽く挨拶を交わす。どうやら姉妹仲は良好のようだ。

少し話してから俺は、スカーレット姉妹と分かれて宴会の準備を進めた。



さて、そろそろ宴会も始まりそうだな。
にしても見事に妖怪、妖精ばっかだな。

「あら、お久しぶりね」

「へ？」

急に後ろから声をかけられて振り向くとそこには見覚えのある女性がいた。

緑の髪に赤の瞳。右手にはピンク色の日傘が握られていた。

そう、後ろにいたのは。向日葵畑にいた硬い傘のおねえさん。風見幽香だった。

「Oh」

「そんなに嫌な顔しないでよ」

「嫌な顔するなっていう方が無理だよ。人生であった嫌なことトップ30には入るからな」

「随分と低いわね」

「めんどくさいのに絡まれたな。どうしよう、また戦い挑まれたら。昔ほど強くないぞ俺。」

「ねえ、ここであったのも何かの縁だし。もう一度戦いませよ」

「いやだよ!!もう一度戦うための縁なんていらさないよ」

「ふふふふ、それは残念。また、機会があつたら戦いましょ」

「いやだよ!!あんとと戦つたら命がいくらあつても足りないわ。
そう心の中でいいながら風見幽香の後ろ姿を見送った。」



宴会が始まり周りが賑やかになってきた。妖精や妖怪達が歌い踊り宴会を楽しんでいる。

「楽しんでますか?」

「神社の縁側で料理を食べていると後ろに隙間が開き紫が現れた。」

「ああ、楽しんでるよ」

「それは良かったです」

「なあ、紫。何で幻想郷を作つたんだ」

「そうですね。作りたかつたんです。人も妖怪も妖精も神も関係なく
いられる場所を」

「そっか。よし!今日は飲むぞ!!付き合ってくれよゆかりん」

「ゆかりんは止めてください!わかりましたお付き合いしましょう」

幻想郷は今日も賑やかだった。

オリキヤラまとめ

天童 拓也 (てんどうたくや)

能力：『能力を操る程度の能力』

性別 男 身長 165cm

種族 人？

年齢

不明

- ・ 基礎能力アップ

基礎能力値を上げる能力。

(力)

すべての能力値を1.5アップさせる

(攻)

攻撃力アップさせる

(守)

防御力アップさせる

(速)

速度アップさせる

(技)

技術の模倣する

(能)

特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで。

- ・ 能力模倣

いくつかの条件を満たせば相手の能力が使える。

「能力の認識・能力名の認知・使用者に3分以上触れた事がある」

一度に使えるのは一つまで。

持続時間は三分。

- ・ 能力停止

相手の能力を停止させる。

相手の能力が分かっている場合使用不可。

自分も能力が使えなくなる。

- ・ 付与

能力を対象の物、人に付けることができる。

- ・ 回復能力アップ

回復能力を一時的に上げる。

体力を使うため疲れると、効力が落ちる。

《体内》

「御影 闇（みかげ やみ）」

『影を操る程度の能力』

人狼の女の子？の力が封印されている状態。

《持ち物》

「鈴の腕輪」

『金属を操る程度の能力』

音無鈴が付けていた腕輪。拓也が誕生日に贈ったもの。

「妖刀村正」

『妖力を増加させる程度の能力』

妖怪の山に祀られていた妖刀。

《ひとこと》

「だいぶパワーダウンしたな。どうかして、この封印を解かないとな。」

天童 陽菜（てんどう ひな）

能力：『開閉を操る程度の能力』

性別 女 身長 159cm 種族 人 年齢 1

5

鍵穴など目に見えるものの開閉が出来る。心や空間、結界などは、まだ練習中。

鍵の開閉・傷の開閉 口の開閉などが出来る。

《ひとこと》

「お兄ちゃんの封印が解けるように頑張ります」

《拓也が所属していたチーム7班》

音無 凜（おとなしりん）

『金属を操る程度の能力』

剛力 要 (ごうりきかなめ)

『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』

薬師 恵 (やくしめぐみ)

『傷を癒す程度の能力』

《チーム7班の教官》

草壁 緑 (くさかべ みどり)

『植物を操る程度の能力』

《拓也の同期のチーム5班》

墨野 絵里 (すみの えり)

『絵を具現化する程度の能力』

生糸 小鞠 (きいと こまり)

『繊維を操る程度の能力』

原 子穂 (はら しほ)

『原子を操る程度の能力』

夢彩 結 (いぶき ゆい)

『五感を繋ぐ程度の能力』

《拓也が教官を務めたチーム》

美紙 彩 (みかみ あや)

『紙を操る程度の能力』

渋谷 霧栄 (しぶや きりえ)

『霧を操る程度の能力』

剛力 円 (ごうりき まどか)

『ありとあらゆる物を遮る程度の能力』

音無 響 (おとなし ひびき)

『音を操る程度の能力』

《妖怪》

劣鬼（れつき）

『劣化させる程度の能力』

重鬼（じゅうき）

『重力を操る程度の能力』

灰色の男（名前不明）

『天災を操る程度の能力』

グレイ・スモーク

『煙を操る程度の能力』

天魔

『空気を操る程度の能力』

《神》

月明 光（つきあかり ひかり）

『光を司る程度の能力』

《人間》

《クラスメイト》

化野言音（あだしの ことね）

楠 陸斗（くすのき りくと）

海堂 闌（かいどう らん）

《先生》

神薙 巫月（かんなぎ みつき）

水戸 瑞稀（みと みずき）